
アニメのお仕事

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメのお仕事

【Zコード】

N7465C

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

五人のアニメ・スタッフが迷い込んだのは不思議な異世界。そこでかれらが体験する奇妙な冒險。なぜアニメのスタッフが異世界に連れ去られることになつたのか?そこでかれらの役割は?でも、これってファンタジー?それはあなたが判断なさつてください。

プロローグ 召喚（前書き）

都内某所にあるアニメ・スタジオでは非常事態がおきていた。打ち合わせのため集合した五人のアニメ・スタッフは、そこで奇妙な出来事に遭遇する。

プロローグ 召喚

「おー、三村くん。時間だぞ。起きてくれ」

美術監督の山田栄治の声に三村健介はおきあがつた。

キャラスターつきの椅子を三つ並べたうえに三村は横になり、毛布をあたまからかぶり眠り込んでいた。

「ああ、どうも。そんな時間すか……」

ふああ、と三村はあくびをすると、背中をのばし肩の関節をぽきぽきと鳴らした。すっかり全身が凝っていた。監督の山田はそんな三村をあきれたように見下ろした。

「よくそんなとこで寝られるなあ」

「いやあ、なれですよ」

じつさいなれといつのはおそろしい。じつしてスタジオの制作室で、とまりこみ寝るところがないため椅子をならべてそのうえに眠り込むようになつてかなりの期間がたつていてる。最初は眠り込んだ瞬間、椅子を無意識にずらして床にころげおちていたが、いまではすっかり熟睡することができ、椅子をずらすこともない。アパートはあるにはあるが、せいぜい一月に一度か二度帰るだけで、たまに布団をしいて寝るとかえつて目が覚えてしまつくらいだ。

まったくアニメの制作進行というのは因果な商売だ。

ここは都内某所にあるアニメの制作会社「タップ」の制作室である。会社がはいつて建物はもとは倉庫としてつかわれていたらしく、一階の天井はやけに高く、二階と三階にあるスタッフの部屋はプレハブに毛がはえたようなつくりになつていてる。

「タップ」は中堅のアニメ制作会社で、おもにテレビ・シリーズの制作を請け負つててる。一階の制作室には制作進行のデスクとコンピューターがならんでる。最近のテレビ・アニメはほとんどコンピューターで制作されるので、数年前スタジオはかなり無理をしてそれに対応したのだ。

立ち上がった三村は山田を見下ろす格好になる。三村は身長百九十センチちかい長身で、山田は百六十センチあるかないかで体重は八十キロというテープなのでどうしても映画の「スター・ウォーズ」にでてくるC-3POとR2-D2のコンビのようになる。

三村は手首の腕時計をながめた。

夜中の十一時すぎをまわっている。

「木戸監督は？」

「まだうえだよ」

山田は天井を見上げた。三村はうなずいた。

「そうですか……。それでほかのみなさんは？」

「打ち合わせ室でまつてるよ」

「すいません。それじゃそろそろ監督をよんできますんで……」

三村はもううらりとした意識のまま階段をのぼつていった。その背中に山田は声をかけた。

「あのさあ、言いたくないんだが。今日中にほんとに打ち合わせできるんだろうね？ みんな待ちくたびれているんだが」

すみません、待つてくださいとつぶやいて三村は階段をあがつていった。

一階から一階への階段はやけにながい。一階の天井がひどく高いので、階段もながくなる。三村は階段のさきのドアを見上げた。

「演出部」とある。

そこには総監督の木戸がとまりこんでコンテをきつてているはずだ。コンテとはアニメ映画で基本的な設計図にあたり、シナリオとともにカットごとの画面を設定し、あるいはキャラクターの動きを指定するものだ。それがないとアニメの制作ははじまらない。

制作会社「タップ」は来春放映予定のテレビ・シリーズ「パックの冒険」の製作にはいっていた。いまは年末で、放映までは二ヶ月とすこししかない。

ふつうはこういうスケジュールではすでにストック用に数本できあがつてこるはずなのだが、ずれにずれていまだに第一話の制作に

もはいつていなない始末だ。

原因是総監督の木戸純一にある。

木戸がテレビ・シリーズの総監督に就任したのはこの「パックの冒険」が最初で、しかも原作は木戸のものだった。

もともとかれは作画監督だった。

木戸が学生時分、自費出版の漫画を発表したことが発端である。その漫画が「パックの冒険」の原作である。そのとき発表した漫画は冒頭部分だけで結局しおりきれとんぼに終わつたが、その画力に注目したのはアニメ業界であった。

そのころ木戸はじぶんの漫画の能力に疑問をもつていたこともあり、アニメのキャラクター設定などでアニメ業界に飛び込んだ。それが大成功だった。木戸は画力はあつたが、ストーリーをつくる能力はなかつたのである。

そのうち木戸の名前が専門誌で知れ渡るようになって、かれが学生のときに発表した漫画を再発見したマニアのなかでその漫画をアニメにしてほしいという声が澎湃とあがつてきたのである。

その声に専門誌がこたえ、数社のスポンサーがなりをあげ制作が決定された。

総監督には原作者の木戸が就任した。

最初のうち制作はとんとん拍子に進行した。なにしろ総監督が原作者をかね、しかももともと作画監督でもある。キャラクター設定から美術設定、色指定など制作のかなめとなる絵はどんどんとあがつていった。

ただしストーリー構成になるとそれが暗礁にのりあげた。

木戸はさきにのべたように画力はあるがストーリーをつくるという力はあまりない。しかし原作者であるというプライドはあり、そのためシナリオ・ライターと何度もストーリーについて衝突することになる。

ライターがあげてくるシナリオの案を何度も何度も木戸は書き直させ、ついにはメインのシナリオ・ライターが腹をたてこのシリー

ズからみずから降板を申し立てる騒ぎになってしまったのである。

木戸はどぎきりのトラブル・メーカーであることを証明したのである。

何度もプロデューサーと話し合ひをもうけ、ついに木戸はじぶんでシナリオをかねると宣言することになった。

その時点で制作をまかされていた三村は不安になっていた。

これはスケジュール通りにあがらないので?

その不安は的中した。

シリーズの第一話となるシナリオがいつまでたってもあがらず、木戸はついにシナリオなしでいきなり第一話のコンテをきると言ひ出したのである。

それが二ヶ月前のことだ。すでに制作スケジュールはどしそうもないほど遅れていた。「タップ」の社長であるプロデューサーは八方手をつくしてようやく放映予定をのばすことにスポンサーや代理店の同意をもらっていた。

そして今夜、第一話の打ち合わせがメインとなるスタッフとおんなわれるはずであった。そのため、今夜はぜつしても第一話のコンテが必要なのだ。

念を押した三村に、木戸は大丈夫。絶対今日中までにコンテをあげるからと約束した。その約束をあてにして三村はかれをおこしにきた美術監督の山田、作画監督の市川、色指定の宮元の三人を招集したのである。

演出部のドアのまえにたつた三村はノックをした。

「監督……。三村です。木戸さん。どうですか、コンテをいただきにあがつたんですが」

返事はない。

三村は眉をひそめた。

まさか。

いやな予感がした。

ふとほかの作品で、絵があがらず回収直前に逃げ出したスタッフ

のことを思い出した。

まさかそんなことあるわけないよな……。

どんどんと三村はやや強めにノックした。

ドアの向こうでくぐもった返事がした。

ふうひひ、と三村は安堵のため息をついた。

大丈夫、逃げ出したりはしていない。木戸はいる。

「監督、はいりますよ…」

ドアノブを握る。

動かない。

え？

なかから鍵がかかっていた。

「雨になるかなあ」

作画監督の市川はつぶやいた。

窓の外は闇である。

空は雲がたれさがり、星はみえない。その雲間から稻光がときどき遠く光っているのが見えている。音は聞こえていない。

一階の会議室である。

ここに「パックの冒険」のメイン・スタッフが第一話の打ち合わせをおこなうため集められていた。

十畳ほどの部屋に会議用の机と椅子。それに完成したアニメを鑑賞するための三十インチのモニター。資料がおさめられているスチール棚。

机のうえには「パックの冒険」の設定資料の「コピーが人数分用意されていた。

キャラクター表は中世ヨーロッパ風の衣装に身を包んだキャラクターが精緻な線で描かれている。そのキャラクターにコンピュータで着色された色指定表がプリント・アウトされてならべられていた。

作画監督の市川努。二十一才。一般にアニメのスタッフは若い人

間でしめられてはいるがかれはそのなかでもどびきり若くて作画監督になつた。なにしろアニメ業界にどびこんだのが中学を卒業してすぐである。若くともこの業界ではベテランといわれる年数をすごしている。身長百七十センチそこそこで体重は五十キロあるかないかで、いまにも餓死しそうに見えるほどやせている。気が短く皮肉屋である。

「雨になるつて……ほんと?」

それまで漫画を読んでいた宮元洋子は眉をひそめた。

彼女の仕事は色指定である。年令は三十二才。そのわりに小柄で童顔ということもあります。へたをすると中学生に間違えられることがある。アニメがセルとよばれる透明のシートに特殊な絵の具で色を塗つていたころからアニメの仕事をしていて、いつも場違いなほど少女趣味の服を身につけている。その見かけからつい人は彼女の性格を見誤るというあやまちをおかす。じつは彼女は男勝りというか、かなり勝気でどんな相手にもつつかかる猪のような性格の持ち主である。彼女に怒鳴りつけられたスタッフは数人どころではきかない。三村もまた彼女に怒鳴りつけられた経験がある。

「まいつたなあ。帰りの電車あるかなあ」

ぼやいた山田に市川はふりむいた。

「あれ、山田さん。今日は車じゃないんですか?」

「車検でね……。こんなことなら代車を借りるんだった」

山田はため息をついた。

椅子にすわる三田はあごひげをのばし、長く伸びた髪の毛を後頭部でむすんでいることもあつてファンタジー小説に登場するドワーフのよう見える。

と、かれのポケットのなかから携帯電話の呼び出し音がきこえてくる。あわてて山田は携帯をとりだし、画面を見つめた。

「かみさんからのメールだよ。やれやれ」

じつい指で返信をしている山田を市川はおかしそうに見つめた。

「山田さん、すっかりメールを使うことになれたみたいですね」

山田は肩をすくめた。

「じょうがねえよ。おれはこんなのがんのだがな」

「山田は四十一才。」のなかで最年長である。

「じゅうじゅうね……。

遠雷が聞こえ、三人はおもわず顔を見合せた。

「おー、ほんとうに降つてきそつじやないか」

「いやだあ。あたし傘をもつてきてないのよ」

喝つ……。

一瞬、あおじろいひかりが会議室をみたした。

「さやあー！」

洋子が悲鳴をあげた。

「どーん……。

雷鳴がとどろく。

「おーおー……」

山田と市川が心配そうに窓にかけより空を見上げた。

どんよりとたれこめた雲間から稲妻が光つている。

風もでてきたようだ。街路樹が風でなびき、電線がひゅうひゅう

と風きり音をたてていた。

「じょうだんじやないぞ。こんな夜中までひきとめられて、帰れなくなつたらどうするんだー！」

市川がつぶやいた。

「木戸さんー、いいかげんにしてくださいよー！」

天井から三村の怒鳴る声が聞こえてきた。市川は上を見上げた。

「なんだあ？」

「三村くんだ。さつき監督のといひへあがつていつたんだが」

山田の言葉に市川は反応した。

「行つて見よー」

「行くつて、上かい？」

「やうや。なにか妙だと思いませんか？」

「うん、と山田は生返事をした。なににしても山田は決断がおそい。

「行きましょ。」ここにしてもしょづがないわよ」

洋子が立ち上がり、会議室のドアを開けて出て行った。彼女のあとを市川と市川はあわてて追いかけた。

「どんどんどん……。
どんどんどん……。

三村が必死になつて演出部のドアを叩いていた。

「監督！ 開けてください！」

ドアを叩きつつ、三村はドアノブをがちやがちやと音をたててまわしている。すっかりとりみだしているようだ。
そこへ洋子を先頭に三人が階段を登つてきた。

「おい、三村くん。なにしてんの？」

「あ、山田さん」

ふりかえつた三村の顔は蒼白になつていた。

「たいへんです！ 監督がなかからドアに鍵を……。
「なにい？」

市川がそのやせた体を前に運んだ。

「鍵をかけたつて、つまり立てこもつてことか」

「ええ、まあ……」

「どうこつことなの？ 今夜の打ち合わせどつなのよ
洋子が足をふみならしてたけんだ。

「ひつなつたらドアをぶちやぶるんだ」

市川の言葉に全員が目を丸くした。

「ちょっと市川くん……」

眉をひそめた山田に市川はかみつくように話しかけた。

「しようがないでしょ。このままじゃ打ち合わせなんかできつこないし、へたすりや放映すらあぶない。つまりこの作品がお蔵入りする可能性もあるってことだ。それならそれではやく結果を知りたいし、あとのこともある。そうだな、三村くん。」ひして手をこまねいてもなんにもならなによ」

三村はゆつくつとうなずいた。

「そうですね……。ドアのことまあとで社長に話すときもさから……」

「よし、それじゃ決まりだな！」

市川が身構えた。

そのわきに洋子、山田、三村がならんだ。

「よつし……それじゃいち、にい、さん、で行くからな」

そう言つと市川は息をすうと「いち、にい……」と数をがぞえはじめた。

「さん！」

市川がさけんで全員ドアにむけて体当たりをする。

「あんっ！」

ドアがはじけとび、四人は演出部屋になだれこんだ。

「木戸さんっ！」

三村が悲鳴をあげた。

演出部屋は事実上、木戸の個室といつてもいい。もともとおおきな部屋を木戸のためにパーティションをきり、約四畳半くらいのひろさをとつていて。窓の傍におおきめの動画机があり、ドアのちかくには資料用のスチール棚がある。机の横にはカラー・ボックスがあり、そのうえに木戸が作品の参考にするためにビデオ内臓の小型テレビがおかれ、何本ものビデオやDVDが積み上げられていた。

監督の木戸は動画机を背に、椅子に腰かけていた。

年令三十六。

がつちりとした体型で、頭は五分刈りにしている。度の強いメタル・フレームの眼鏡をかけぼうぜんとした表情で部屋に乱入してきた四人を見上げていた。

床には一面に書き損じのコンテ用紙が散乱し、くずかごには反古になつた紙くずがいっぱいになつていた。その紙くずだらけの部屋のなかを市川がずい、とばかりに足をふみいれて動画机に近づいた。手を伸ばし、書きかけのコンテをつかむ。ぱらぱらとめぐり枚数を

かぞえはじめた。

「ひい、ふう、みい……なんだ、たつた三枚しかあがつてない」

「三枚ですってえ！」

三村が悲鳴をあげた。

「木戸さんっ！ 今日中にコントがあがるからって約束したじゃないですか。どうすんですかつ？」

「え……」

ゆつくつと木戸は顔をあげ、三村を見上げた。眼鏡のおぐのふたつの目はなにも見ていないようだ。

「コンテですよっ！ 今日中に打ち合せやらないと放映に間に合わないって、あんなに言つたでしょ。いままでなにやつてたんですね」窓が青白くひかつた。

一瞬の静寂ののち、ぱりぱりぱりと雷鳴がどびりこった。

ぴしゃーんっ……。

どこかに落雷があつたのだろうか。

あまりのことに反応していないのかわからない、といったところか。

壁にはホワイト・ボードが掛けられそこにはスケジュール表が書かれている。何度も書き直されたあとがあり、真っ赤な字で放映日時が表のおわりに書かれている。その放映日時にむけ全員が作業を進めなくてはならないのだが、それもコンテあつての話である。その前提がすべて崩れたのである。

もうどうしようもない。

どうしようかなあ……、と山田は考えていた。この「パックの冒

険」の話が来てかれはほかのシリーズの誘いを断っていた。どうせん、「パックの冒険」は放映不可能と見てよく、そうなれば飯を食うためにほかの仕事をさがさなくてはならない。かれは知り合いの制作会社のプロデューサーや、制作デスクの顔を思い浮かべた。このぎりぎりの状況の中、どの会社がおれに仕事をまわしてくれるか

なあ……。まあ美術監督の仕事がなくとも背景をやればなんとか糊口をしのぐことはできるか……。

まつたくなんてこつた……。

市川は腹をたてていた。この業界にはじって七年、この木戸に市川は仕事を教えてもらつていると云つてもよく、その木戸が総監督になるということで作画監督をひきつけたのだがこんな無責任な男とは思わなかつた。

今まで腕は認められていたがこの「パックの冒険」でステップアップできると田舎んでいたのに木戸のせいで棒に振ることになるのだ。

あーあ、こんなことになるんぢやないかと思つてた。

洋子はひそかにひとりじめた。彼女は「タップ」専属の色指定スタッフで、木戸とは何度もいろんな作品をつきあつていた。そのころ木戸は作画監督だつたが、腕はあるが仕事について自分勝手な男だと思っていたから、こんどの総監督就任についてはあやぶんでいたのである。

「木戸さんつ！　どうするんですかっ！」

おおおおおと三村は木戸につめよつていた。木戸はほうけたような顔で見あげた。その目からぼろぼろと涙がふきこぼれた。

「ど、どうしようもなかつたんだよお……」

ふらり、と木戸は立ち上がつた。その両手がわなわなと震えている。

「え？」と全員が木戸の口元を見つめた。

なにを言い出すつもりか。

木戸はのめりこむような姿勢で喋りだした。

「最初はおれがシナリオを書くつもりだつたんだ。その自信もあつた！　だつてそつだる、おれの描いた漫画が原作なんだもの……。そりや最初に同人誌で描いたやつはしりきれとんぼだよ。でもずーっとおれ、あの物語のつづきを考えていたんだ。それが……それが

……

「うう……、と木戸は両手で顔をおおつた。

「でもできねえ！ おれにはシナリオ書けねえ……。なんどもコノ
テを描き直したんだけど、どうしてもやきに進まないんだ……」

ぴかっ、と窓がまっしろに光つた。

ぐわらぐわら……と、雷鳴がひびきわたる。

「どうすりやいいんだ、だれか助けてくれよつー もつ、神でも悪
魔でもいいからだれか助けてくれつー……」

もう一度窓の外がひかつた。

こんどはさらに強烈だつた。

青白い光が部屋のすみずみまで照らし出した。

！

「の稻光は奇妙だつた。

一瞬の光のはずがまるで時間がひきのばされたようになつまでも
光つてゐる。

全員の動きがとまつた。

いや、とまつたといつより動けないのだ。

髪の毛一本、指先ひとつぴくりとも動かない。

どうなつてゐる……？

みなその瞬間に凍りついたかのようだつた。一瞬が永遠に変えら
れていた。しらじりとした光が部屋に満ちた。

「あんたらの願い、かなえまひよ……」

と、奇妙な”声”が聞こえてきた。なぜかその”声”は大阪弁だ
つた。

「あんたら困つてゐんやろ。ほんならわてがなんとかしまつたかい、
あんたらもきばりなはれ」

だれだ、だれが喋つてる？

身動きができないまま三村は必死に考えた。なにか異常なことが
おきていることはわかるが理解ができない。その”声”はまるで三
村の頭のなかで聞こえてくるかのようだつた。

……どうしたこと？ あたし、雷に打たれて死んだのかしら……？

洋子の声だつた。

……洋子くん、さみか！

これは山田の声。

動けねえ！ じりなつてゐる？

市川の声だつた。

知らない、知らない……おれのせいじゃないつ！

木戸の切羽詰つた声。

かれらの声が交錯しているが、全員彫像になつたように動いてはいない。指一本動かせないまま、思考だけが独立してゐるようだつた。

「静かにしなはれ！」

『いらいらしたような』声があたりを圧した。『声』はつづけた。
「まつたく、あんたらのせいやで……。まあ、もともとはそこの監督はんのせいでもあるんやけど……。最初、監督はんがマンガを描いたあたりはよろしかつたんねん。尻切れトンボに終わつただけで、実害はあんまりなかつたんやけどな。ところがファンという連中がどんな勘違いか、あれを持ち上げよつてよつてたかつてとうとう『世界』を誕生させてしまつた……それでわしが呼ばれたんですね。
ほんまに迷惑やで」

『声』にはうんざりしたといった口調があつた。

『しゃあけど誕生してしもうた』世界はどうしようもでけへんしな……このままほっぽいて黙つてみているのもでけるんやけど、それはあの『世界』で生きている連中があわれや。あんたら、なんとか辻褄あわせとこつやつをやつてくれんか？ ひとつこの『世界』を救つてほしいんや。それがこのあんたらのピンチをチャンスに変える唯一の方法なんやで』

……おれたちになにをやれつていうんだ？

市川が虚空にむかつて怒鳴つた。といつてもかれの身体はぴくりとも動かず、口元も凍りついたままである。

『あんたらの仕事をつづければえんや。そうすれば、すべてうま

「こゝこや」

山田せひとづいた。

……おれたちの仕事?

……おれたちはただのアニメのスタッフだぞ。それがなんで世界を救うことになるんだ?

「やつや、あんたちはアニメのスタッフや……その職分をわすれん！」とや……」

あたしたちになにをやれつてこいのよー それにあんたはいったい誰?

洋子の憤然とした思考。

”頼”はつぶやくような口調でそれにこしたえた。

「わてのことなどじつでもよろじ。あんたのせこでえらい迷惑や……。やれやれ、いんないことにわてが乗り出すのも、あんたらがぼやぼやしこねからやで……。わあ、楽にしなはれ……」

光がせりに強烈にかがやいた。その光は田の奥にむかひこんでくるゆづで、視界は完全にひばはれてしまつた。

わああああああ……。

声にならない叫びをあげ、全員は氣を失つた。

邂逅（前書き）

五人は奇妙な世界で目覚める。その世界とは……。

光が踊っている。

ぼんやりとした光がちかちかとまたたき、市川は田を開けた。かれは仰向けになつていた。

その顔にうえから光が降り注いでくる。まぶしいことはたしかだが、田をさすほどではない。光はすこし縁がついているようだ。ちちち……。

鳥の声だ。小鳥が鳴き交わしている。

ぱちぱちとまぶたを動かし、ようやく視界がはつきりとしてきた。そこで市川は自分が何を見上げているのかわかつた。

樹だ。

かれの上に樹木が枝をのばし、その葉むらから田の光がさしこんでくるのだ。わずかな風が葉をゆらし、その葉のあいだにのぞいた空から日差しがこぼれてくる。

市川は上体をおこした。

まわりを見回すと、そこは森のなかだつた。と、いつてもそうふかい森ではない。樹の間からひろびろとした草原が田の届く限り広がつているのが見える。

どこだ、ここは？

そこで市川は自分の足元を見た。

なんだこりゃ。

今まで自分が履いていたのはスニーカーのはずだが、どういうわけかいまはやわらかそうな革のブーツを履いている。足を動かすとちやりちやりという音がした。かかとのあたりに拍車がついている。

立ち上がるとがちやり、といつ音が腰のあたりで響く。

なんだろうと手をやるとなんだか硬くて、細長いものが手に触れた。

田をやると、なんと剣がぶらさがっているのが見えた。それも西洋風の、ファンタジーに出てくるような、『じこじこ』とした装飾がほどこされた幅広のものだ。

剣？

まさかと思いかれば柄をにぎつてその剣を抜いて見た。

青白い刀身が鞘走り、日の光を反射してぎらりと輝いた。刃は諸刃である。刀身はぴかぴかに磨かれ、市川の顔が映っている。手に伝わってくる重みはそれが本物であることを主張していた。

かれは刀身に指をちかづけた。

痛つ！

刃はするどく、指をちょっと押し当てただけで皮膚にぶつくりとあかい血玉がふくれてきた。

そこで市川は自分が身につけているものに気がついた。背中に真っ赤なマントがひるがえり、腰にはふといベルト、ズボンのすそは革のブーツにたくしこまれている。まるで中世ヨーロッパの騎士といった格好だ。

なんでこんなもの身につけているんだ？

無意識にかれは手にした剣を鞘におさめた。

おさめたあとで気がついた。

じつに自分は自然に剣をあつかっている。かれは昔見た映画の一場面を思い出した。それは昔の武士が刀のあつかいを学習する場面で、真剣を鞘からぬくのも、おさめるのもきわめて危険な動作で、それを自然におこなうまで修練が必要なのである。うつかり真剣をあつかうと、刃で指を切つたりするのである。それをかれは無意識におこなっている。もちろんそんな練習などしたことない。それにここはどじだろ？

市川は歩き出した。あてはない。

と、一本の老木の根本あたりにひとりの男が寝転んでいるのを見つけた。

太つたあの姿は山田らしい。

近寄るとかれもまた市川におとらず奇妙な格好をしている。

山田の頭にはバイキングが身につけている兜をかぶり、ベルトが肩から腰へたすきがけにまかれている。足元も市川の履いているよな革のブーツだ。腰には剣ではなく両刃の斧がさげられてこる。

「山田さん、山田さん」

市川が声をかけると山田はかすかに身動きをした。

ぱちぱちとまぶたが開くと、その視線が市川にとまつた。

「市川くんか……」

のつそりとおきあがるとほひぜんとあたりを見回す。

「なんだこりやあ、いつたこりはどいだい」

「それはおれが知りたいですよ。田が覚めたらこりにいたんですねにがあつたんだろ」

山田は市川の格好を見てふきだした。

「市川くん、なんて格好してこるんだ。なにかのマスプレなのか?」

「山田さんだつて……」

「おれかい?」

そこでやつと山田は自分が身につけているものに気がついたようだつた。

「な、なんだこりやあ!」

市川はつぶやいた。

「ほかの連中はどいなんだれい」

市川に言われ、山田もそれに気がついたようだつた。

「そういや、そうだ。三村くんと西元さん。それに木戸監督のすがたが見えないな」

「さがしにこましようか。それともこじこまますか」

「ちょっと教えて山田はいたえた。

「さがしに行こりよ。じつあこじこじこじこじこじこじこじこまわからん」

ふたりは歩を出した。

やがてふたりは川のほとりに近づいた。水音が聞こえてそれを見つけたのである。水流ははやく、水の底まで見える透明さだつた。

その水面を見つけて市川と山田のふたりはよつやく自分たちがから
かに喉がかわいでいることに気がついた。

歓声を上げ、ふたりは水面ちかくにひざをついて西田の手のひら
をつかって水をすくって喉をうるおした。

「うめえ！」

山田がうめいた。そこで市川は川の近くに横たわる人影に気づいた。

「あれ、富元さんじやないですか？」

市川がゆびをした。山田は同意した。

「ああ、たしかにあれは洋子くんだ。それにしてもはでな格好だな
彼女は草むらにあおむけになつていて。彼女もまた中世ヨーロッ
パ風の衣装を身につけているが、それが身につけているといえるか
どうか。なぜならその衣装は布地をぎりぎりまで節約しているもの
で、わずかな布切れが胸と腰をおおっているだけで、手甲とひざま
である長靴を身につけていた。

「洋子くん、ちよつと……」

ちよつと、とこゝのは変であるが山田は彼女が目が覚めたらびり
なるか考えて起こすのをためらっていた。なにしろ横たわる彼女の
すがたはどうにも刺激的で……。いや、そんなこと考えている場合
ではない。ともかく起きたこととつわけで山田は彼女の腕をゆ
りうごかした。

「洋子くん、洋子くん。起きてくれよ」

そのうちよつやく洋子は目が覚めたようだつた。そこで山田は思
い出した。彼女は低血圧で、起きぬけはひどく不機嫌になることを。
「なによつ……」

ひくい声でうめくとまつた、と山田を見上げた。

「なんだ、山田さんじやない……」

ぱちぱちとまぶたが動いた。よつやく頭がはつきつけてきたよう

だ。

「なに、その格好？ ロスプレー？」

みんなおなじ」とを言つなか、と市川は感心した。

「きみもおなじよつな格好だぜ」

市川に言われ洋子はじぶんのすがたを見下ろした。

「なにこれ！」

たちまち彼女はまつかになつた。さすがに自分のいまの格好が刺激的なのに気づいたのだろう。そのうち彼女の表情に怒りが浮かんできた。

「あんたたち……」

え？ と市川と山田は顔を見合させた。彼女の怒りが自分らにむけられているのはわかるが……。

「あたしにこんなもの着せて、なに考えているの？ なんの悪ふざけ？」

「おれたち？ まさか、そんな……」

山田はたじたじとなつた。彼女は自分たちがいたずらをしたと思つてゐる！

洋子は立ち上ると背中に手をやつた。

すらりと長剣をぬきはなつた。そのまま山田と市川へ突進してきた。

「おい、待てよ！」

市川が静止したが頭に血が上つてゐる彼女は耳をかむず、わあああ……、と喚声をあげて長剣をふりおろした。

ちやりいいん！

思わず市川は自分の剣をぬいて彼女のふりおろしてきた長剣を受け止めた。剣がかちあい、火花がちつた。鉄のやけるにおいがする。かん、かん、かん、とふたりは剣をかわした。山田はそんなふたりをぽかん、と口を開けて見つめていた。

「すげえ……」

ふたりの剣技は見事だった。

まるで舞をおどるよつて剣をふりおろし、横になぎ、ぎおつぎおつとのじりでかわす。

が、山田は思い直した。いけない、止めないと。

「おい、ふたりともやめろ！」

ふたりが剣をはっしとかわし飛び下がると同時に山田は翻つてはいつた。

それにもかかわらず洋子は無言で切りかかってくる。山田は無意識に腰の斧をぬき、刃をふりはらつた。

ぎこいにいん！

洋子の手から長剣が宙にとんだ。やうやく山田の光をはじけて輝くと、草原に飛んでぐさつと地面につきながつた。

洋子ははつ、と自分の両手を見つめた。

「あたし、なにやつてたんだら……」

ふう、と市川は息をはいた。

「殺されるかと思つたぜ」

そう言つとぱちん、と音をたてて剣を鞘にねりぬる。

洋子は首をふつている。

「あたし、あたし……、市川くんを本気で殺すつもりだった……。剣道なんか、やつたことなににあんなことじつじつできたんだろ

う

「おれだつてそうだ」

市川はどやりと地面にあぐらをかいた。

「おれだつて剣道なんて、高校の授業でひよつとかじつたくらうだ。それなのに体が勝手に動いて富元さんの剣をつけていた。まるで剣の達人みたいだつた」

「山田さんだつてそつよ。あたしの剣をはじきとばしたといひなんて、すゞくその斧を使い慣れていたみたい」

洋子に言われて山田はあらためて手にしていた斧を見つめた。

「そついや、そうだ。斧なんか握つたことない」

市川は口を開いた。

「なあ、おれたちの格好。どこかで見たことないか？」

え？ と山田と洋子は市川を見つめた。市川はためらいながらつ

づけた。

「そのう……、おれが描いた「パックの冒険」のキャラクター表で、登場人物が身につけている服装にそっくりだ、ってことなんだが……」

「あ、とふたりは顔を見合わせた。

「そうだ……。おれはあのシリーズに出てくるドワーフの親爺の格好そっくりなんだ。この斧もおれが持つてたやつだ」

山田は手にした斧を見つめた。

洋子もあらためて自分の服装を見下ろした。

「あたしもあのシリーズの女性主人公の格好だわ。そして市川くん……」

「そうだ。おれはパックの親友の服装だ。どういうこつたい。いたずらにしては手がこみすぎてないか。だいいち、あのキャラクター表はまだどこかの雑誌にも発表されていないはずだぜ。だれかがおれたちをかつぐ目的でこんな服装を用意したってわけか……。なんのためだ！ こんな作るには相当時間がかかるぜ。おれの着ているものはコスプレなんかで使われている衣装にしては本格的すぎら」市川はそこまで一気にしゃべり、息をきらした。山田と洋子はそんな市川をあっけにとられて見ていた。

「でも、あとふたりがいなうわね」

「そういえば、と山田がうなずいた。

「うん、三村くんと木戸さんだ。あの二人はどうしたんだ。やつぱりこのちかくにいるのか？」

そのとき、ぱかぱかぱかと馬の蹄の音が聞こえてきた。

なんだろうと顔をあげた三人はぽかんと口を開けた。

馬が近づいてくる。その馬には鞍があかれ、ひとりの人物が手綱をとつてている。

「なんとそれは三村だつた。

「三村くん……」

洋子が歩き出すと、馬上の三村はにっこりと笑いかけた。

「やあ、みなさん。目が覚めたんですね」

「ぼうぜんと三人は三村を見上げていた。

三村もまた三人とおなじく中世ヨーロッパ風の衣装を身につけていた。が、その趣向は三人とはちがい、どこかの王侯貴族の子弟、といった雰囲気だった。うすいブルーの縄の上着はそでがたっぷりとしていて、風になびくマントは裏地が赤にちかい紫、表地には手の込んだ刺繡でこみいした紋章が描かれている。かれもまた剣を腰にさげているが、かれのものは細いレイピアらしく、柄にほどこされている彫刻や装飾は金や宝石をたっぷりとつかつた贅沢なものだつた。

ひらりと三村は馬からおりると三人に話しかけた。

「最初に目が覚めたんですが、みなさんどうやつても目が覚めなくて……、それでちょっとあたりを調べていたんです」

山田が口を開いた。

「その馬はどうしたんだ？」

「ああ、これですか。いや、あたりを歩いていたらこの馬があらわれまして、どうこうわけがあとをついて離れないんですよ。それで歩くのも面倒なんで乗つてきたというわけです」

市川が手をのばして馬にさわろうとすると、馬はぶるるる……、と鼻をならしてその手をさけた。かつ、かつ、と蹄で地面をかいて市川を威嚇する。

「こいつは、きみ以外の人間には馴れないみたいだな」

「そうですかねえ」

洋子は三村を見上げた。

「でも三村くん、あんた馬術なんかいつ習つたの？ 馬に乗れるなんて聞いてないわよ」

「あ、と三村は頭に手をやつた。

「そういうや、どうして乗れたんだる？ 馬術なんて習つたことないのに」

三人はやつぱり、といった表情で顔を見合せた。

「あんただけじゃないわ。あたしたちだつてこんな格好で目覚めた
と思つたら、い今まで持つたことない剣を樂々扱えたりしたり……
そのとき洋子は三村の田つきに気づいた。

「なによつ……」

「いや……」

にやりと笑うと三村はさきをつづけた。

「富元さん、けつこうスタイルがいいんですね」

洋子はまつかになつた。

山田と市川もにやにや笑つてゐる。

ぱあん……、とこう音がひびいた。

三村の頬を洋子が張り倒したのだ。

「まったく、あんただちつてそんなことしか考えられないのつ！」

「いや、失礼した」

山田はまだにやにやしながら顎鬚をじいじいた。

「これからどうするか、つてことだよな。まずはじいじで井戸端会議
をしてもしかたないから、できたら人家をさがしたいところだな」

「それならちかくに村がありますよ」

三村の声に三人はかれを見た。

突然の注目に三村は頭をかいだ。

「この馬に乗つてあたりを走り回つていたんです。そしたらちいさ
な村とお城を見つけたんです。行つて見ようかと思つたんですけど、
みんなさんのことが心配で戻つてきたんです。その村とお城はまだ遠
くから眺めただけですが」

「ふうん、それなら行つてみるべきかもな」

市川の意見にみな賛成した。

「それじゃじつちですから……」

三村は馬の手綱をひいて歩き出した。

「ちょっと待つた！」

山田の声にみな足をとめた。

「木戸監督はどこにいるんだ？」

あ、と三人は顔を見合させた。

「三村くん、あなた、監督を見なかつたの？」

「いえ、最初に田覚めたときぼくが見つけたのはみなさんだけでした」

「ふむ……」

山田はゆつくりうなずいた。

「それが鍵かもしれないな。なぜここに木戸監督がいないのか？おれたち四人がいるのに……」

「どういうことですか」

市川が問い合わせると山田は首をふった。

「いや……、まだはつきりしない。ただの推測だよ。それもひどくばかげた考えなんで言いたくないんだ」

そんなあ……、と言いかけた洋子はふと空を見上げ田をまるくした。

「ちょっと、あれ……！」

彼女が指差し、みなその方向を見上げ、あつ、とせけんだ。

「竜だ……」

市川がつぶやいた。

たしかにそれは竜だった。

と、いつも東洋の蛇のような竜ではなく、西洋のファンタジーに登場する竜である。どつしりとした四肢をして、背中に巨大な羽根がはえ、その羽根をうちふつて空中を飛行している。高度は二、三百メートル上空だらうか、竜は悠然と飛行していた。

「すげえ……」

市川はどういうことか口元に笑いをつかべていた。

「とんでもないよ、なあ、あれ竜だよな！」

「ああ、たしかに竜だ」

竜を見つめる山田は反対に深刻な表情になっていた。

「あれはいっちへ来るんじゃないのか？」

山田の言つとおり、竜はかれらの方向を田指していくようだった。

その距離はみるみる縮まり、その細部が見分けられるよつこなつた。

「わわわわ……！」

みなあたふたとあわてて逃げ惑つた。

「おおおおおつ！」

かれらの上空を竜はぎりぎりで飛びすぎた。

洋子はぽかんとそれを見送つた。

「いつちやつたわよ……あたしたちが狙いじゃないみたい

「じゃあなにが狙いなんだ！」

市川がどなると竜の狙いはすぐ判明した。

かれらの立つている川にそつて街道が通つており、そこを一台の馬車が数人の護衛の騎兵とともに進んでいたのである。竜はその一行をまつじぐらに目指していた。

騎兵は竜が近づいてくるのを認めると、いっせいに槍をかまえた。きらきらとかれらのかざす穂先が日光を反射した。

「ずしりん……」と竜は地面に激突するように着陸すると、そのままのしのしと馬車に近づいていった。護衛の兵は馬を馬車のまわりに密集させ竜をまちかまえた。

「ぐおおおおおおつ！」

竜はものすごい雄たけびをあげた。その咆哮で騎兵が乗つている馬は驚いて棹立ちになつてしまつた。さすがに騎兵たちは馬から振り落とされはしなかつたが、それでも竜にむけていた槍の穂先がみだれた。竜はその間隙につつこむと、そのながい尻尾を思い切りふりまわした。

「わあ！」

騎兵たちは馬もろとも竜の尻尾になぎたおされた。かるびじてその攻撃をかわした兵は槍を水平にかまえ竜に突進した。

竜は大口をあけると騎兵の槍をがつきとくわえ頭を左右にふりまわした。騎兵の槍はその手元からもぎとられてしまつた。槍をなくした兵はあわてて腰の剣を鞘からぬきはなつたがときすでにおそく、竜がすぐそばに接近していた。

がぶり！

「きや！」

洋子はおもわず両手で田をふさいだ。

かれらの立つている場所からでも血しづきが見えた。竜が兵の首をぱつくとくわえてしまったのである。兵の死体はどうさりと地面に落馬した。

あとは殺戮だった。

竜は手当たりしだい、まだ生きている騎兵を襲い、つぎつぎとそのあぎとの犠牲にしていったのである。

ついに護衛の兵がいなくなり、馬車だけが取り残されていた。御者は竜が近づいてきた時点でとっくに逃げ出していた。

「三村くん！」

山田はぎょっとなった。なんと三村が無言でひいていた馬に飛び乗ると、そのわき腹をけつて駆け出したのである。

「なにをするつもりなんだ？」

「助けるつもりなんだわ」

洋子がさけんだ。

「ばかな！ あんな竜にひとりでたちむかいつもりか！」

「ど、どうすんだよ。山田さん。おれたちどうすりやいい？」

市川はすっかりうろたえていた。山田もおなじだった。

「どうすりやいいって……ええい！」

山田は斧をかまえた。そのまま走り出しつつ、三村のあとをあげ。市川と洋子は顔を見合わせた。

「畜生！ どうにでもなれつ！」

市川も剣をぬくと走り出した。洋子もあわててそのあとを追つた。

「わあああーっ！」

めちゃくちゃに剣をふりまわし、四人は竜に近づいた。

馬車にむかっていた竜はその声にふりむいた。

ぐるぐるぐる……！

竜は鼻先にしわをよせうなつた。

からだを接近してくる四人にむけるとどすと地面をふみながら歩き出す。身をひくつかまえ、首を地面すれすれにして全力疾走になった。

ぐおおおおおおおつ！

竜はおめいた。

先頭で馬を駈けさせていた三村はきらりと腰のレイピアをかざした。

竜がその口をあけ噛み付こうとする三村は寸前にかわし、竜の胸のあたりに剣先をぐさりとつきさした。

うがあつ！

竜は苦痛に顔をしかめた。しかし致命傷ではない。三村の攻撃はかえつて竜の闘争本能を刺激したみたいだつた。

怒りにわれをわされた竜は三村ひとりに攻撃を集中させた。三村はたくみに馬を御し、竜の攻撃を寸前でかわすとすきをみて剣先をつきさす。たちまち竜の全身の数箇所から血がふきだした。が、どちらも竜の動きをとめるにいたらない。

と、竜の口が三村の剣先をくわえてしまつた。

ぼきん、と音を立て三村のレイピアは根本からおれてしまつた。それを見て三村は蒼白になつた。

「わああああつ！」

そのときようやく山田たち三人が追いついた。

三人の喚声に竜はふと気を取られた。そのすきに三村は虎口を脱した。山田、市川、洋子の三人は竜にむけ武器をふりまわしてけん制した。

と、馬車のドアがひらきなから人影がとびおりた。女だつた。

彼女はながいスカートをひるがえし、地面にたおれていた騎兵の死体から槍をもぎとつた。

「これを…」

槍を三村めがけてほおりなげる。

「ありがと」

三村は槍を手をのばして受けたると、脇にかまえてふたたび竜に立ち向かった。

「はあっ！」

三村は拍車をならして馬を突進させた。馬蹄の音に竜はふたたび三村にむきなおった。その動きが絶妙のタイミングで三村のかまえる槍をむかえいれることになった。

ぐさり！

三村のかまえた槍の穂先は竜のわき腹にふかぶかとつきとさつた。

……！

竜の瞳がいっぽいに見開かれた。

口を開け咆哮しようとするのだが苦痛で声もない。

はははははは、とあえぐとそのままぐらりと倒れてしまった。

ずぼり、と竜のわき腹につけられていた槍を三村はひきぬいた。

その傷から噴水のよつて竜の血が噴き出しあたりにしみた。

「きやあ！」

洋子はおもわずとびのいたがそれでも竜の血をあたまからあびてしまつた。

地面にたおれた竜はびくんびくんと四肢を痙攣させ、やがてそれもなくなりぴくりとも動かなくなつた。

「死んだの？」

洋子はこわいわとのぞきこんだ。

「ああ、死んだみたいだ……」

あえきつつ山田はこたえた。ふたりは竜の死体を見下ろしていた。と、市川はきょとして飛びのいた。

「な、なんだこりや！」

横たわった竜の死体に変化が生じていた。

その皮膚にしわがよりみるみるミイラ化していく。緑色の皮膚の色が茶色に変わり、肉がおちて骨格があらわになる。やがてぼろぼろ

ると剥離してこき一陣の風でほこりになるとあとにはなんにもなくなつた。

みなほづせんとなつていた。

「どうこうつけた……」

そばに立つてゐる山田に市川は問いかけた。山田は首をふつた。

「わからん」

「見ろよ」

市川が三村のほうを指さした。

三人がその方向を見ると、なんと三村に槍をなげた女がかれの馬前にひざまづいて頭をさげていた。

「ありがとうございました。おかげで魔王の眷属に襲われるのを助けていただき、感謝の言葉もございません」

「いや、そんな……いりますよ」

彼女の礼の言葉に三村はてれてびっくりしたらいかわからぬ、といつた体である。

「お姫さまだぜ」

市川はつぶやいた。

たしかにそうだった。

三村の前にひざまづいてゐる彼女のすがたは、どう見てもどいかの王国のプリンセスといった格好だった。

あしもとまで達するながいスカートはたっぷりとした量感でふくらみ、生地にぬいつけられた無数の宝石がきらきらと彼女が身動きするたび輝いた。上着の袖もまたふくらみとしていた。彼女のみごとな金髪は背中までとどく長いもので、よく手入れをしているのか、さらりと背中にながれている。頭にはながいリボンのついたちいさな帽子をかぶり、ひたいのあたりには大きな宝石をかざつた金の環をはめていた。

「わたくし、ローラ姫ともうします。父はドラン公国の太守で、公爵でござります。どうかあなたさまのお名前をお聞かせねがいますか？」

三村はあわててこたえた。

「あ、ぼく三村健介といいます。アニメの制作進行で……ええと三村というのが苗字で、健介が名前です」

言いかけてアニメの制作進行というのが彼女に通じていないとに気づき三村は馬からおりると彼女に手をさしのべた。

「まあ、立つてくださいよ。とにかく馬車へ……」

さしのべられた手をじつと見つめた彼女はすつとその手を握りたちあがつた。三村は手をかして、彼女が馬車に乗るのをたすけた。

「おいおい……」

市川はあきれた。

「映画みたい……」

と、これは洋子。そんな三村とお姫さまを山田は考え深げに見つめている。

お姫さまは馬車のなかから三村に話しかけた。

「ぜひわたしどもの国においでください。お礼もさせていただきたいし、父上にお話したら喜ぶでしょう」

三村は三人のほうを見た。

「いいんじやないか。どうせあてはないんだ。それよりおれたちもお姫さまに紹介してくれよ」

市川の言葉に三村は舌をだした。

「すいません……。あの、こちらが市川努さん

「よひしべ

紹介された市川はにやつとコーラ姫に笑いかけた。彼女は上品な笑みをうかべかすかに辞儀をかえした。

「そちらが『元洋子さん』

「こんにちわ」

「そして山田栄治さんです

「どうも」

全員と挨拶をかわし、コーラ姫は口を開いた。

「それではみなさんも」一緒にいらしてください」

姫の言葉にみな頭をさげた。なんとなへやつするのが自然な気がしたのだ。

護衛の兵が乗っていた馬を市川はつかまえまたがった。市川は鞍に身を落ち着け、田をまるくした。そんな市川を山田は見上げ声をかけた。

「どうした、妙な顔をして」

「おれ馬に乗るのははじめてだけじ、ビハニツつわけか乗りこなせることがわかるんだ。なんだだ？」

山田はうなずいた。

「やうだと思つたよ」

そんな山田を市川は不思議そつな顔で見つめた。

洋子は「一姫と一緒に馬車に乗ることになつた。山田は御者台にすわり手綱をもつた。」いつして一行は馬車をはさんで移動をはじめた。

道はまつすぐで、景色はのどかだつた。

どつしつとした老木が両側に立ち並び、枝が張つて日陰をつくりてこる。

そのなかを馬の「ぼくぼく」「ぼくぼく」とこひ蹄の音がつづく。

「ドラン公国の一姫だつて」

馬に乗つた市川は馬首をよせて御者台の山田に話しかけた。

山田はうん、とうなずいた。

「ああ、聞いてるよ」

「あれ、「パックの冒険」に出でたキャラクターの名前じゃないか。それにドラン公国つてのも企画書に出でたぜ。いつたいどついついた？」

「うん、ところどはおれたちがいまいじるが「パックの冒険」の世界じゃないかところどなんだ。おれたちはアニメのなかにいるんだよ」

「冗談じやねえ！　おれたちがアニメの仕事をしていんんだぞ。それじやまるで……まるで……」

そこまで口にして市川はつまつてしまつた。

「落語の「桜の花見」という話しが知つていてるかい？」

市川がかぶりをふると山田はつづけた。

「ある男がさくらんぼうを種^ヒごと食べてしまつた。種は体の中で芽をだし、ついには頭から桜の木がはえ、その桜を見に人があつまつて花見をはじめた。桜の木の根元には池がつくれられ男はあまりに花見のひとが集まつてしまつとうとうノイローゼになつてその桜の根本の池に身投げをして死んでしまつた……なんだかその話しが思い出すな」

「なんだかわかるような気がするけど、なんであんたおれたちがアニメの世界のなかにいると思つたんだ」

「おれたちあのお姫さまと話しをしたな」

「うん」

「なぜおれたち話ができたんだ？」

「そりやあのお姫さまが話しかけて……」

そこで市川はあつ、と宙をにらんだ。

「そうだ。あのお姫さまの話したのは日本語だ。しかしあのお姫さまの顔はどう見てもおれたち日本人とは思えない。ヨーロッパ系のおれたちから見れば外人だ。あの馬車だつて、あとお姫さまを護衛していた騎士たちだつて身につけていたものや、いろいろなものから中世ヨーロッパを思わせるじやないか。もしそうなら彼女たちの話す言葉はフランス語か、ラテン語か、どっちにしろ通じるはずがない。ところが彼女の言葉はおれたちにもわかる日本語だ。アニメで中世ヨーロッパを舞台にしたからといって、わざわざ中世フランス語でアフレコするわけないだろ。だからこゝはアニメの世界なんだよ」

「なぜだ。どうしてそんなことになつたんだ」

「おれたちが田を覚ます前のことを覚えているか」

「田を覚ます前……あんたのいいたいのは演出部屋でおきたことか

？」

「やうだ。あの奇妙な雷が落ちて、そのとき、声が聞こえたな」「うん、へんな関西弁だつたな」

「ああ、あの”声”はおれたちになにかするよつ命令してた」「おれたちのせいで迷惑してるとこよつなことを言つてたぞ」「われわれになにをさせんつもつだと思つへ？」

「さあ……」

「こには「パックの冒険」の世界だ。市川くんは原作の漫画を読んだかい？ 木戸監督が学生時代同人誌で発表したやつだ」

「ああ、絵はうまかつたな……。しかし途中で終わつちまつた」

「そうだ。あの原作はしりきれとんぼで終わつてる。そしてまたアニメにしようとおれたちが集められた。しかし監督のせいで暗礁に乗り上げちまつた。物語ははじまつてもいない……。もしここの世界に神様みたいなのがいれば困つたろうな」

「神様あ？ あの”声”は神の声だつてのか？」

「そうだ。おれたちは「パックの冒険」の物語のつづきを演じるようこの世界につれてこられたんだ」

「ど、どうして……？」

市川の問に山田は馬車から首をのばし、馬上の三村のほうを見つめた。三村は山田の手つきに「え？」といつよいうな表情になる。「三村くんの身につけているのは主人公のパックの装備だろ？ キヤラクター表にあつたやつとそつくりだ。おれたちが身につけているものも、パックとともに冒険する仲間のものだ。どうしてそんなことになるんだ。結論としては、きみが主人公のパックなんだ。そしておれたちはその仲間さ」

山田の話にいつのまにか馬車の中でお姫さまと同乗している洋子も、そして市川のうしろで馬に乗つてこる三村も耳をすませていた。山田はつづけた。

「あの竜にむかつて三村くんは無謀にも突撃したな？」

自分の名前がでて、三村は顔をあげた。

「おれたちもつこあとを追つた。ふつうなら絶対そんな」とするわ

けない。しかしながらだが勝手に動いてしまった。なぜだ！ そして竜は死ぬと蒸発しちまった。あの……「一ノ瀬さん、ちょっとといいでですか？」

「一ノ瀬姫は車内でもうくらした顔で山田を見上げた。

「なんでしょうか？」

「あの竜はどうして消えてしまったんです？」

「どうして、と言われても……あれば魔王の眷属ですわ。魔王の手下は死ぬと死体ものこさず消えてしまうのです」

「ははあ……それがあたりまえなんですね」

「そうです。それがなにかあなたのかつておっしゃっていた、神様のことと関係するのでしょうか？」

「ああ……しかしわれわれは本来、この世界にいるべき者ではないところ」とは確かです。だからわれわれがなにかこの世界でなしとげれば、もとの世界へ帰れるんじゃないかと思つたんです」

「あの山田さん、ちょっとといいでですか？」

三村が口を開いた。

「なんだい？」

「これに木戸監督はどうかわつてくるんです」

「ここに監督はいない。田代めたときもいなかつた。そうだな？」

「ええ」

「ということは監督には監督の使命があるんだと思う。木戸さんもたぶんあの場にいたからおれたちと一緒にこの世界につれてこられたんだね。しかしおれたちのなかにいないところとは、べつのことを見せられるんだろうな」

「でもなんでこんなことに……」

「おれはSF小説が好きで、よく読むんだがそのなかに多元宇宙ものといつやつがあるんだ。もしもヒトラーが第一次大戦で勝利したら、とか信長が本能寺でしななかつたらといつやつだ。そうなつたらそれ以降の世界はまったくがつたものになるだろ。だからおれたちがいまいる世界はその多元宇宙のひとつじやないかと思うん

だ。ただしここは木戸監督の頭のなかから生まれたとこのがユニークだけね。しかし木戸監督は物語の終わりまできちんと終わらせないままぼうりだしてしまった。だからおれたちがよばれたんだと思ひ。「パックの冒険」の物語を終わりまでつづけるように。だからおれたち習つたことのない剣術や、馬術を身につけているんだろ？

「木戸さんはどうしてるかな……」

「コンテ描いていたりして……」

三村の言葉にみなびつ、と笑つた。

木戸（前書き）

五人のうち木戸監督だけ別の場所で目覚める。そこでのかれの役割
は……？

暗闇。

べつたりとした黒一色がそこを支配していた。
木戸はその黒一色の世界で立ちすくんでいた。
ここはどんだらつ。

なにも見えない。

いや、自分の体は見える。見下ろすと、自分の両手と足元が見えた。が、踏みしめてこるはずの床はまったくの黒一色でなにも見えない。かれはひざまづき、床を探りしたが、手に帰つてくるのはつるつるした感触だけである。

「おーい……」

ここにいるぼやくなつた木戸は思わずさけんだ。しかし声は反響のまつたくない空間にすいこまれかえつて不安がました。

思わずかれは駆け出した。

はつはつはつ！

懸命に足を回転させているのに足音はまったく聞こえない。
そのうち息があがつて立ち止まつてしまつた。汗がじつと全身からふきだし、かれはぺたんとしりもちをついてしまつた。

だめだ……すっかり体力がおどろいている。これでも学生時代、柔道で県大会まで出場したといつのに。長年のアニメ業界でのくらしがすっかりからだをなまらせた。

「あんたなにやつとるのや……」

いきなり聞こえてきた“声”に木戸は飛び上がつた。

「だ、だれだ…」

「わてのことなど、心うじもよひ……あんたにやつてもういたいことがあること」

「おれに…」

「やつや、あんたのせこやで。いろんなことをのせせんとはあかん

のやが、どうにもなりんや。だからあんたに責任をはたしてもらいたいんや」「や

「お、おれにどうしてもらいたいんだ?」

「あんた忘れたんか? ほれ、神でも悪魔でもええからなんとかしてくれえ、と」

木戸はあの雷を思い出した。と同時にどうとした。

「神でも悪魔でも……まさか!」

「わけは悪魔やない。でも神様でもないな。まあそんなことどうもええんや。ともかくあんたにはあんたの仕事がある」

「仕事?」

「そりや、あれを見い……」

まつたぐの黒一色の世界にぼ、と灯りがともった。

なんだろう。

木戸は目をほそめた。

なんだかひどく見慣れた光だ。

かれはふらふらとその方向へ歩き出した。

!

光をはなつているのは蛍光灯の光だ。

それも動画机の透過ガラスの光である。

そこには木戸が制作会社「タップ」で使っていた動画机があつた。机には未使用的コンテ用紙がきちんと束になつて積み上げられ、その横にはかれがいつもつかっていた鉛筆と消しゴム、それに鉛筆削りなどの文具がそろえられている。

「あなたの仕事、つづけてもらおうか。ここなら邪魔もはいらんから、仕事がはかどるやろ?」

「おれの仕事?」

木戸はおつむがえしにつけた。

「そりやー そつとと「パックの冒険」のコンテきらんかい!」

”声”の調子がかわった。あきらかに怒りをふくんでいる。木戸はうへ、と首をくまさせた。

「あんたが物語の途中でほつぽらかしたせいでわてはえらい迷惑じ
とる。なんとしてもあんたにほこの仕事終わらせてもらいたい。さ
あ、すわりなはれ！」

あくしゃくと木戸は椅子にこしかけ、机にむかった。

ぼんやりとしている木戸に”声”は命令した。

「さあ、鉛筆を握つて、そうそつ、仕事が待つてゐるで……」

木戸は機械的に鉛筆を握り、コンテ用紙に相対した。

と、猛然と木戸は鉛筆をコンテにはしらせた。

どういうわけかあれほど苦労したコンテ作成が、いまは樂々とで
きる。前はアイディアを出すのに死ぬほど消耗したのだが、いまは
あとからあとから「パックの冒險」の場面が頭にわいてくる。ただ
それをコンテに描くだけでいい。

木戸は一心不乱に書きつづけた。

姫君（前書き）

コーラ姫を救つた三村、山田、市川、洋子の四人はドラン国の大公に歓迎される。そこでおきる事件が彼らを冒険の旅へ導くのだつたが……。

「おお、おお、あなたがたが姫をお助けしてくださったのですな！」

「一ラ姫の父親のドラン大公は涙でうるんだ田で手放しで四人を歓迎した。姫の父親としてはかなり年寄りで、髪の毛はまばらで手は手探りするようしきりに動いた。ぐすぐすと鼻をならすとよちよちと歩いて三村の前にくるとその手を握る。

姫に同行して一行はドラン公国首都であるドラン城にきていた。ドラン城とはいえ、木造の館といった外観で、そのまわりを城下町がとりまいている。ドラン城にたどりついたときは夕方になつていた。馬車がちかづくと城から兵士があわててとびだし、姫が姿をあらわすとかれらから歓迎のどよめきがあがつた。

そしてまっすぐ城の謁見室に案内され、大公との対面となつたのである。

どういうわけかかれらは三村がこの一行の責任者としてみなしていた。話しかけるのはつねに三村で、ほかの三人は無視された。「どうか食事をともになさつてください。わがドラン公国はふけばとぶようなちいさな国ですが、一流のコックがそろつておりますぞ！」

そういうわけでかれらは城の食堂へと移動した。

食堂には木のテーブルがあり、そのまわりに四人とドラン大公、そのとなりに姫がすわった。大公が手をたたくとドアが開いて召し使いの数人があらわれ、食事を用意した。

出されたのは肉料理となまの野菜が数種、それにワインであった。パンは直径数十センチほどもある巨大なもので、それをおもいおもいにナイフで切り出し、とりわけるのだった。

「どうやら手づかみらしいな」

山田はつぶやき、野菜で肉をまいて口にはじんだ。

「うん、いける！」

それを見てほかの三人も料理を食べはじめた。

「三村殿はいすれのお国の若様でしうつかな？」

口をもぐもぐさせながら大公は三村に話しかけた。

「え？」

三村はぽかんとした表情で顔をあげた。

「いや、ぼくはただの制作進行でして、若様といわれるよくな……」

「しかしあなたさまのマントの紋章はどう見ても王家のものですが」「言われて三村はじぶんのマントをふりかえった。

「そう言われても……なんしろ田が覚めたらこの格好だつたので」「会話はしせんとかれらがこの世界につれてこられたいきさつになつた。三村の説明に大公はじつと耳をかたむけた。

「信じられないことですな。しかしあなたがたは姫の命の恩人、わたしでできることなら協力しますぞ」

「それならひとつお尋ねしたいことがあります」

山田が口を開き大公は眉をあげた。三村以外の人間が質問すると「いうのがかれにとつては意外なことらしかつた。

「なんでしょう」

「姫さまが竜におそられたことについてなにか心当たりでもありますか？　あの竜はわたしたちに目もくれず、まつしぐらに姫の馬車を目指していたようですが」

布巾で口をふくと大公はため息をついた。

「魔王のしわざですわい！　この数十年、北方で魔王の軍勢が勢力をましているという噂がここまで聞こえてまいりましたが、ついにわが国までその魔手をのばしてきたというわけです。娘をねらつたわけはただひとつでしう。娘がさらわれたと聞けばわしだけでなく、わが臣民すべてが悲しみにくれます。魔王はその悲しみを糧にしてちからをますのです。ひとの絶望、悲嘆、憎しみを魔王は食らいます。北方にあるいくつかの国はすでに魔王によつて征服されました。魔王はあらたな獲物をねらつてしているのです」

「その魔王というのは？」

「正体は不明です。ある日とつぜんあらわれ、北の山脈のおくふかくに城を築いたと聞いております。そこからは生き物を殺す瘴気がながれ、ゆたかだつた北の大地はあれはてました。今まで何人の冒険者が魔王をたおすために旅立ちましたが、ひとりとして生還したものはおりません。わが国からも腕自慢の勇者が旅立つていきましたが、その後たよろもなく、死んだものと思われております」食事はすすみ、食後のデザートになつたが、魔王の話ですっかり場はしらけてしまつた。その後、みんなは召し使いによつて寝室へ案内された。山田、市川、洋子の三人はおなじ部屋で、三村だけべつの部屋に案内された。

「なんで三村だけ特別なんだ」

市川が頬をふくらませて口を開くと、山田がこたえた。

「たぶん、おれたちは三村の家来と思われているんだろう」

「家来だつて！」

市川はかつとなつた。

「怒るなよ……、三村の身につけているのはかれらから見ると王族のものらしい。あの食事の席での大公の態度からもわかる。したがつておれたち家来だということを」

「しかし……」

「まあ、また！ とにかくおれたちの今後の行動を決めなくてはならない。どうすればもとの世界へかえるのか考えなくては」

「魔王を倒すのよ。きまつてるわ！」

洋子の言葉に市川は目を丸くした。山田はうなずいた。

「おれもそう思う。たぶん、おれたち勇者のやくをあたえられているんだ。ほら、原作にも魔王が登場したじやないか。大公の言葉ではあまりその正体はわからなかつたが、原作でもそんな詳しく述べは描かれていた。おそらくあの漫画を描いた時点でも、木戸さんも魔王のことについては考へていなかつたんだろう」「それにしてもずいぶん用並みな設定だな……ファンタジーならもうちょっと敵役の設定は凝るもんだぜ」

「しょうがなによ。原作がもともとそういう月並みな設定なんだから。でも月並みなら月並みでおれたちに勝機があると思つていい。相手が月並みな魔王なら、おれたちも月並みな冒険をすれば倒すことができるってわけだ」

「おれたちが倒せるとどうして思うんだ」

「そうしないと物語が完結しないからだよ。ファンタジーの終わりにはハッピーエンドになるというのが決まりだ。だからそのことについては安心していいんじゃないか？」

「それにしてもあたしたち、三村くんの家来てのはひとつかかるわね」

洋子はベッドにしがけ、髪をいじりながらつぶやいた。あいかわらず彼女の身につけているのは最小限の布切れだけである。全員、城からは装備や服をあらたに提供されたのだが、彼女に提供されたのはまことに身につけていたような格好であった。洋子はだまつてそれを受け取り着替えた。

そんな彼女をまじまじと山田は見詰めていた。その視線に彼女は気がついた。

「なによ、山田さん。変な顔つきで見ないでよ！」

「いや……」

山田は髪をじいきながらつぶやいた。

「気のせいかな、さみやせたんじゃないか？」

「え？」

洋子はぽかんと口を開けた。市川は山田の言葉に同意した。

「そうだ……なんだかプロポーションが変わったぜ」

「まさか……！」

洋子はたちあがり、部屋のすみにたてかけてある鏡の前にたつた。全身を映してみる。

「本当……あたし、やせているー。」

彼女は頬をおさえた。

たしかに彼女のプロポーションは変わっていた。まえはどちらか

とこうと太田のからだつきがすつきりとウエストがくびれ、胸の位置も高くなっている。さらに背も高くなっているようだつた。

「市川くん、あなたも変わつていいんじゃない？」

「おれが？」

「いきなり矛先がむけられ市川はびっくりした。

「ちょっと、じぶんの姿見てごらんなさいよ」

洋子は市川を鏡にひっぱつていつた。鏡に全身を映した市川もぽかんと口を開けた。

「本当だ……おれはこんな体つきじゃなかつた」

市川の餓死寸前という体つきは変化していた。それまでなかつた筋肉がもりもりとついている。ぶあつい大胸筋、それに二の腕にも二頭筋がついている。さらに猫背がなおり、背がぴんとなつていた。

「山田さんはどうなんだ？」

「おれかい？ べつに変わつたよつたよ……」

そう言いつつ山田は立ち上がつた。

「あれ？ 市川くん、きみ背が高くなつたか？」

山田は市川より頭ひとつ背が低い。が、いまはふたつぶんは低くなつていて。さらに全体にまるみを帶びていた。

「おれ、ちいさくなつちまつた！」

山田は悲鳴をあげた。

「どうこうことだ！」

三人は鏡のまえで立ちつくしていた。

「わうか、やつときおれが言つた役割にあつた体つきになつたんだ……。おれはドワーフ族という設定なんだ……畜生！」

山田はどん、と床をふみならした。

「じゃ、おれたちはなんだい？」

「市川くんと洋子さんは戦士なんだよ。これからの大冒険にむかうといつのに運動不足のアニメーターの体じや不足なんだうつ。この世界の神様はおれたちにどうあつても魔王退治をさせたいようだな」

市川と洋子は鏡の前でいろいろポーズをとつてためすがめす眺め

ていた。ふたりともいまのじぶんにまんざらではないようだ。洋子はふと思いついたように口を開いた。

「あたしたちがこういう体に変わったなら、三村くんはどうなの？」

「ちょっとかれの部屋へ行ってみよう。まだ起きているだろ？」

山田の提案で三人はささやさと部屋を出で、三村にあたえられた

部屋へ急いだ。

「三村くん……あれ？」

ドアを開けた市川は立ち止まつた。

「いないよ」

「いないって？」

山田は市川のそばをすりぬけ部屋へはいり、あたりを見回した。

「いい部屋だなあ」

山田はあきれた。

三村の部屋は豪華だつた。高い天井に大理石の暖炉。ベッドはどつしりとした天蓋つきの、カーテンがついたもので、そのほかに凝つた彫刻をした調度がそろつている。

「なあ、山田さん。さつきからこの城の中の様子、どつかで見たような気がしているんだが、おれの気のせいいかね？」

山田は苦笑いをした。

「気のせいじゃないよ。おれがこの城の美術設定をやつてるんだ。ほら、打ち合わせの前に資料が渡されたる。あのなかにあつたよ」

「ああ、そうか……あ、ちょっと待つた！」

市川はこん、と自分の額をたたいた。

「この城が山田さんの設定したお城つてことは、おれの設定したモンスターもこの世界にいるってことか……冗談じゃねえ！ あんなモンスターとおれたち戦うのかよ！」

「木戸さんはどんなモンスターをきみに発注したんだい」

「おきまりのスライムとか、昼間のドラゴン。それにオーク鬼とかそんなのだよ」

「待てよ、それなら魔王の設定は？」

「まだやつてねえ。木戸さんは一話の設定を要求したからな。それでもリテークばかりでぜんぜん仕事がはからなくてね……」
市川はぼやいた。

「それならまだこの世界に魔王はいないのかもしないな。あの大臣が魔王についてはいやにあいまいな言い方をしていたろ？ まだ設定がしっかりしてないから、詳しいことを言えなかつたんだ」「待て待て！ そんな無茶苦茶なことつてあるかい！ それじゃこれからおれたちが戦う魔王を、おれたちが設定しないとならんってわけか？」

「山田はうなずいた。

「そういうわけだ。おれたちが魔王と戦つて退治しないとおれたちはこの世界からぬけられない。しかしそれには魔王をおれたちがしつかり設定しないとあらわれない。きみが魔王の絵を描いて、洋子くんがその色指定をするんだ」

「山田さんは？」

「おれは魔王の城の設定をするんだ。そうしてはじめて魔王がこの世界にはつきりとした実体をえることができる。それでやつとおれたちが魔王を退治できる、というわけだな」

「なんだよ、この世界に連れてこられただけじゃなくて、さらに仕事のつづきをしなくちゃならないのか？ やんなるぜ」

「あたしも頭にきた……」

洋子はぶらぶらと窓に近づいた。と、その顔色がかわった。

「ちょっと、こっち来て」「らんなセコムー！」

そう言つと手招きをする。

「なんだい？」

「三村くんだわ……」

「ええつ！」

三人は窓枠に集まつた。

窓は一階にあり、外は庭になつてゐる。空には月がかかり、あたりに青白いひかりを投げかけていた。

三人が見下ろした先に噴水があり、そこを三村ともうひとりがそろ歩いていた。

「お姫さまじゃない……」

洋子はさわやいた。

三村のそばを歩いているのは「一ツ姫」だつた。いまは夜露をさくるためか手首まである長い袖のワンピースを着ている。頭にはさきがとんがつた帽子をつけ、帽子のわきにはながいリボンがたれていた。彼女のスカートにはちいさな宝石が縫い付けられ、彼女の身動きにつれ、きらきらと輝いていた。

姫は噴水の縁に腰をおろした。

三村はたちどまり、彼女の顔を見下ろした。

「畜生……つまくやりやがつて……」

市川はうめいた。

「三村くん、やつぱり姿が変化してるわ！」

洋子が指差し、市川と山田は皿を皿のようにして注皿した。

「本当だ。あいつも変わってる……」

三村の姿にも変化が生じていた。ひょろつとした姿はビリとなくたくましくなり、髪の毛は肩までのびていて、その髪の毛は前はぼさぼさだったのが、きちんと整えられ、さらにはやや茶色にそまっていた。全体に貴族的な風貌になっていた。

「あららら……本当に王子様だぜ！」

市川はあきれた。

「なぜ三村くんが王子様なのよ……不公平だわ。あたしだつてお姫さまの役がほしいわよ」

洋子は憤慨した。山田はうなずいた。

「それを言つなら、おれだつてドワーフ族なんて役割はいやだよ……まあ、もとの世界に帰れれば、もとにもどるんだろ？」

「あたし、もとの体重にもどつちゃうの？ そんなのいやだなあ……」

「おれももとのガリガリにもどるのか

……」

洋子と市川は変化したじぶんの体を見下ろした。なんだか複雑な表情だ。

山田は両手をあげた。お手上げ、といったところか。

「お、いい感じじゃないか」

山田は顔を窓ガラスにおしつけた。

三人の見守るなか、三村はコーラ姫のとなりにすわっている。ふたりは噴水のそばでなにか語り合っているようだ。いつのまにか三村の手が、姫のせなかにまわっていた。彼女は頭を三村の肩におしつけ、月をみあげた。

「おいおい、どうなつちまうんだ……」

ふたりの語り合いはいつのまにかやんでいた。いまはぴったりと身を寄せ合い、ひとときの逢瀬を楽しんでいる。

「見てらんねえ……」

市川はくーつ、と両手を握り締めた。洋子はうつとつとその様子を見ている。

ふと庭に影がさした。

山田は空に視線をうつした。

月に雲がかかっている。

ひゅう……。

風がでてきたようだ。

「なんだかいやな予感がするだ」

山田はつぶやいた。

「→アニメじゃこいつの場面になるとかならず……」

そこまでつぶやいたとき、あたりが暗闇につつまれた。

ごおつ……！

風がいきなり強く吹きつけた。

がたがた……がたがた……！

窓枠が風でゆれる。

ぴかっ！

稻光がひかり、「ぐるぐるぐるぐる……」と、雷鳴がひびく。庭のふ

たりはいきなりの天候の変化にぼうぜんとしていた。

と、暗闇にわははははは……という笑い声が聞こえてきた。

「な、なんだ！」

市川はうろたえていた。

「もしかするとこれは……」

山田は眉をひそめた。

「さやあつ！」

姫の悲鳴がひびきわたる。

「お姫さまが！」

洋子がさけんだ。

「行こう！」

山田がさけぶと部屋をとびだした。市川と洋子はあわててあとを追つた。

「なんの騒ぎだ！ あの悲鳴は？」

一階の廊下でかれらは大公と出会つた。大公は護衛の兵をつれているが、それまで寝ついていたのか寝巻き姿だった。

「こっちです！」

山田は手招きをすると走り出した。みなかれのあとに続く。

中庭にはものすごい風がふきあれていた。夜空には稲光と雷鳴が轟きわたつていた。中庭の噴水近くに三村が空を見上げ立ちすくんでいる。

「三村くん！」

山田が呼びかけると、三村は蒼白な顔をねじむけた。

「あっ、山田さん。あれを！」

三村が指差す方向をみな見上げた。

あつ、と全員が口を開けた。

まるでそこには竜巻を下から見上げたかのようだつた。旋風が渦をまき、上空へ漏斗のような口を開けている。そのまんなかに「一ツ姫が空中に浮かんでいた。

「姫が……」

大公がうめいた。

「コーラ姫は気絶している。ぐつたりと全身のちからをぬき、手足を投げ出して空中に浮かんでいた。そのからだがしずしずと上へ登つていく。

「コーラ姫はもらつたぞ……！」

その声は全員の耳に届いたようだつた。雷鳴の轟音のなかでもその声ははつきりと聞き取れた。

「姫！姫！」

大公はおろおろと運ばれていく姫を見上げ、その両目から滂沱と涙を流していた。

「くそ！魔王め！なんということだ！ええい、だれか、だれか姫を助けてくれ！」

大公は地団太をふんだが、姫の体はなすすべもなく持ち上げられていく。やがてちいさくなり、渦を巻く雲の中へ隠れてしまった。

……。

いきなり嵐は来襲したときとおなじくぱたりとやんでしまつた。静寂が襲い、気圧の急変で耳がぽん、と鳴つた。

月のひかりがぼうぜんとしたままの一同の姿を浮かび上がらせる。へたへたと大公はすわりこんでしまつた。そのまま顔を手でおおい、すすり泣く。

「おお、なんごうことだ……姫がさらわれるとは……」

「大公殿！」

その大公に三村が呼びかけた。大公は「え」という顔でかれを見上げた。三村の表情には今までなかつた決意があらわれていた。

「コーラ姫はぼくがかならずお救いします！約束します！」

わくわくと大公は唇をふるわせた。そのまま膝でいざると三村の手をとつた。

「お願いいたす！ぜひ、姫を救つてください！も、もし姫を救つてくださいならそのときはあなたを姫の許婚としましょー！」

「大公殿！」

みな大公の言葉に仰天していた。

旅立ち（前書き）

姫君を救うため旅立つ一行。いよいよかれらの冒険が始まる！

翌朝、一同は旅支度をととのえ、城の中庭に集合していた。大公はかれらに馬と、実用的な馬車を貸し与えた。馬車の中には食料がつまれ、あらたな武器が城の武器庫から運ばれていた。

今朝の三村は全身白づくめの衣装に身を固め、乗馬もまつしろな毛並みのものだった。朝の陽射しに照らされたかれはまさしく白馬の騎士といつてよかつた。甲冑は銀色に白の紋章が浮き彫りにされ、陽射しをうけるときらきらときらめいた。

馬に乗るのは市川と三村のふたりで、馬車の御者台には山田と洋子が座つた。山田は手綱をにぎり、馬車を出発させた。大公は出発する一行を城の正門からいつまでも見送っていた。

礫碌と車輪が道の小石をふみ、馬車の前には三村が先導して馬を御している。市川は馬を山田のちかくへ寄せ、話しかけた。

「なんであいつだけ特別あつかいなんだ」

市川は三村の雄姿を見上げぼやいた。市川のとなりで馬車を御している山田は巨大な手斧を背負い、分厚い盾をかかえている。三村のまばゆいばかりの衣装にくらべ、ほかの三人はどちらかといくとくすんだ色合いの装具をあたえられている。

「まあそういうな。あいつはお姫さまの許婚なんだから

山田がそう言つと市川は頭をふつた。

「お姫さまをもし救うことができたら、の話だぜ」

「それは間違いない。おれたちはかならず魔王を倒すことができる」

山田の確信にみちた口調に市川は一の句が告げない様子だった。

山田は刻々とじぶんのなかでふくらむ確信にひとりうなづいていた。かならずじぶんたちは魔王を倒すことができん！

そうでなくてはならない。

それとも違うのか？

山田は先頭で馬をすすめている三村に話しかけた。

「三村くん、きみずいぶん堂々としていたな。あそこで大公に見栄をきるなんて、思つてもいなかつた」

三村は山田をふりむいた。眉があがり、不審げな表情になつている。

「ほくが？ そんな」と言いました？ 覚えてないですねえ」

「あみ……」

山田は絶句した。そんな山田に市川は声をかけた。

「それよりお姫さまだよ。あれからどうなつたんだら？」

「魔王にさらわれた」とはまちがいないな」

「無事なんだろうな。おれたちお姫さまの救出にむかうんだら？ かんじんのお姫さまが無事じゃないなんてこと、ないだろ？」

「それはないと思つよ。おれたちが助けてエンディングとなるはずだ」

「それで三村がお姫さまと結婚してめでたしめでたしか。おい、そうなると三村はこの世界にのこるつてことにならないか？」

「う……」

それは考へていなかつた。山田はこまお姫さまがどうしてこるんだかううと思つた。

「おおおおと風の音が聞こえてくる。
「一ツ姫はようやく田をきました。
なにがおきてこるのか？」

「…」

眼下に見える景色に「一ツ姫はやつとなつた。

「田を飛んでいる… それもおやうしこ速度で。風の音はそれだつたのだ。

悲鳴をあげよつとしたが、声は喉のおくでふさがつてしまつた。彼女はふしきなちからで田に浮いていた。頭を進行方向にむけ、うつぶせの姿勢である。見開いた田に、つまづかと飛び去つていく地上の景色が見えていた。

進行方向を見ると、地平線ちかくの右横に朝日が昇つてくるところだった。とすれば、いまは東にむけて飛んでいるのだろうか。いや、この季節では太陽はやや南よりにのぼる。ならば北東か。太陽が地平線から顔をだし、あたりは急速にあかるくなつていった。

寒
い

ふるふると姫は腕をくんでじぶんの胸をたきしめた。
空気が冷たくなつてゐる。

「ほゞ」だらう。まるきりあたりの景色におぼえはなかつた。とつあえず落トすることはないよつで、彼女はやや落ち着いていた。進行方向に巨大な山脈がそびえていた。彼女はまつすぐその山脈に近づいていた。頂上ちかくには万年雪がしろくかがやいてゐる。じつとその山脈を見つめていると、それはぐんぐんと近づいてきた。そのままではぶつかつてしまつ。

恐怖に姫は目をとじた。
が、ぐうん、と全身が上昇する感覚があつて彼女は目をひらいた。
山脈が眼下をながれていく。どうやら危機は回避するよつこなつて
いるようだ。

姫はさらば上昇していく。すでに雲のうえにたつしていた。
と、姫は呼吸がくるしくなつてゐることに気づいた。どういうわけ
か空気がうすくなつてゐるようだ。高度が上がると酸素の濃度が
さがるという知識をもつていなければ、彼女は不安で押しつぶされ
そうになつていた。

はあはあと呼吸がはやくなつてゐる。じくんじくんとこめかみあたりに血管の血流の音が聞こえている。苦しい、このままでは死ん

姫の意識はどうされた。

つぎに田覚めたときはあたりは闇につつまれていた。

手に床らしきかたいものがふれる。

となるといまは田を飛んではいないのか。

彼女はふらふらと立ち上がった。

あれほどの寒さがいまは消えている。

いや、どちらかといふと生暖かい。空気には奇妙なにおいがあつた。けつして不快ではないが、ねつとつとしたなまぐせにおいである。どちらにしても鼻をつままれてもわからないほどの中だ。あたりになにがあるかわからず姫は手を前にのばしてそろそろと歩き始めた。

なぜこんなに暗いのだろう。

そのとき姫はある考えに思い当たつとなつた。

あたりが暗いのではない。彼女の目が見えなくなつてゐるのではないか？

「そりや、ちがいまつせ

だしぬけに”声”が聞こえ、姫はとびあがつた。

「だ、だれですか？」

「わてのことなどどうでもよろし。それより、お姫はん。あんた、じぶんが目が見えなくなつたと考へていてよつておますが、そりやちがいまつせ。たんにここにあかりがないぢゅうじつですわ」

「あなたはわたしの考へていることがわかるのですか？」

「まあ、それくらいできまつせ。まあ、ちよつと待つておくれやす。いまあかりつけまつさかい、目をいためたくなかつたら、目をとじていたほうが利口やな」

姫は”声”的忠告にしたがつて目をとじた。

目の奥に瞼じの赤い色がひろがつた。あかりがともつたらしい。姫はそのままじっとしていた。やがてうすく瞼をひらいた。ぱくぱくと目をひらき姫はあたりを見回した。

そこはゲームのようなところだつた。だだつぴろい空間にまつたいらの床が目のとじくかぎりひろがつてゐる。半球型の壁がたちあがり、天井近くに光源があつてあたりをしてらしていた。

「ここはどこですか？」

「どこですか……

どこですか……

姫の声はドームに反響してこだました。

「どい……ちゅうひても、ひとことでは言こいくいな。まあ魔王の城、と言つといたほうがちかいかな。いや、いざれ魔王の城になる場所かな」

”頃”はいやにあいまいな言い方をした。姫は眉をひそめた。

「ではあなたは魔王のですね」

「ちやうねん。わいはただの管理者やねん。この世界があいまいなまやから、わてがこんなことせなならんぢゅうじつぢゅ。ほんまはこんな、お姫さまを誘拐するなんぢゅうじとしたくないんやが、切羽詰つておるねん。あなたの安全は保障するから、安心してくわなはれ。いづれ三村はんがあんたを救いにくるばずや」

三村の名前を聞き、姫はわれしらず顔をあかくそめた。

「三村さまが……」

「ほー、顔をあかくしよつた。あんた、三村はんにまれとるな」

「一ラ姫はかつとなつた。

「無礼な！ わたしはドラン公国姫ですよー。」

「ああ、すまんこつちゅ。かんにんしつくれやす。つい、わての悪いくせがでてしまつた。とにかく三村はんがくるまで、あんたはここで待つてほしいんや」

「待ちましょ。しかしこれでは……」

姫はあたりをさししめした。

「家具もなにもないではないですか。これでは生活できません」「すまんなあ。まだ山田はんが魔王の城を設定しておらんので、わいは魔王の城の予定地を提供するだけがせいいつぱいなんや」「そんなことわたしの知つたことではありますん！ わたしにふさわしい生活環境を整えてくれないならすぐ出て行きます！」

「一ラ姫はとんとんと床をあしふみした。”頃”はあきらめたような調子になつた。

「わかつた、わかりました。そんならなんとかしまつさかい、どういう風にすればええのか教えてくれなはれ」

「まずベッドです。布団は縄で、鷺鳥の羽をつかってください。枕はそば殻でないと眠れませんよ」

と、姫が言い終わらないうちにベッドが出現した。姫が城で使っていたようなベッドだった。姫はベッドのはしに腰かけた。布団はふわりと彼女の体重をうけとめた。彼女はしばらく布団をまさぐった。手触りは縄にまちがいなかつた。まぼろしではない。

「一ラ姫は顔をあげた。

その表情はいたずらっぽいものになつてゐる。

「なるほど……それではつぎは食事をするための食堂が必要です」
巨大なテーブルに背もたれつきの椅子があらわれた。テーブルにはまつしろなテーブルクロスがかけられていた。

「食器はわたしが城でつかつていった銀の食器を……」
銀器が出現した。フォークとナイフもついている。

「つぎはわたしにつかえる女官が必要です」

エプロンをつけたメイドがあらわれた。彼女は姫のまえにすすみでると深々とお辞儀をした。姫はおおよつてうなづいた。
さらに姫は要求をつづけた。

仕事（前書き）

奇妙な冒険をはじめた一行は、ついにじぶんたちの使命を知る」と
になる。かれらの使命とは?

「もう二日も旅をつづけてるぜー…」

夜になつてキャンプを張つて、食事の用意をしていた市川はぼやいた。

「なんだか風景もかわりばえしねえし、おなじとこひをぐるぐる回つてるんじゃないかと思えてきた……」

実際その通りだつた。一行はまつすぐ北にむかう街道をたどつてきたが、いつまで進んでもなだらかな丘に森が点在する風景がすすみ、変化というのがほとんどない。

「いつになつたら魔王の城へつけるんだ」

「城がどこにあるかもわからないんだぞ」

山田は手斧をつかつて粗朶を切り落とし焚き火の用意をしてこたえた。

「とにかく北の方向へいけいいんじやないですか？」

三村がこたえる。山田は首をふつた。

「そう簡単にはいかないよ。いきなり魔王の城にたどりつくなんて、そんなシナリオいくらなんでも安直すぎる。たぶん、どこかの町か村で魔王の城にかんするヒントを手にいれることになるんだろう」

「あんたの言うことを聞いていると、おれたちただのアニメのキャラクターだつてことをいやでも思い起こされるよ。それともRPGなのかな。それにしてもどこの町か村つて、どこのにあるんだい？」

「それだ。そろそろおれたち本来の仕事をすべきじやないかな」

「どういふことだい」

「だからつきのヒントをもらひ村の設定をすべきだつとこつ」とさ。おれがその村の美術設定を描くから、市川くんはその村にすむ村人のキャラを描いてくれ

「それでどうなる？」

「そうすれば、その村がこの世界にうまれると思つんだが。まあば

かばかしさとは思つが、やつてみよつ

「でも紙も鉛筆もないんだぜ。道具がないのにどうやって描けるんだ？」

市川の言葉にこたえるよつは、声が四人の耳にひびいた。

「それについては心配いらっしゃる……」

「わつ！」

全員、とびあがつた。

「山田はんのこう通りや。わしはあんたらのこの世界で冒険してもらいたい。ついでに物語つづけるための設定も、あんたらに頼みたいんや」

「あんただれよ！ なんであたしたちをここに連れてきたのよ！」

洋子は宙を見つめどなつた。

「はやくあたしたち、もとの世界へ返してちょうだい！」

「だから山田はんの言つたことは正しいと黙つとるやないか。あんたらに物語のつづきをやつてもらいたいんや。それで魔王を倒せば、もとにもどるから……」

「冗談じやないわ！ そんなの、ほかのだれかがやればここのは……」「そういうわけにはいかんのや。もともとこの世界をつくるきつかけは木戸監督やが、あのおひとは物語をつくる才能はあまりないようやな……。そのため、この世界がでけたんやが、どうもも宙ぶらりんでな……。それであんたらに助けてほしのや」

「どうすればいいんだ」

山田がさけんだ。

「あんただがさつさついたやないか。設定を描いてくれ！ そつすれば、この世界におなじものが実在する」とになる」

「じやつ、といつ音に全員はふりかえつた。それにあつたものを田にし、全員ぽかんと口を開けた。

「紙と鉛筆だ。それに消しゴムもあるわ」

「道具はわたしたで。たりくなつたら、また用意するからまああ

ちかよつてそれらを手にして山田はつぶやいた。

「道具はわたしたで。たりくなつたら、また用意するからまああ

とはあんたら「うまこ」とやつてくれや。じゃ、せいな！」

「あつ、ちょっと待つてくれ！ まだ聞きたいことがある……」

山田はさけんだが、”声”がふたたび聞こえることはなかつた。

市川は紙と鉛筆を山田からうけとると肩をすくめた。

「はいはい、わかつたよ。それじゃはじめるか。おれが村人のキャラ設定だな。村つてことは村長とかがいるわけだな」

山田はうなずいた。

「そうだ。その村長があれたちに旅のヒントをくれるわけだ。そうだな、ついでに学者っぽいキャラもたのむ。村長より、そつちのキャラが知識がありそうだ」

「山田さん、その村の美術設定なんだろう。だつたらその村にちゅうつとは楽しみみたいなものがほしいな。たとえば酒場とか……」

山田はにやりとした。

「カジノ、売春宿とかな！」

「あんたたち、なに馬鹿な」と言つてんのよー まじめにやりなさいよー！」

洋子がかつとなつてさけび、市川と山田は首をすくめた。

「それじゃ、ぼくは食事の用意をしてますから」

三村はそう言つと焚き火のうえに鍋をかざし、なかに食料をいれはじめた。やがてぐつぐつといつ音とともににいにいにおいが漂つてきた。三人は無言で焚き火のあかりで紙に鉛筆をはしらせていた。

「できた！ ラフだけど、まあ設定としてはこれでいいだろ？」

山田はつぶやくとじぶんの描いた村の美術設定をひろげた。市川もキャラクターの設定がおわつたようだ。そのふたりを見て洋子は腕をくんだ。

「で、あたしはなにすればいいわけ？」

山田はキャラ表を洋子にわたした。

「そりややつぱり、色指定だろ？ きみ色番号だけで色指定できるだろ？」

「できるナビ、自信ないわよ」

そう言いながら洋子は「ばやくキャラ表に色指定をいれてこく。

「市川くん、あんたやつぱり……」

洋子は市川の設定したキャラ表を前にしてため息をついた。そこには肌もあらわな美少女が、色っぽいポーズをとつてこる。その衣装は、どう見ても踊り子か、売春婦といった格好である。

「いいじゃねえか、ちょっとほのいの冒険に楽しみがほしによ

「でもねえ……」

「いや、市川くんの考えはただしいかもしれないぞ」

山田がわざわざいった。

「どうこなつ」とよ

「つまりこの世界がTVシリーズの世界だとすると、登場人物がおれたちだけじゃ話が進まないだろ?」こうなつたキャラが登場することによつ、ストーリーに変化ができるところともある。

市川はじぶんの設定したキャラ表を見直してつぶやいた。

「しかしすいぶん簡単に描けたなあ。ラフとはいえ、やくたへできただぜ」

山田は田をむいた。

「そうだよ……おれも妙だと思つたんだ。いつもほんとに早く仕事をおわることなんかないのに、今度は頭の中に勝手にイメージがわいてくるみたいだつた」

山田は頭をふつた。

「まったく、妙なことになつた。木戸さんほどこのにをしてるんだ

「おれ思つんだが、木戸さんもおれたち同様、監督としての仕事をわせら正在するんじやないのかな」

三人は市川の口元を見つめた。注目を集めめた市川は頭をかいた。

「いや、おれたちがこんなことしているつてことは、木戸さんも同じようなことになつてるんじやないかと……」

山田はうなずいた。ふと気づいてじぶんの手に持つた設定書を見つめた。

「さて、描き終わつたけど、これどうすればいいんだ……。ま、いちねつ三村くんにあづけといつか。せっかく制作進行がいるんだか

「ひ

「はい、わかりました」

山田の言葉に三村は苦笑いして受け取つた。

「あつ！」

三村がさけんだ。

なんとかれの手に持つたキャラ表と美術設定がふらふらと空中に舞い上り、そのまま夜空に溶け込むように消えてしまつた。

四人はぼうぜんと空を見上げていた。

「どうこいついた？」

市川は山田のくちもとを見つめた。

「おれだつて説明つかないよ」

山田は首をふつた。

木戸はようやく一話めの絵コンテを描きおわり、ふと息をついた。

なにかにとりつかれるようにかれは絵コンテを描きついで、木戸にしてはあつといつ間に仕上がつてしまつた。ほとんど描き直しをするにもなく、一気呵成に一話ぶんの絵コンテを描くことができるとは信じられなかつた。何度も見直してみたがぜんぜん書き直す必要はない。

その間空腹を感じることもなく、トイレに行きたいとも思わなかつた。それに木戸は一田に五箱を空けるベビースモーカーなのだが、一本も煙草を吸いたいという欲求はおきなかつた。

「おこ！」

木戸は暗闇にさけんだ。

「終わつたぞ！ 第一話の絵コンテ描き終わつたんだ！ なあ……

おれの仕事はこれまでだろ？」

「いいや」

”声”が聞こえた。木戸はびくん、と震えた。

「まだや……あなたの仕事はまだすんどらん」

「すんでいなって？」

「そりや。この「パックの冒険」の物語、終わりまで仕上げてもらわんと」

「全話の絵コンテを描けってのか！」

「あたりまえやろ。あんた、このシリーズの総監督でしかも原作者や。さいごまで責任もたんとあかんで」

「そんな……ワンクールぶんの絵コンテを描けってのか？ いつたいいつまでここにいなきやならないんだ」

ワンクールとは十三週のことである。4クールで一年分になる。「パックの冒険」の企画はあとあとロードなどになることを見越してミニシリーズで、ぜんぶで十三本制作されることになっていた。時間はなんぼもある

「でも……でも……キャラ表もないし、美術設定もない。その打ち合わせもしない状態でどうやって描けっていうんだ」

「これを見い」

ひらり、と空中から数枚の紙が出現した。その紙はひらひらと空中を舞つて、木戸の机に舞い降りた。木戸はその紙を見て仰天した。「あれ、こりや市川くんのキャラ表と山田さんの美術設定じやないが。それにこりや、つぎの話しがおれが考えていた村とその登場人物だ……」

「それで描けるやろ」

「ま、まあ……」

「そのキャラ表と美術設定にあなたの〇×サインをいれてもらおつ

か

「なんでそんなもの？」

「まあ、それが決まりやからな」

木戸はふらふらと鉛筆をとると数枚の設定書にサインを書き入れた。

そのとたん、わへぜんと絵コンクールを描きたいとこつ意欲がわきあがつた。

あらたな絵コンクール用紙の束をとると、木戸は書き始めた。

Hレン（前書き）

よつやくつぎの町へついた一行は、山賊のHレンと再会する。船に乗る手配をしたかれらは町の人間の奇妙な対応にとまどひことになるのだが……。

トラントンの町はまさに港町だった。

海に面した入り江にごちやごちやとさまざまな家がたちならび、そのあいだを木の桟橋が道路がわりにつながれている。家を建てられる平坦な土地がせまいため、いきおい家々は三階建て、四階建てと上へのび、さらにそのうえにあらたな家が建てられていて、そのあいだを通路が空中をつないでいた。船はその家のあいだの水路におしごめられ、ひしめいている。

町の入り口には木の柵があり、その上には兵士が弓をかまえている。

四人が町の入り口に近づくと、見張りの兵士が誰何した。

「われわれは旅のものです。船に乗りたってきたのですが」

山田が兵士たちに説明すると、それまでふさがっていた入り口の扉が観音開きにあいてなかから数名の士官があらわれた。かれらは疑い深い視線で四人をじろじろと眺めた。

そのなかのもつとも身分が高そうな士官が口ひげをひねりながら口を開いた。

「ふむ、トラントンによつてよ。わしは警備隊長のグラントといつ。まあ、立ち入りは許可するが、面倒をおこすことは許さんぞ。われわれはよそ者には特に注意しているからな」

洋子は山田のとなりの御者席でふつ、と頬をふくらませた。

「なによ、あの言い方。まるであたしたち、犯罪者だと思つていてるみたいね」

「よそ者はつねに犯罪者である可能性があるのだ!」

洋子の声が聞こえていたのか、グラントは声をはりあげた。

「この町は港町であるため、つねによそ者が立ち入りやすく、いきおいそのなかには捜査の手をのがれるためここに流れてくるやからがおおい。だからわれわれとしてもつねに警戒しているのだ。わから

つてもらえたかな？」「

「わかりました」

山田はおとなしくうなずいた。ここで面倒をおこすつもりはない。グラントは尊大にうなずくと立ち去った。山田は手綱をにぎって馬車をすすめた。全員が門をくぐると、数名の奴隸が門の開閉装置を動かし、門扉がゆっくりともとに戻った。

町に入るとすぐに馬車や馬の預け場がある。なかから兵士たちがとびだして立ちふさがつた。

「とまれ！ トラントンの町に騎馬や馬車ではいつてくるものはかならずここでじぶんの乗り物をあずけなくてはならない。これはきまりだ！ 預け料は無料だが、三ヶ月回収にこなければ没収となる。その条件でよければ預かるがどうだな？ 預けなければ、これいじょう町の中にはいることは許されん」

四人はその条件をのみ、木札でできた預り証をもらつた。その預り証をわたせば、馬や馬車が返却されるしくみである。

「なーんか、いやな雰囲気！」

洋子はつぶやいた。市川もうなずいた。

「ああ、同感だ」

町のなかをすすむと、あたりは剣呑な雰囲気になつてきた。昼間だというのに立ち並ぶ家々のおかげであたりはうすぐらう。そこらには地面にべつたりと腰をおろし歩きかる四人にじつと視線をはずさず見送っている人々がいる。それらの視線はするどく、まるで獲物をねらう獵犬のようである。これみよがせにナイフをちらつかせたり、あるいはわざとらしく笑いかける男もいる。あたりには悪意が手に触れられそうにたちこめている。

「こりや、あの警備隊長があれたちに言つたことも理解できるな。おれがこの町の住人だつたら、よそ者は警戒してあたりまえだ」

市川の言葉に山田はうなずいた。

「こうなつたら早く船を見つけて、さつと町をおさばらしたいよ

「あ、あっちが桟橋らしいですよ」

三村が指差す方向を見ると、なるほど帆船が数隻、桟橋に接岸している。みな山田が昨夜設定したような外輪をもつ蒸気帆船である。何隻かの船には船員が甲板で荷おろしや、あるいは積み込み作業を忙しげにおこなっている。

接岸している船の中でもつともおおきな船に四人はちかづいた。その船はほかの船とはなれた桟橋にぽつん、と接岸していた。桟橋でロープをかたづけている船員に山田は船の名を聞いた。

「ありやクマリ号でさ。船長はタバンといって、このあたりじゃ知られたひとだ。あんたら、あの船に乗りたいのかい？」

「ええ、目的地がわれわれと一致すればね」

「ふつ、と船員はくわえていた爪楊枝をはきだし、あたらしい爪楊枝をくわえた。

「そうかい。まあ、クマリ号なら安心だ」

そういうと、船員は目をそむけた。語尾がふるえていた。

四人は船員に礼を言つて船に近づいた。

甲板では船長らしき人物が積み込み作業を指揮していた。帆桁に滑車をつなぎ、ロープで桟橋から荷物を積み込んでいる。かれがタバン船長だろう。

でつぱりと太つたからだつきで、着てているのはひざまで丈があるフロック・コートだつた。頭には船長の帽子をななめにかぶり、顔はもじやもじやのひげでおおわれている。片目には眼帯がつけられ、口にはコーン・パイプをくわえていた。そういう格好は、どう見ても海賊の親玉そのものである。

「こんちわ」

山田が挨拶をすると船長はじろりと四人をにらんだ。

無言である。

「あの、この船の船長さんのタバンさんですか？」

山田がそういうとかれはうん、とうなずいた。

「あのう、この船の目的地を教えてくれませんか？」

「北の大陸だ。明日、出港の予定だが」

船長の口調はうつりで、なにか台詞を棒読みしているよつなぎこちなさがあった。が、タバンの返事に四人は顔を見合せた。なんと好都合なことか！

「それならわれわれの目的地でもあります。四人分の船室はありますか？」

「うん、とうなずいたタバンは疑わしげにこたえた。

「ああ、あるとも。しかしあんたら、本氣で北の大陸へゆくつもりかね？」

「ええ、それがなにか」

「それならなにも言つまい。わかっているだろ？ が、あっちじや魔王の軍勢とやらがつじやうじやいて、安全は保障できないよ。まあ、おれはあっちへ荷物をとどけるだけだからすぐひつかえすがね」

「それで結構です」

三村船の甲板に桟橋から渡された板の橋をつかつてあがると船長に四人分の船賃を前払いした。金を勘定して、船長はうなずいた。「いいだろ？ 出港はあすの夜明けになる。おくれても、おれは待たないからそのつもりで」

桟橋をはなれ、四人は宿屋のあつまつている通りへ移動した。

「さてと、船の予約もすんだし、あとは宿でねるだけだな」

山田が両手をすりあわせた。市川はにやりと笑いかけた。

「なあ、みんな。どうせ明日の夜明けまでやることないんだろ？ そんならちょっとこれでもどうだい」

そういうと市川はカップをかたむけるじぐせをした。洋子は首をふつた。

「あんた、そんなに飲みたいの？」

「いいじゃねえか。ここ数日、ぜんぜん飲んでないし、だいいち北の大陸とやらに行くことになつたらひとつ飲めるかわからねえからな。そつだら、山田さん」

市川の言葉に山田もうなずいた。

「おれも賛成だ。三村くん、きみはどうだ？」

「ここのまゝ、ほくもこの世界の酒のあじになれてきたといひですか
ら」

「しょうがないわねえ。じゃあ、つきあつてあげるわ

そういうことで、四人は肩をならべて歩き出した。

宿屋がならんでいる通りにすると、両側からこっせこっせ密引きが
わっとばかりに集まってきた。

「お客様！ こちから親愛なる海賊亭でござります。ついで食事つ
きで一晩おひとり、ゴールドでござりますよ！」

「こひちのクラーケン亭では一階で踊り子によるシーサーをやつてお
ります。いまならラインダンスがお楽しみになれますです！」

「まてまて、うちではおやすみ前にマッサージのサービスつきです
よ。旅のおかたにはたいへんご好評いただいておりますよ！」

密引きのため四人は立ち往生してしまった。山田はかれらのあい
だをかきわけ両手をあげた。

「待つてくれ、おれたちは夜明け前にクマリ号に乗るんだ！ だか
ら一晩だけでいいんだ」

その言葉がおわらないうちに密引きの表情がかわった。気まずい
空気がながれ、かれらはおたがいの顔を盗み見てそろそろとあとず
さつた。

「あ、あの。あんたがた本当にクマリ号に乗りなさるのかね？」

ひとりの六十がらみの密引きの老人が山田の顔をのぞきこむよう
にしてたずねた。山田はうなずいた。

「ああ、そうだよ。それがなにか？」

「い、いや、なんでもねえ……」

そういうとその密引きはそそくとその場を立ち去ってしまった。
それを見て、ほかの密引きもいつせいにその場をはなれていった。
あとに残された山田と仲間たちはぽかんとそれを見送った。山田
は三人をふりかえって口をひらいた。

「いったいどうなつてんだ？」

洋子は肩をすくめた。

「さあ、とにかく宿をきめないと」

四人は宿屋街で部屋をとるため歩き出した。

が、どの宿屋も四人がすがたをあらわすと部屋がないと答えるの

だった。

「どういうわけだ。これで十件目だぜ」

市川は憤然となつた。四人が宿泊を断られた宿屋をでたすぐあとで、ひとりの旅人が部屋の予約をとつたところを目撃してあぜんとなつていた。

「宿屋が部屋があるのに部屋がないと嘘をつくなんて……」

三田はひとりうなずいた。

「どうやらおれたちのことが噂となつてぱつとひろまつたらしいな。とにかくクマリ号に乗り込むといふことがまずいらしい」

「そういうこと…あんたら、ほんとうにクマリ号に乗り込むつもり？」

女の声に四人はふりかえった。

そこに立っていたのは女盗賊のエレンだった。

あいかわらず裸同然の衣装を身に着けている。

「あんたは……」

三村が問いかけるような表情になると彼女は不機嫌そうな顔になつた。

「なんだい、あんた。あたしの名をわすれちまつたのかい？」

「いや。たしかエレンとかいつたな。ぼくたちになにか用かい」

「この町にあんたらのうわさがひるまつていてるからね。それで顔を見に来たというわけさ」

「金はクマリ号に払つていいからもうないよ」

「ちがうつて…あんたの金はもう狙わないことにしたよ。それより、ほんとうにクマリ号に乗つて、北の大陸にこいつつていうのかい？」

三村がうなずくとエレンはにやりと笑つた。

「やつぱりね！ まつたくあんたら命知らずといふか、宿屋に断ら

れるのもあたりまえや」

「どうしてクマリ号で北の大陸に向かうのがいけないんだい」「教えてほしいのかい。それなら一杯、おいでもらおうか。いい酒場があるんだ。それに宿もとつてやるよ。あたしが口を利けば、なんとかなるよ」

三村はほかの三人と相談した。

「どうします」

「このさいだ。まんざら知らないなかじやないしな」
市川はにやにやしていた。

「まつたく定石どおりってやつだな」

山田はうなずいた。

「いいよ。あの女盗賊に世話にならひつ」

三村はエレンをふりかえった。

「案内してくれ！」

エレンはうなずくと歩き出した。山田は彼女と肩をならべ、話しかけた。

「手下はどうした？」

「あいつらこの町じや手配書がまわっているからね。あたしはここでは仕事しないことにしているから入れるけど」

「なぜだ」

「そりや、あたしがここ生まれだからよ」

エレンの答えに山田は目を丸くした。

「ふうん、それで宿もきみが口を利けるってわけなのか

「そうさ。た、あの酒場だよ」

エレンが案内したのは裏通りにある酒場だった。木造の三階建てで、観音開きのドアをあけるとすぐカウンターがあり、ひとりの老人が床を簾で掃いていた。老人は顔をあげ、エレンを認めるとなち顔をほころばせた。

「エレンじゃないか！ いつ帰ってきた？」

「昨夜だよ。ドハンじこさんも元気そうね」

「まあ、なんとか生きているよ。一杯やるのかい」「うん。それにこの四人は客だよ。いつしょに飲むから、席を用意してくれ」

「それじゃ好きな場所でまつていってくれ。食事はするのかね」「エレンは四人に話しかけた。

「どうする?」

「四人はうなずいた。

「それじゃ五人前だ!」

ドハーン老人はうなずくとキッチンに入つていった。すぐ料理の音がはじめる。エレンと四人は奥のまるいテーブルに席を取つた。酒場には五人だけでほかに客はない。席につくとエレンはすぐ話し出した。

「クマリ号はこのトラントンの町と、北の大陸のマッソの町をむすぶ定期便の運航をしているんだけど、あの船の乗組員はけつしてこの町に足をふみこむことはないのぞ」

三村は問いかけた。

「なぜだい」

「あの船はのろわれているからさ」

しん、とした静寂が五人を支配した。

洋子はいごこちわるそうにもじもじして口を開いた。

「のろわれているつて、どういうことよ」

「タバン船長はもともとトラントンの出なんだけど、魔王によつてのろいをかけられているんだよ。あんたら、魔王のことは知つているだろ?う?」

山田はうなずいた。

「ああ、あちこちで魔王のことは聞いているよ」

「マッソの町は北の大陸でただひとつ人間が生活している町なんだけど、あの町は魔王に魔力を提供するために生かされているんだ。あの町の人間はひとりのこらす魔王に力をあたえるために生きている。そのために食料や、生活物資を必要としているんだけど、クマ

リ号がそれを運んでいるんだ

「なぜ、そんなことを……。それじゃこの町も魔王に力をかしていふことになるんじゃないのか？」

「わいやわいや。でももしまッシンの町をトラントンが見捨てたら、魔王はすぐここにやつてくるだろ？ それを食い止めるため、ト

ラントンはマッシンにクマリ号をつかって食料を運んでいるんだ

「なんてことを……。それじゃ、マッシンの町はトラントンの町の犠牲になつているということじやないか」

「そうひ。あんたらタバン船長にあつたかい

「ああ」

「かれ、いくついくらいだと思つ？」

「さあ、五十いくつかと思つが」

「ほんとうは百をこえているんだよ」

「ほんとうか？」

「魔王がタバンとマッシンとトラントンをむすぶ定期便を命じたとき、やつの命を凍らせたんだ。それから五十年、船長はずつと定期便を運航している。年もとらず、五十年前のすがたのままなのだ。クマリ号に乗り組んでいる船員もおなじなんだよ。あの船が魔王にのろわれているというのは、そういうわけなのだ。だからトラントンの町の人間はなるべくクマリ号にはかかわらなこようにしてこる。あの船に乗り込もうとしているあんたたちも、それだけで魔王のほうにかかるといふと思われているから、どの宿屋も泊めようとはしないんだ」

市川は頭をふった。

「そんな……馬鹿な……」

「馬鹿でもなんでも、この町の人間は魔王のことを死ぬほどおそれているのさ。その北の大陸にあんたらどうして行きたいんだい？」

四人のあいだすばやい目配せがかわされた。山田はうなずいた。

「おれたち、魔王を倒そとと思つんだ」

「レンは無言だった。

唇がふるえている。

と、肩がこまかく動き出し、やがて全身をふるわせる笑いにかわった。

「あつはははは！ 」いやすげえ！ ドランのお姫様が魔王にそらわれて、その救出に四人の勇者が旅立つた、と小耳にはさんでもしかしてとあんたらを追つていたんだが、まさか本氣でそんなこと考えているとは！」

「なにがおかしい！」

どん、と市川は顔をまっかにそめテーブルをたたいた。

ひいひいひい、とエレンは笑いを必死におさめようと努力し、ようやく息をつげるようになつてこたえた。

「なぜって、そんな無茶なことだれも考えないからさ。魔王に挑戦するといって、これまで何人もクマリ号で北の大陸にむかつた連中がいたが、だれも帰つてこなかつた。ここ十年くらい、北の大陸にむかつたものはいらないんだ。あんたらもそんな連中の仲間入りになりに行くつもりなのかい？」

「おれたちには勝算があるんだよ。かならず魔王はわれわれが倒す。これは決まったことなんだ」

山田はしづかにこたえた。

エレンはそんな山田の様子に眉をよせた。

「どうしてそんなことがわかるんだい？ あんた、占いでもやるのか？」

「いいや。しかしたしかな証拠があるんだ」

「どんな証拠？」

「それは言えない。言つても信じないからね」

エレンがなにか言おうとしたとき、ドハン老人が厨房から食事を運んでききつかけをうしなつた。

「さあ、飯だ！」

山田はその食事をまえにし、両手をすりあわせた。かれは食欲をなくすところとはいまだかつて経験したことがなかつた。さつそ

く山田は田の前に盛りあわされた料理を取り、口に運んだ。そんな様子を見て、ほかの三人も食事にかかつた。エレンはちょっと考えていたが、思い直して四人に仲間入りして食事を口に運んだ。しばらく五人はもくもくと食べていたが、ドハンがワインを運んで乾杯をしあうよになつて態度がほぐれはじめた。

三村が酒の酔いで顔をあかくしてエレンに話しかけた。

「きみ、われわれのことを小耳にはさんで追つかけてきたといつたね。どうしてそんなことをする気になつたんだ？」

「あたしが手下たちと一緒にあんたらを襲つたとき、あんたはあたしの命をたすけたろ？ 妙なことをするな、と思ったのや。どういうわけなんだい？」

「どういうわけって……」

三村はこまつたよくな顔になつた。まさかそんなこと真顔でたずねられるとは思つていなかつたのである。エレンの隣に席をとつたドハンは田をまるくした。

「エレン、まだそんなことやつているのか？」

エレンは肩をすくめた。

「いいじゃねえか！ あたしの勝手だよ」

「おい、わしは言つたはずだぞ。盗賊働きはもうやめろ、と。そんなこといつまでやつていたら、いつか大変なことになる。あんたの父親も……」

「親父のことは言つな！」

エレンはかつとなつてさけんだ。

「そうかい。それならわしはなにも言つまい」

ドハンは立ち上がり、厨房にもどつていった。

そのとき足音がして、入り口の扉が開かれた。

いつの間にか夕方になつていて、入り口からは夕日のオレンジ色の日差しがさしこんできていた。そこには数人の男がなかをのぞきこんでいた。

「やつてるかい？」

「ビーヴやら密のよつだ。が、かれらは奥のテーブルで飲み食にして、いるHレンと四人を見てぎょつとなつた。

「Hレン、帰つていったのか……」

Hレンは体をねじつてそのまゝを見るとこやりと笑いかけた。

「よお！ イシスのゴンザレスじやねえか！ 元氣でやつてるか？」

「ああ、まあな……じゃ、またくるわ」

「ゴンザレスと呼びかけられた男はぐるりと回れ右をするとあたふたともときた道をもどつていつた。男たちのあいだでひそひそとささやき声がかわされ、かれらは姿を消した。

「きみはすいぶん、怖れられているんだな」

山田のことばにHレンは首をふつた。

「ちがうよ。あいつはあんたらを見て逃げ出したんだ。もひとつも、あたしもあんたらと食事を同席しているから、これからあたしを見る目がかわるだらうけどね」

「ふうん……悪かったかな」

「けつ、とHレンは肩をすくめた。

「気にしてねえよ！ たかが船に乗り組むだけでのろわれるなんて、あたしは信じないからねえ。でも、あんたらの目的についてや興味があるんだ……」

「どういうことだ」

「あたしもあんたらについて行こうと思つてね」

Hレンはとろんとした目つきで山田を見た。酒でぼぼがあかくそまり、うるんだ瞳はひどく色っぽい。山田はざわざました。そんなふたりを市川はこつそりと見てしたを向いてしまつた。ビーヴやら笑いをこらえているらしい。

「そんな……きみ、北の大陸にむかつた冒険者はひとつのこりゅもどつてこないと言つたばかりじやないか。なぜ、おれたちについていきたいんだ」

「わけがあるので……」

「ふむ、やうか」

「レンはぽかんとした顔になつた。

「あんた反対しないのかい？ てつきり断られると思つたけどね」
レンは四人の顔を順繰りに見た。みな、にやにや笑いをつかべ
ている。そんなかれらの様子に彼女はとまどつていた。

「断つたらきみ、あきらめるかい？」

レンはちよつと天井を見上げた。

「いや。どうあつてもあたしはクマリ号に乗り込むだらうね。あ
んたらが反対しようとしまいと。へえ、あんたひとのこころを読む
のかい？ ドワーフ族はそんなこともできるのか」

「おれはドワーフなんかじゃない。人間だ！」

「だけどどう見てもあんた……」

「うう……きみがおれを見てドワーフというのは勝手だが、おれは
ちゃんとした人間なんだ。とにかく明日はクマリ号で北の大陸にむ
かうんだ。ついてきたいというなら、タバン船長に船賃をはりつん
だな。きみのぶんまで面倒みきれん」

「わかつてゐ！ そのへうじぶんでやるよ。じゃ、一緒に行つて
いいんだね」

四人はうなずいた。レンは破顔一笑した。

「よし、それじゃ乾杯といつ」

五人はさかずきをあげた。

ドハン老人の酒場は宿屋もかねていた。最上階の三階に四人は案
内され、おののおのベッドにもぐりこんだ。時刻はすでに真夜中をす
ぎ、まどからは月明かりがさしこんでいる。

「やれやれ、明日ははやいというのにこんな夜更けまで飲むことにな
つちまつた。ちゃんとおきれるかな」

市川のぼやきに山田がこたえた。

「だいじょうぶさ。あのドハンという親父が、出港のまえにはかな
らずおこしにきてくれると約束したからな。しかしこの数日、おれ
たち早寝、早起きの習慣がすっかりついたなあ

洋子はベッドにもぐりこみ、毛布から目だけ出してこたえた。

「そうよ、あたしが「タップ」で仕事してたとき、みんな夜中の二時、三時まで起きていって、目が覚めるのは昼過ぎがふつうだつたわ。市川くんなんか、完全に昼夜が逆転してたもんね。まあアニメ業界の人間なんて、そんなのがふつうだと思つていたけど、こっちにきてすっかり早寝早起きになつてちょっと驚いてるのよねえ」

三村が薄笑いをうかべた。

「こちにはテレビがないですからねえ」

そのこたえを聞いて、山田はくつくつくつ……と笑つた。

「違ひない！ なにしろ夜になるとやる」とはないし、馬車で旅していたときは明かりもなかつたからな」

市川はうなずいた。

「そうだなあ。しかしあのHレンという女盗賊があれたちについていく、と言い出したとき、おれ笑うのをこらえるのに苦労したぜ。まったく定石どおりだもんなん。命をたすけられた色っぽい女盗賊があれたち冒険者の仲間にはいる、なんてなあ、つかいふるされた手だよ」

「いいじゃないか。ともかくこれでストーリーはつきの段階にはいつたんだから。まあ魔王の城につくのもこれでめぼしがついたといふもんだ」

「そろそろおれ、魔王のキャラ設定をやつたほうがいいかなあ……」「やめとけよ。なんしろ酒がたらふくはこつてるんだ。ちやんとした線をひけるのかい？」

山田にそういわれ、市川は頭をかいた。

「いいや、そういうわれると自信がないな。まあいいや。船に乗つてからでも、なんとかなるだろ？」「

「そういつこつた。さあさあ、明日ははやいんだ。みな、寝よ！」

山田の提案でみな毛布をかぶつた。

すぐ四人のベッドから寝息が聞こえてきた。

と、部屋のドアが小さく開き、すきまからエレンの目がのぞいた。

彼女はひつそりとつぶやいた。

「足石どおりだって……？ なんのこと？」

どうやら彼女は立ち聞きをしていたらしい。それなりと彼女は足音をしのばせると自分の部屋へもどつていった。が、レンの顔にはおおきな疑問符が描かれていた。

航海（前書き）

いよいよクマリ号で一行は海へ！
ファンタジーの定番の、船の航海である。
が、航海には定番の海の怪物が一行を襲う！

「うう……なんとかしてくれ！」

市川はクマリ号の船端にしがみつき、まつさおな顔でつぶやいた。夜明けとともにクマリ号は出港し、エレンをふくめた五人は乗り込んでいた。波はたかく、船はおおきくピッティングとローリングをくりかえしまっさきに船酔いにかかったのは市川だった。げえげえと何度も海にむかって胃の内容物を吐き出して、いまは吐き気だけでもどすものもないという状態である。昨夜のふか酒がきいたのだ。

「もう……だからあんなに飲むなつていったのに」

洋子は市川のそばにつきつきりで背中をさすつていた。

「水平線を見るんだ……海面を見ていると酔いがひどくなるだ」

そういう山田もまつさおな顔をしている。市川の船酔いがうつったのだ。三村は船のくさきちかくにいて、進行方向を見ている。前方にはひくく雲がたれこめ、嵐の予兆があらわれていた。かれはひどい船の揺れにかかわらず平氣な顔をしていた。

「あんたは船酔いしないんだね」

エレンが声をかけた。三村は彼女をふりむいてうなずいた。

「そうだね」

「あんたらいつたいどうこう聞柄なんだい？」

「え？」

「あんたの家来かと思つたら、ちがうようだし。だいじか、あんたがあの三人にはどちらかとこうとへりくだつた物言いをするじゃない。あんた、どこかの王子様なんだろ？」

三村はかぶりをふつた。

「ちがうよ。ぼくはただの制作進行で、王子様なんてがらじやない

「せいせくじんこう？ なんだいそりや」

「ええと……山田さんならもつとつまく説明できるんだい」など、つまりざりかとこうとせくはあのひとたちの役に立つよつこんこ

る細かい仕事をするのが役目なんだ。だれが偉いとか、そういうことじやない」

「そりや呑を使つてこうんだよ。あんたの説明ならそつなる。まつたくあんたらおかしな仲間だよ。あんたらの様子を見てこると友達どうし、という感じだけど、あの山田とかいうドワーフの爺さんと市川つていう坊主の年の差を考えるとそれもおかしいしね……。それにしづやあの小僧、爺さんにまったく対当の口をきいているしね」

三村は説明をあきらめた。テレビもアニメもなにこの世界で、かれらの仕事をどう説明したらいいのか？ それよりかれはエレンに聞きたいことがあったのである。

「それよつきみはどうしてぼくらにこしてくる氣になつたんだ？ なにか北の大陸で目的があるのかい？」

エレンはふつと視線をそらした。

「あたしにもいいたくない」とはあるよ。まあ、マッシュの町までは一緒にいさせてもらうよ」

「ふうん」

三村がうなずくと、クマリ号の船員が近づいてきた。

エレンはそちらを見てあおざめた。

船員はわかい男で、ふつうだった男前といつていい容姿をしていふ。しかしその視線はどろんとにごり、表情は死人のようになつともある意味かれは死人とおなじなのだ。エレンの説明によると、船員はすべて海で死んだ人間を魔王が生き返らせこの船に乗り組ませてこるのでそうだ。

男はもううううとした手をあげ、ふたりをゆつくつとながめた。

「な、なんだい……なにか用かい？」

「嵐がくる」

ぼそり、と船員はつぶやいた。その声は洞窟のおくからひびいてくるよつて、どこかうつろだった。

「え、なんだつて？」

「嵐がくる。船長がそういえと命令した……船客は船室にこるよつ

「……」

それだけいひとつと船員がくるつと顔を向けたちをつた。

Hレンはふるつとふるえ、腕をあげて胸をだいた。

「まつたく氣味悪い連中だ。まあ、この船に乗り組むからには覚悟してたけど

「タバン船長はあまり死人といつ感じはしないけどね」

「そりやあいつは魔王に生命をふきこまれた死人じやなくて、もともと生きていた人間の寿命をむりやりひきのばされただけだからね。船員とはちょっとは違うし、そりじゃなくては船長の仕事はできないものね」

「嵐がくるつていつてたな。この船はだいじょうぶなのか？」

「そりやだいじょうぶさ。なにしろ魔王ののろいがかかっているからね。ちょっととやわつとの嵐なんかよせつけないよ。しかし甲板にいたら、あたしたちは魔王にまもられていないから波にさらわれるかもしね。船室にひつこんでいたほうが利口だよ」

「やうだね」

三村はうなずきHレンとともに船室につづく階段をおりていった。階段をおりる直前、三村はまた空をみあげた。

まつくるな雲はすでに空の大半をおおい、なまあたたかい風がふいていた。三村は耳なりがするのに気がついた。あごを動かすと、内耳がぼくんと鳴った。気圧がさがっているのだ。

甲板をおりて船室にはいると市川は紙のよつにしろい顔をあげた。そうとうまじつているらし。

「嵐がくるんだつて……？」

かれは船室につづりつけの一戸ベッドのしたに横たわっていた。そのそばに洋子がひざまづき、市川のひたいにうかんだ汗をハンカチでぬぐっていた。

「だいじょうぶですか」

三村が声をかけると山田は首をふった。

「どうも風邪らし。熱もあるようだ」

「そりやまざいですね」

「ああ、この船で設定をかたづけようと思つたんだが……」シリヤ市川くんが回復するまで無理かもしねいな

「え、まだやつていなかつたんですね？」

三村はちょっと驚いた。これまでの山田の説明では、かれらが設定書を描いておかなくては名前だけの町や、その住民などはこの世界に実在しないことになる。したがつてまだ描いていないマッソの町はまだないわけだから……。

「そ、それじゃこの航海は？」

「ああ、へたをすると市川くんが回復するまでながびくな

そのとき船内に「」と「」と「」とと振動がひびいた。

「な、なんだこりや！」

山田はうろたえた。

「地震……のはずないな。海の上で」

「船長が蒸気エンジンを動かしているのさ。あんたら見なかつたのかい、この船の外輪を」

レンの説明に山田はひたいをほん、とたたいた。

「あ、そつか！ じぶんで設定してわすれていたよ。この船が蒸気船だつてことを」

振動はやがて「」とん、「」とんという規則的な音にかわつた。ざばーつ、ざばーつという外輪が水をかきわける音が聞こえてくる。どうやら蒸気機関が全力をだしてこの嵐をのりきるためパワーをあげてこるのだらけ。

「おおお……

地の底からひびいてくるような轟音がせまり、船はぐつともひあげられた。

「ひやあっ！」

みな悲鳴をあげた。

山田は窓にとりついた。ガラス越しにまっくろな波が山のようにもりあがり襲つてくるのが見えた。そしてその波が視界から消え去

り、窓のそとは空だけになつた。

「うわっ！」

体がななめになり、山田は必死になつて船窓の取付金具にしがみついた。船がかたむいたせいで船窓のそとは空だけになつたのだ。からからから……と外輪が空転する音が聞こえてくる。

ふつとからだが軽くなり、五人は船室のなかで宙にうかんだ。どしーんっ！

いつたん波頭にもちあげられた船がこんどは波の谷底にたたきつけられ、全員は床にころがつてしまつた。ぎしぎしと木材がきしむ音が不気味にひびいた。

「痛え……」

もつともひどい怪我をおつたのは市川だつた。なにしろ直前までベッドでうなつていたのだから身をかわすなんてこともできない。

「市川くん！」

洋子があわてて市川のそばに這いながり近づいた。床にのびている市川の体をまさぐるとあおぞめた。

「大変！ かれ、腕の骨を……」

「なにい！」

山田もなんとか市川のそばによつていつた。

「折れてはいないけど、じりゅう脱臼したらしこわ」「なんだつて……」

ぶるん、と山田は顔を手でぬぐつた。いつのまにかぬるぬるした汗が顔いっぱいにふきでてこる。

市川の顔をのぞきこむと山田をむいている。気絶したらしこ。

「洋子ちゃん、きみ市川くんをお救いてくれ。これいじょう怪我をされではかなわん」

洋子はうなずくと、しつかつと市川の体をだきしめた。

「ざばあっ！」

甲板から水が船内にながれこんだ。三村は船室のドアにとつつき必死になつて締め切つた。が、すきまからがばがばと音を立てて海

水がふきだしてくる。たちまち船室の床は水浸しになってしまった。

それから数時間、船は嵐とたたかいつけた。

波にもちあげられ、ほおりだされ、また水面にたたきつけられと
いくりかえしで、五人は船室のなかでふらふらになつた。

が、ようやく嵐はすぎたり波はおだやかになつた。

がくがくしている膝をようやく氣力でふるいたたせ、山田は窓に
鼻をおしつけた。

「どうやらおさまつたようだな……」

窓からは雲間からぞこむひざしがぞこんでくる。

市川を見ると口をあけてながながと床によこたわり、その頭を洋
子がじぶんの膝枕におしつけ心配そうにのぞきこんでいる。はつと
顔をあげると山田の視線がそそがれていることに気づきまつかにな
つて、あわてて市川の頭を膝からはずした。市川の後頭部がごつん
と床に音を立て、かれはつめいた。

「眠っているわ。まあ、おきていたら大変だつたのから、これで
よかつたわ」

「うん」

山田はわざと生返事をすると市川のそばに膝まづいた。

「どうだい、脱臼しているつて？」

「ええ、わるいことに右肩らしくわ」

「まづいな……キャラ設定がまだなのに」

そのとき市川のまぶたがぴくぴくと動いた。

ぱちっと西田がひらき、のぞきこんでいる洋子と西田の顔をみと
めた。

起き上がるひとじてたちまち顔がゆがんだ。

「つぎやあ……」

肩をおさえてうずくまる。

「だめよー。あんた、肩を脱臼しているんだから」

「え？」

市川は洋子を見上げた。あわてて右肩に手をやり、ぎくと身を

ふるわせた。

「痛つ……」

苦痛に声もでないよつだ。

「どうする、洋子くん。」れじや ハリシよつもなこぜ。脱臼をなおすなんて、おれできないからな」

「あたしだつて無理よ。接骨医なんかじゃないんだから」

ひそひそと会話をかわしてこむとや」へHレンが腰をおろした。

「骨をはずしたんだつて？」

「ああ、肩の関節らしいけどね」

山田がこたえるとHレンは市川の肩に手をやつた。

「それならなんとかなる。あたしなら関節をもどせむわ」

そういうながらHレンはたしかめるように市川の肩、腕をまわぐつていく。彼女にふれられるたび市川はびくと、びくん、と身をふるわせた。

「きみ、ほんとうにそんなことできるのか？」

山田がそつたずねると彼女はつなずいた。

「まあね、手下の傷をなおすのも、あたしの仕事だから。」れぐらいなら直せるわ」

「じゃ、やつてくれ！ カれの腕が動かないとまずこことになる」「ここわ。それじゃ、あんたたち、ここつのからだをおもえていて」Hレンの指示にしたがい、山田と洋子は市川のからだをおさえてつけた。しつかりおさえつけられたことを確認するとHレンはこきなり市川の腕をつかみ、あつといつまもなくねじりあげた。

「あああああ！」

市川は苦痛に絶叫した。

そのとき右肩で「き、とこつ音がした。

市川はぽかん、と口を開けた。

「どうした？」

山田が声をかけると市川はおもむろにじぶんの右肩に手をふれた。

「痛つ……？ へなこよ。なおつてる」

ふうひ、……、と山田せひたにのあせをぬぐつた。

「あつたぐ、ひやひやせやがる」

「もとでもびしたけび、あまつ無理をしてはダメよ。——、——山田せひたにもしてなこと、またはずれるかもしれない。へたをするとますかにしてなこと、またはずれるかもしれない。へたをするとます

れ癖がついてしまひから」

山田せひたにわれ、市川はうなずいた。山田せかれにわれやこた。

「市川くん、きみ右手はどうだ？」「

「動かせるよ」

「やうか、それじや設定もやれるな？」

「ああ。はやくこの船旅おわらせたいからな。今夜、あざひまおつ

「や」

「同感だ」

ふたりがあたがいつなずきあつのを山田せひたに不思議ひつながめた。

「あんたたち、なに話してゐるの？」「

「あんたには関係なことな」

洋子の言葉に山田せひたに山田せひたにせねあがつた。

「なんだつてえ……」

ぴりぴつと唇のまじがふるえてこる。洋子はたちあがつた。

「なによ、やるつての？」

「やつてやひびかないか、おもへ出なー。」

山田せひたにわつてはいつた。

「まあまあ、ふたりともやめないか

「よじてよ、山田せひたん。あたし、この女盗賊こいつをやつこしたいこ

どがあるの？」

「へえ、なにがこいたいのよ、おばせこ

「おばせ……」

洋子は絶句した。たちまち顔がまつかこまる。山田せひたに山田せひたに笑つた。

「若作りしてゐるナビ、あたしの田は！」おかせなによ。あんたいい年じゃないか」

洋子の田つきが険悪なものになつた。きつさりぎり……と、音が聞こえそつなほど歯をくしぜぬ。その歯のあいだから、ひとことひとこと、おじだすように言葉がもれた。

「あんた、女盗賊だかなんだかしらないけど、どうしてそんな裸同然の格好で平氣なの？ 一日中、男に色田つかつてゐるみたいじゃない！」

こんじはHレンの顔がまつかになるばんだった。おもわすゆたかな胸をおさえる。

「あ、あたしが男に色田つかつてゐるだつて？ よ、よくもそんなことを！」

きこいつ、とこゝ悲鳴のような声をあげ、Hレンは洋子につかみかかつた。たちまちせまい船室でどたん、ばたんとふたりの女が格闘する音がひびく。そんなふたりの様子を男たちはぼうぜんと見守つていた。

「どうする、山田さん」

市川が山田に話しかけた。山田は眉をハの字にして、首を振つた。こつなつたらじぶんの出る幕ではないと言つてゐるようだ。そのとき三村が口を開いた。

「あのう……ちょっと……」

「なんだよ」

三田はふりむいた。ど、三村の顔を見てたじろいだ。三村は船窓をゆびわし、まつたおな表情になつてゐる。

「たいへんなんです！」

なんだ、なんだと山田と市川が近寄つた。市川はまだ肩がいたむのか、手で押さえたままである。

ちいさな窓に男三人が顔をよせる。なんともむせくるしき図ではある。が、三人の顔は恐怖に凍りついた。

「な、なんだありや！」

叫び声をあげたのは山田だった。

「さしゃーつ、と水しづきが窓ガラスをぬらす。そのむこうに、もうりあがる波のなかからなにかが海面を突き破つてうごめいている。おもくたれこめた空の雲間からはひつきりなしに稲光がひかり、その閃光にくつきりとうかびあがつた黒い影……。ぬらぬらとしたからだに無数の蛇のような腕がついている。その腕にはびつしりと吸盤が見えていた。

「蛸かな？」

山田がつぶやくと市川は否定した。

「いや、鳥賊だ……大鳥賊だ！」

市川の言葉は正しかつた。大鳥賊はその全身を海面にあらわにした。巨大な胴体はさきほそりのスマートな形で、その先端にはエンペラとよばれる翼のような耳がついている。鳥賊は身動きとともにその表面の色と模様をめまぐるしく変化をさせていた。

「近づいてくるぜ」

山田が叫んだ。その言葉に呼応したかのよつに大鳥賊は見る見るその距離をつめてきた。

「どしーん！」 という音とともに、船体がぐらりとゆれた。みしみしみし……と、木材が悲鳴をあげた。

「うひやあ、と悲鳴をあげ、三人は窓からあとずさつた。

ぱりん、と窓ガラスがわれ、そこからじゅるんと鳥賊の腕が室内にあはれこんだ。鳥賊の腕は室内をさぐるよつにじどたん、ばたんとあはれまわつた。

三村はその瞬間形相がかわり、すらりと腰の刀をひきぬいた。むん、とばかりにちからをこめ、鳥賊の腕をすぱりときりさく。鳥賊の腕は切り落とされ痛みを感じたのかすぐさま窓からひきぬかれた。腕がひきぬかれると、どつとばかりに潮水があふれた。その窓に、巨大な眼がのぞいた。鳥賊の眼球である。鳥賊や蛸のような頭足類は無脊椎動物のなかではもっとも進化しているといわれている。眼球は窓にぴつたりとおしつけられ、ぎょろぎょると左右に動いた。

まるでいまじぶんを傷つけた相手をさぐつているようだつた。瞳孔が怒りに燃えたかのようにひろがつた。

ぐうつ、と船室が横倒しになつた。船を大鳥賊が押しているのか？
きやあつ、と甲高い悲鳴をあげて洋子とエレンのふたりがこころがつた。

「な、なに？」

エレンが洋子から身をふりほどき、ぽかんと口を開けた。ぬぢやぬぢやと粘液の音をたて、鳥賊の切り落とされた腕が部屋の中でのたうつているのを見る。

「臭え！ なんてえにおいだ！」

山田は顔をしかめた。室内には強烈なアンモニア臭が充満していた。大王鳥賊などの深海生物は通常浮き袋をもたない。水圧が高すぎで、浮き袋等などでは浮力を調節できないのだ。そのかわり発達したのは体内にアンモニアをためこむことである。アンモニアは水より浮力があり、それにより浮力がえられるのだ。おなじような発達をさせたのは鮫である。したがつて深海の生物はおおくは食用に適さない場合がおおい。

「なんなのよ、これ？」

「鳥賊だよ。大鳥賊が襲つているんだ」

市川がどなつた。エレンは傾いた床をはいのぼるようにして窓にとりつくと外をのぞきこんだ。とたんに割れた窓ガラスに大鳥賊の巨大な目玉がぬつとばかりにあらわれた。エレンはひえつ、と悲鳴をあげ、たたらをふんであとずさつた。やつきまで穏やかさをとりもどした海面も、ふたたびもりあがり、墨をながしたような雲がひくくたれこめ、雲間からはときおり雷光がひらめいた。どうやらさつき嵐が過ぎ去つたと思ったのは早計らしい。もしかしたら台風の目を通過しただけかもしぬなかつた。

部屋のドアがどんどんとあらつぱくたたかれた。なんだ、と全員がそつちをふりむくとドアを開いてなかにはいつてきたのは船長のタバンだった。もともとくらい顔色をさらにあおざめさせ、船長は

むつりと全員の顔を見わたした。

「手伝つてくれ、あの皇帝鳥賊のやつがこのクマリ町を沈めようと
している。船員たちが立ち向かつてゐるが……。ぐずぐずしていた
らこの船は海の藻屑だ」

あいかわらずタバン船長の声は洞窟からひびいてくるようなうつろなものだったが、表情は真剣だった。

エレンは全員をふりかえり叫んだ。

「なにあんたらぼーつ、としてんだよ! もあ、甲板にいこー!」

ヒレンの声に全員が夢からさめたような顔になり、おののおの武器を手に取った。市川もふらふらとしながら剣をにぎる。山田はんな市川に気がついて声をかけた。

かりじやないか

洋子は市川にちかづくと背中をおしてベッドにつれていった。

あんたは癪でないか」「

市川は洋子にしゃれ素直に、「なすぐとすとんと腰をおいた」そ
のまたおれこむよにあおむけになり、洋子はそのうえから毛布
をかけた。

風雨をついて聞こえてくる妙な音に、なんの音かとそのほうを見ると船長が皇帝鳥賊とよんだ大鳥賊が甲板に足をのたくらせて居る。音はその鳥賊が嘴をかみあわせるさいにたてるのだった。

「でけえ……」

あらためて山田は鳥賊の巨大さに驚いた、とばかりに声をあげた。たしかに巨大だった。なにしろ胴体だけでもクマリ号の半分はあ

る。腕をいた全長は船の一倍はあるだらう。その十本の腕を鳥賊は船の胴体にぎりぎりとまきつけていた。そのうちの一本は先端が切られている。さつき三村が切り落とした一本である。しかしそれでも船にまきつけるにはじゅうぶん長い。鳥賊の胴体の皮膚はめまぐるしく色や模様を変えていた。

甲板には船員が全員得物をもち、鳥賊と格闘していた。というよりはその腕とある。船員たちは船にからみついている鳥賊の腕をなんとか引き剥がそうと剣や斧で切りつけていた。しかし先端部分ならともかく、胴体ちかくの腕のふとい部分の皮膚はぶあつく、刃物できりつけてもぶあつい皮膚にめりこむだけで引き抜けなくなってしまう。さらに腕には無数の吸盤がついていて、それがしつかりと甲板や船体にはりついていて、始末がわるい。鳥賊は切りつけてくる船員たちをうるせく感じのかときたま空いている腕をふるつて船員のからだをまきあげ、空中にもちあげた。船員たちは悲鳴をあげて抵抗するがまったく効果はなく、そのまま鳥賊の嘴にもつていかれる。嘴はがちがちとかみ合わさりあわれな犠牲者をはさみこんだ。

ぎやあ、とこう悲鳴とともに鳥賊の嘴から鮮血がふきだした。

「こゝりつー！」

三村が叫んだ。

一瞬にしてさつきまでの氣弱な表情はぬぐいさられたように消えていた。そしてときおり見せる勇者の表情があらわれている。三村の声に引かず、山田と洋子は武器をもひ鳥賊に突進していった。

何でこんなこと、おれはやつてるんだ……と、山田はふと思つたが、こうなるともう自分からだが自分のもでなくなつてしまふようである。まるでどこか遠くからながめているよつて自分の行動を客観視するべつの自分がいるような気になつてくる。

わあわああ！

三村は絶叫した。つられて山田と洋子も武器を手に口をいっぽい

にあけ、怒号とも絶叫ともつかないわめき声をあげる。もつこいつなつてはやぶれかぶれである。

ぎりり、と鳥賊の眼球が動いた。

甲板を突進する三村に気づいたようである。ぐるり、と鳥賊はからだの向きをかえ、三村に向き直つた。

ぬらぬらとした粘液にまみれた腕がふりあげられ、ぶうんと空をきつて三村をおそつた。三村は両手に剣をかまえ、おそいかかる鳥賊の腕にきりつけた。

刃が腕にくいこみ、腕の吸盤がぶつぶつと音をたてて宙にとんだ。ぎえええええっ！

鳥賊は怒りにもえまつくろな嘴をがちがちと鳴らした。

三村は田にもとまらぬはやさで剣をふりまわし切りつけるが鳥賊にとつてはそれほどの痛手ではなによつだつた。ゆうぜんとした動きで三村をあしらつてゐる。

「ちくしょう！ 」

三村の横から山田がとびだし、手にした斧をふりあげた。ずぶり、と斧が肉にくいこむ。山田の顔色がかわつた。肉にくいこんだ斧はそのままびくとも動かない。

ぐい、と鳥賊は腕をひいた。山田の手から斧が肉にくいこんだまま離れてしまつ。山田はからつぽの両手を見つめてぽかんと口を開けた。

がらがらがら……。

暗雲のむこうで雷鳴が鳴り響き、あおじろい雷光があつて雲をきりさいて光つてゐる。ざあああつ、といつ横殴りの雨と、船首にぶつかる波が三人のからだをぬらした。

稻光のひかりにシルエットとなつた鳥賊の腕がふりあげられ、山田に襲い掛かつた。山田は恐怖の表情をうかべていた。せまつてくる鳥賊の腕を山田はぼうぜんと見詰めていた。無意識に山田は防御の体勢をとり、両腕を天にむけた。かれは眼をとじた。死の予感が山田に襲つた。

!

「山田さん！」

洋子が声をあげた。

彼女の悲鳴に三村も山田の状況に気がついたようだつた。が、手遅れだ。なにをするにも遅すぎる。

と、山田の腰の小物入れの蓋が開いた。なかからきらきらと輝く小石が宙にうきながら山田のさしあげた腕のなかにとびこんだ。

そのとき、突然のひかりの爆発があきた。

ばしゃーんっ、と強烈な音とともにまっしろなひかりが山田の全身をつつむ。金臭いオゾンのにおいがあたりにただよつた。三村と洋子のふたりの視界はとつぜんのひかりの爆発になにも見えなくなつた。

ようやく見えるようになったふたりは信じられないものを見た。ぼうぜんと船首あたりの甲板に立ちすくんでいる山田。

そして船首にからみついていた巨大鳥賊は、全身すべて黒焦げになつていた。ぶすぶすとしろい煙が鳥賊の皮膚のあちこちからたちのぼり、船首の木材もぱちぱちと火を上げ、はぜている。あたりにはオゾンの金臭いにおいが充満していた。鳥賊は完全に息絶えていりらしく、ぴくりとも動かない。その両目は熱でまっしろに変色していた。

「やつたな、あんたら」

声をかけられ、三村はびくつとなつた。声をかけてきたのはタバコ船長だった。

「あのドワーフがこんなすごい魔法をつかえるとは知らなかつた」船長のことばに三村と洋子は山田を見つめた。山田はふたりの視線を感じ、はつとなつた。

「おれだつて知らなかつたんだ！ いつたい、なにがおきたんだ？」

「あんたが魔法をつかつてあの大鳥賊をやつつけたのよ」

洋子がこたえる。山田は信じられないといつようじて首をふつた。

と、その視線があしもとにおちた。そのままゆっくりとかがむと

なにかをひるいあげるじぐわをする。

「あひいつ！」

ちじわく山田は悲鳴をあげた。指先を口のなかにいれ、しゃぶつている。

洋子が声をかけた。

「どうしたの？」

「火傷しちまつた……。これは……？」

ふたたび山田はががみこんだ。その視線の先を洋子と三村はのぞきこんだ。甲板に一個の透明な小石がころがっている。その小石の内部からはオレンジ色のひかりがゆらめいていたが、見る間にそれはうすれ、消えていった。

「賢者の石……」

三村がつぶやいた。洋子はうなずいた。

「そうよ、あのオランという魔法使いのおじいさんが山田さんにあげたものね」

山田はおそるおそる指先を賢者の石にちかづけた。ちよん、ちよん、とつづいてみる。

「もう熱くはない……」

つぶやくと拾い上げ、まじまじと見つめた。石は透明な青緑色の色にもどっていた。

なんとなく三人は顔を見合せた。

「なるほど……、あの老人が魔王との戦いに役立つとはひこうひこうとなんだ」

「どうこうことだい、そりや」

「山田は三村のことばにきつとなつた。

「わつと山田さんが」の石を使って、魔王を倒す決定的な役割をはたすんですよ」

三村のことばに山田は苦笑をつくつた。

「おれが？ 冗談じゃない……おれはそんな人間じゃない……」

洋子はなぐさめるように言った。

「しょうがないわよ、きっと木戸監督のシナリオにそういう役割をあたえられているんだわ。とにかく魔王を倒さないかぎりあたしたちはもとの世界に帰れないんだから」

「なんだ、いまの音は？」

もうひとつとした足取りで階段をのぼってきたのは市川だった。顔は熱っぽくあかくそまり、ふうふうと息をついている。

「まるで雷がおちたみたいだつたぜ」

洋子は首をふった。

「あんた、風邪ひいてるんだから寝てないとダメじゃない！」

「こんなゆれていちゃあ、寝てなんかいられねえ……」

市川はまっさおな顔色になると、ふなべりにしがみついた。げえげえと胃の内容物を吐く音がひびく。洋子はあわててかれの背中をさすりにかけよった。

「なるほどねえ……」

エレンは眉をぐいとあげ、つぶやいた。

「あたしがあのぼうやの肩を治療したもんだから、氣に入らなかつたんだ」

山田と三村は顔を見合させた。そしてどちらともなく肩をすくめた。どうにしろこれ以上事態をややこしくするつもりはない。

「まことに……」

帆を見上げていたタバン船長は眉をひそめた。

船長のことばにみな帆柱をみあげる。クマリ号のマストにはられている帆はみな目一杯にふくらんでいる。そのはしづりびつともかく振動していた。

「帆をおろせえ！ ひっくりかえるぞ」

船長は声をはりあげた。その命令に、こままでおつづいたように鳥賊とのたたかいを見守っていた船員がはじかれたように船のマストにとりついた。

しかし帆をおろすには船員の数はあまりにたりなかつた。さつきでの大鳥賊とのたたかいで何人かが海にほおりこまれてしまつてい

たのである。

船長はそれと見てゐるや、腰のナイフをひきだした。それをうん、と腕をいっぱこいのばすと空中にまおりあげた。

ナイフはくるくると回転しながら宙をとぶと、一枚の帆にぐさりとつきさつた。

わずかにナイフが切り裂いただけであつたが、強風がその切れ目を見る見るひろげた。帆布は數度の船長のナイフの投擲によつて切り裂かれていつた。

が、それも焼け石に水であつた。

必死になつて帆をしまおうとする船員たちの努力にかかわらず、クマリ号は猛烈な強風をつけ、さらにもときたまマストよりたかだかともりあがる波にさらわれ、徐々にダメージをためこんでいつた。めりめりめり……。

いやな音をたて、クマリ号のマストはまんなかから折れていつた。

「わあ！」

甲板にあつところに割れ目がひろがると、折れたマストがあたりの構造材をまきだえにしてたおれていぐ。それが船の重心をくるわせ、クマリ号は完全に横倒しになつてしまつた。

そこに山脈のような横波がかぶさつていつた……。

みんなのしかかる透明な海水の壁面を恐怖のまなざしで見つめていた。

飛行船（前書き）

難破した一行は飛行船に救助される。
そしてあらたな目的地がしめされる」とい
魔王の城は近い！

。 。 。 。

ぱちゅり、ぱちゅりと、いう水音に市川は目をやめました。
気がつくと横顔を海水があらつてて。口の中は塩辛い味がいつ
ぱいになつていて。

目をあけたが、すぐどじた。

あけつづけていられないほどの強烈な日差し。太陽のひかりはま
っすぐまひえから照りつけてくる。

おそれおそれ田をゆっくり開けると、市川はあたりを見回した。
まつさおな空に白い雲。水平線がくつきひとつと見えていて。

「気がついたみたいだな」

山田の声である。市川はふりむくとあつとなつた。

なんと全員がそろつていた。それもクマリ号の甲板上である。が、
その甲板はまんなかからまつぶたつに割れ、船体は半分以上が水に
つかつている。マストはなくなつていた。市川がいるのはその前半
分であつた。完全にまつぶたつになつた船体は、木材の浮力のみで
海面をただよつていて。甲板はななめになつており、船首部分は水
面のしたである。

「嵐はやんだみたいだな……」

市川はつぶやいた。山田はうなずいた。

「まあ、命があつただけでもよかつたよ。あんな嵐だから、命をお
としても不思議じやない」

「船長は？」

市川の質問に山田は顎をしゃくつた。

タバン船長はふなべりに身をもたせかけ、じつと水平線を見つめ
ている。

「ずっとああしていいんだ。船がいつなつかまってショックだったんだろ?」

「市川君、風邪はどうなったの?」

洋子が話しかけてきた。いわれて市川は気がついた。あれほどどの熱と頭痛がすっかりひいている。

「なんだか直っているみたいだ」

なあんだあ、というほつとしたような顔色が全員につかんだ。

「さあ、これからどうなるか……だが」

「どういう意味だい?」

山田はすっかりのびた顎鬚をさすった。

「この辺で、なにかがおきてもいいはずなんだが……」

その山田のことばがおわるか、おわらないかといつタイミングでその音が聞こえてきた。

ぐおおおおんん……。

重低音のその音は空から聞こえてきた。

仰ぎ見て、全員はあっと驚いた。

「なんだ、あれは……」

タバン船長がつぶやいた。

空中に浮かぶ巨大な葉巻型の物体。

それは硬式飛行船であった。

ヒンデンブルグ、ツェッペリン……、第一次大戦前にすっかり姿を消した、水素やヘリウムの浮力を利用して空中をゆく巨大な船。それがクマリ号の残骸の上空をゆっくりと近づいてくる。

「まいつたね……、おれが描いたとおりじゃないか」

市川は頭をかいた。

山田は市川の耳に口を寄せたやいた。

「こいつは木戸さんのしわざだと思つていいんじゃないか?」

「なんだって」

市川もまた山田に附つてわざやき声になっていた。

「ほら、おれたちが面白がつてストーリーにないキャラや設定を描

いたろう。木戸さんはあれらを無視せず、しかも無理なく登場させるためにあの嵐や、鳥賊の襲撃をそこそこできたのかも知れないぞ」へつ、と市川は目をむいた。

「木戸監督のオリジナルってわけか！　たしかにあの鳥賊や、飛行船はストーリーにはないもんだ。それでおれたちあんな目に……」

山田は首をふった。

「おれたちは軽い気持ちでしたことだが、木戸さんにとつては重大な違反に思えたんだろうな。おれたちはいつか魔王を倒すという最終目的があるから殺すわけにはいかないが、勝手なことをするともつとひどい目にあわせてやる、という警告かもしれん」

「じょうだんじやねえ！　そんなこといちいち考えてキャラ設定やつてられないよ。だいいち、木戸さんがおれたちにしかえしするかもしれないと思つてびくびくしながら設定してたら、なにも描けねえじゃないか」

「それはそうだが……」

山田はひたにふかいしわをよせた。

市川のいかりはわかるがいまは一刻も早くもとの世界に帰りたい気持ちでいっぱいである。ともかく木戸のストーリーにそつて設定を描き、魔王との最終決戦にのぞみたかった。もう脱線しまい、と山田はひそかに誓つた。

ふりあおぐと飛行船がゆつくりと高度をさげてくるとこりだつた。船腹にはゴンドラがつりさげられ、そのゴンドラの両側には推進力をえるためのプロペラが回つている。

まわりを見回すと近づいてくる飛行船をふつうにおいでいるのは市川、洋子、三村の旅の仲間だけで、タバン船長、そしてクマリ号の船員たちはかおに恐怖のいろをありありとうかべている。

近づいてくる飛行船は海上に浮かんでいるクマリ号の残骸のそばに横付けするつもりか、ぐるりと船首をまわし、その横腹を見せた。その船体に描かれたマークを眼にしたタバン船長らはみな色をうしなつた。

「魔王の目だ！」

飛行船には日を図案化したマークが描かれていた。船長、船員たちはその日を見まいといつせいに反対側をむき、手で顔をおおつている。

飛行船はゆつたりと回頭して近づいてくる。ゴンドラの窓に乗組員だろうか、数人の顔がつきだされ、こちらを指さしているのが見えた。やがてゴンドラの横腹の扉が開かれ、なかから縄梯子がおろされた。縄梯子の先端は甲板にたらされた。乗組員のひとりが両手をくちにちかづけ、メガホンをつくつた。

「おおー、登つてーーー。」

三村はうなずくとはじごをつかみ、登りはじめた。はじごはゆらゆらとゆれるが、かれは器用に手足を動かしすると登つていく。かれがゴンドラにたどりつくと待ち構えていた乗組員は手をかして乗り組ませてくれた。それを見て市川と洋子もつづいた。

はしげに手をかけようとして山田は船長たちをふりかえた。船長たちは恐怖の表情をつかべはしげをのぼつていく市川と洋子を見上げている。

「あんたら、
来ないのか？」

そう話しかけると船長はぶるぶると首をふった。

「とんでもねえ！ ありや、魔王の飛行船だ！ あんなのに乗り込
んだら、どんなのろいがかかるか……」

「魔王ののろいだつて？ それならもうあんたら、すでに魔王ののろいにかかつているんじやないのかい？」

そこではじめてエレンが笑い声をあげた。

ろいにかかるてゐるんぢやないのかい?」

「なんだと！ わしがいつ、魔王ののりにかかっていると言つた？」

?

船長の「どうせHレンはがくせんとなつたよ」だつた。

「でも、でも……、町のみんなそひ立つてゐるよ。あんたは五十年
前からちつとも変わつちやしない……年だつて、百才をとつてもこ
こで

していははずだつて」

「そりや、わしの父親のことを言つてゐるんだ。わしは父親からクマリ町をつけついで船乗りをしてゐるんだ。あんたらの町の人間は、わしらの船が桟橋についたときからいつさいわしらの顔を見ないようにしてゐるから、親父とわしがいれかわつたことも気がついておらんのだ！」

「そ、それじや 船員たちも？」

「そうだ、マッソの町で雇い入れた船員ばかりだ。トラントンの町ではだれもわしらの船に乗り込もうといつやつはいなかつたからな。あんたらをのぞいて。

ああ、死人に見えるといふのか。そりや そつだろう。

なにしろマッソの町とトラントンをつなぐ航路は昨夜の嵐がいつも吹き荒れているから、トラントンの町についたころは船員たちも疲れて、死人同然といつていい状態になつてゐる。わしらはあんたらの町で荷を運ぶだけで面倒は起きたくないから、あまり関わらないようにしてゐるだけだからな」

エレンはなんと答えていいものか、わからないといつた表情だった。

「おおーい、あんたら乗るのか、乗らないのか？」

そのとき飛行船のゴンドラから乗組員が顔をつきだし声をかけてきた。山田はひとつうなずくとほじごをにぎり、エレンと船長たちをふりかえた。

「おれはのぼるよ。どちらにしろ、このままじや鮫のえさになるか、飢えて死ぬかどつちかだからな。それにあの乗組員たち、どう見ても魔王のるいにかかっているようには見えないけどね」

そういうと山田はほじごをよじのぼりはじめた。必死によじのぼる山田は田をとじていた。かれは高所恐怖症なのだった。

飛行船の乗組員がかれのからだをつかんでひきあげてくれるのを感じ、ようやく山田は田を開き下を見た。

エレンがすぐあとから登つてくるところだった。

彼女の登つている姿を甲板でタバン船長が見上げていた。エレンがゴンドラに乗り込むと船長がはしごをつかみ、ゆっくりとのぼりはじめた。船長の顔は蒼白だった。

タバン船長のあとから生き残った船員がのぼってきて、ようやく全員が飛行船に乗り移ってきた。

ようやく人心地がついた山田は飛行船の船内を見回す余裕がでた。救い上げてくれた乗組員がぐるりとまわりをとりかこんでいる。みな好奇心いっぱいの表情で、じろじろと山田や市川、三村、洋子などを見つめていた。

「ようこそ、このロング号へ」

乗組員のなかで年長らしい男が一步進み出ると手をつきだした。みなその乗組員の男と握手をかわし、礼を言った。たちまちほかの乗組員も口々に歓迎の挨拶をはじめ、その場はいっきになごんだ。最初に声をかけてきた年長の船員は副長だということだった。

そのなかで山田はクマリ号のタバン船長以下、船員たちがみょうに固い表情をしているのに気づいた。全員、この場にうむとけようとせず、飛行船の乗組員に話しかけられてもただあいづちをうつだけでいる。

やつぱりこの飛行船が魔王のものと思つているのだろうか。

最初に挨拶にたつた副長が口を開いた。

「いま船長があんたらに会いにくるから、ここに待つてくれないか」その言葉がおわらないうち、廊下を近づいてくる人影にみな気づいた。

ほう、と市川、山田、三村の男三人は感嘆の声をあげた。

船長は女の子だった。

しろい上着はセーラー服で、下半身はふとももがむきだしになつた短いパンツをはいでいる。年令はまだはたち前といつてよく、卵形の顔に黒髪をきりつと後頭部でまとめている。その髪の毛はふとい三つ編みにして腰のあたりまでのびていた。背中には日本刀を背負い、それをたすきがけにした紐でつるしている。足元は編み上げ

の革靴で、かかとが高くなっている。

四人の中ですばやい田配せがかわされた。このキャラ設定は、あの夜ワルノリして描いたセーラー服の少女である。木戸監督はかれらの設定を使いきるつもりだらうか。それならほかに設定した宇宙人とか、戦車むけの物語に登場させるつもりだらうか？

「ヨーリ！」

とつぜんの叫び声にみなふりかえった。声をあげたのはエレンであつた。彼女はぼうぜんと口を開け、セーラー服の美少女の顔を見つめている。声をかけられた彼女はエレンを見てぎくりとなつた。

「エレン……」

「ヨーリ！ あんた……こんなところでなにやつてんのよ？」

エレンはぐい、と一步前へ進み出た。ヨーリとよびかけられた彼女は一瞬ひるんだ顔になつたが、それでもあごをあげエレンの顔をにらみつけた。

「あんたにそんなこと言われたくないわね……エレン」

ふたりはしばしにらみあつた。エレンはふつと肩の力をぬき、口をひらいた。

「あんた、船長なんだって？」

ヨーリはうなずいた。

「そうよ、神聖ゼン帝国の飛行船部隊の『ホール号船長』とこつのがいまの身分。どう、驚いた？」

エレンはくすりと笑つた。

「驚いたわよ……！ あいかわらずあんたはあたしを驚かせてくれるわね」

そういうとエレンはあははは！ と、天井を仰いで笑い出した。

ヨーリもまた顔をほころばせた。

「あたしも驚いたわ。なんでお姉ちゃんがここにいるのよ？ トランソンの町にいるはずじゃなかつたの？」

「お姉ちゃん……あんたたち、姉妹だつていうの？」

洋子があきて声をあげた。エレンはくるりと洋子をふりむいて

うなずいた。

「そうよ。あたしが盗賊家業をはじめた以後、この子はそんな商売はいやだつてあたしのもとを飛び出したのよ。そのまま消息不明だつたけど、まさかこんなことになつてゐるとは思わなかつたわ」

ヨーリは肩をすくめた。

「お姉ちゃんはあたしに盗賊の片腕になつてほしかつたらしげいけど、あたしはこやだつたの。だつてトラントンの町だつたら盗賊だつて大手をふつて歩けるけど、ほかの町じゃお尋ねものだわ。そんな田陰のくらし、こめんだもの」

「あんたねえ……」

エレンがいいかけるとヨーリは手をふつてそれを止めた。

「そのことにつこちやあたしとお姉ちゃんとでわんざり話し合つたはずでしょ。それよりどうしてお姉ちゃんがこんなことにいるのよ？ まさか盗賊をやめたわけじやないでしょ？」

妹に質問され、エレンは黙つた。その顔を見てヨーリの眉があがつた。

「ねえ、お姉ちゃん。まさかまだあれの」とことを？」

エレンの顔に血が上つた。

「あんたには関係ないわよー」

ヨーリは首をふつた。

「あきれた！ まだあきらめられないのね……。まあ、それがお姉ちゃんらしさとはこえるけど」

みなが顔に疑問符を浮かべているのを見てとつたヨーリはふつと笑つた。

「いつとくげいの」とはあたしとお姉ちゃん、姉妹のことだから、あんたに説明するつもつはないわ。お姉ちゃんも話す『氣』はないはずよ。だから尋ねても無駄よ」

機先を制せられ、洋子をはじめみな心中で舌打ちをしたが、どうやらそれ以上そのことについて話す『氣』はふたりにないようだつた。ヨーリはみなを廊下のさきへうながした。

「それより食事はどうかしら？ 」 うちに食堂があるから、お腹がすいているならなにかつめこみましょつよ。それにあんたたちのことも聞きたいしね」

食事と耳にして不覚にもみんなの空腹感が刺激された。ぐつ……、と山田の腹がなり、かれは顔をあからめた。

それを聞きつけヨーリはにやりと笑つた。

「どうやらお腹がすいている人がいるみたいね。それじゃ食堂へどうぞ！」この廊下をまっすぐだから

そういうと彼女はさきにたつて歩き出した。副長が口をひらいた。

「さあ、みんな。船長の「」招待だ。この船じゃ豪華客船のような食事はだせねえが、それでも腹がちやんとふくれるだけのものはだすぜ」

が、タバン船長とその部下たちはなぜか目をきょときょとさせただけで動き出さなかつた。副長は眉をひそめ、タバン船長にちかづいた。

「どうした、あんたたち腹はへつていねえのか？」

副長が一步ちかづいただけでタバンの顔は蒼白になつた。あわてて手をふりまわし、あとずさる。

「やめてくれ！ われたちにかまわねえでくれ！」

「なんだ、なんだ。あんたらいつたい、なにを怖がつているんだ」

「おれはマッソの町でこの飛行船をなんども見たんだ。この飛行船はいつも魔王の城のある北の山脈のむこうから飛んでくるんだ。こいつに描かれているマークを見たる。ありや、魔王の紋章にきまつてら！」

タバン船長の言葉に副長はかつとなつたようだつた。

「なにを馬鹿なことを……！ この飛行船は神聖ゲゼン帝国の正式な飛行船部隊の一隻だし、描かれている紋章もゲゼン帝国の由緒ある「事象の地平線を見渡す印」を図案化したものだ！ 魔王の紋章だつて？ それじゃあんたは魔王の紋章というのがどうこうものか

知っているのか？」

言われてタバンはぐつとつまつた。

副長は身をそらせた。

「ほひら見ろ！ あんたらマッシンの連中はおれたちの船を見てこわがるが、その実ほんとうのことはなにも知っちゃいないんだ。魔王だつて！ 「冗談じゃねえ、おれたちこそ魔王のちからに対抗しているんだ。おれたち神聖ゲゼン帝国がなかつたら、マッシンの町なんかあつというまに魔王の軍勢に蹴散らされているところだ」

「へえ、とタバンは副長を見上げた。

「魔王の軍勢に対抗しているんだつて？ それじゃあんたら、魔王と戦つているつていうのかい？」

副長はいやいや、と首をふった。

「戦つてている　といえるほどりつぱな」とはしちゃいねえ。魔王の魔力をくいとめているだけで精一杯のところや。しかしおれたちのはたらきがなけりや、魔王はいまごろマッシンの町はおろか、トラントンの町まで支配しているところだよ」

タバンの顔に尊敬の表情がうがふ。

副長はどん、とタバンの背中をたたいた。

「それより飯だ！ 腹がへつていちゃ、なにを見ても気分がめいるつてもんだ。さあ、いこつぜ」

なんとなくそれでタバン船長のうたがいもはれたようだつた。副長とタバンは肩をそろえて歩き出した。それを見て、部下たちもつづく。

全員、飛行船の食堂に集まり、飛行船の乗組員が食器をくぱりはじめた。食器はすべて金属製でできていた。じつと三村が食器を見つめているとヨーリが声をかけた。

「食器に興味があるの？」

「い、いや……」

ヨーリに見られていたと思って三村は顔をあからめた。

「陶器や磁器で食器をつくると万が一のとき割れて怪我をする」と

があるからね。だから食器はなるだけ金物にする」と云つてゐるの
だ」

ふうん、と三村はうなずいた。そこへ乗組員がおおきな寸胴を運
んできた。ほかほかとした湯気が寸胴の蓋からもれてくる。乗組員
は中身をよそつてみんなの皿にもりつけていった。山田はスプーン
をつかつてそれを口にはこんだ。どうりとした、香辛料がふんだん
につかわれた粥状の食べ物である。つけあわせにボイルしたソーセ
ージと、つぶしたポテトがついていた。まずくはないが、とりわけ
旨いというわけではない。そんな山田の顔色を読んだのか、ヨーリ
船長は口を開いた。

「こんな空の上じゅうじつた食事はできないから、がまんしておくれ
よ。まあ、腹はくちくなるはずだ。ゲゼンについたら、ちやんとし
た食事をだせるから」

ヨーリ船長のことばにタバンは皿をむいた。

「失礼、いまわつせなんと……？」

「ゲゼンに行く」と言つたつもりだけ、それがなにか？

「わしらはつべきつマッソの町へむかうものと思つて……」

タバンはぐどもどと言い訳をした。

「マッソの町にはこの飛行船を係留する設備がないから着陸できな
いの。ゲゼンにいたらそこからあなたがたはマッソの町へ帰れば
いいわ」

なるほど、とタバンとかれの部下は納得してスプーンをつかつて
もくもくと食事をつめこめはじめた。そんなタバンたちをヨーリは
じつと見つめ、話しかけた。

「ねえ、タバン船長。相談なんだけど、あなたがた船をなくして困
つてるのでしょ？」

かちやり、と食器をおいてタバンは顔をあげた。

「まあ……そうですが……」

「わがゲゼン神聖王国では魔王と戦うために兵士を募集しています。
あなたがたが募集に応じてくれれば、わがゲゼン神聖王国飛行師団

は歓迎しますよ。あなたは長い間船長をつとめていたから、飛行船の一隻をあたえ、船長としてむかえることもあるたしの一存で決定できるんです

「なんですと……」

タバンはあっけにとられていた。いつもは青白い顔色が、このときばかりは紅潮している。部下たちも食事の手をとめ、じつとタバンのほうを見つめていた。

三一リはにつこりと笑いかけた。

「まあ、いきなりの話しながら返事は急ぎません。ゲゼンへ到着するまで考えてください」

タバンはうなずき、田の前の食器を見つめ考え込みはじめた。

三一リはふたたび三村に顔をむけた。

「さて……のこったあなたがたですが、いったいあなたがたの目的はなんですか？　タバン船長の船に乗つてマッシンをめぞしていのはなぜ？」

三村はゆっくりと答えた。

「僕たちの目的はあなたがたと同じです

三一リの瞳がおおきく見開かれた。

「僕らは魔王を倒すため旅をしているんです

そうして三村はドラン公国の中二郎姫が魔王にさらわれてからのことを要領よく説明していった。もちろん、現実世界からこの世界へ転移したことはふせていて、何度もさまざまな場面で説明をくりかえしているので、その説明は滑らかだった。

三村が説明をおえると、三一リの瞳はきらきらと輝いていた。ほほはピンクにそまり、あきらかに感銘をうけている様子だった。

「すばらしくわ！　魔王と戦っているのはわたしだけだと思つてたのだけど、こんな勇者のみなさんが参戦してくれるとは…。ぜひあなたがたはわがゲゼンへいらしてください、法皇さまにお会いしてもらわないと…」

「はあ？」

三村のくちがぽかんと開いた。ヨーリは興奮していた。

「法皇さまはわがゲゼンで魔王の魔力を封じるちからの持ち主なのです。しかしさすがの法皇さまもちかじろは寄る年波には勝てず、その法力もよわまるいつぱうなのです。このままでは魔王の魔力に圧倒されるかもしれないと案じていました。ですからあなたがたの助力が必要なのです」

両手を机におき、ヨーリは立ち上がった。

「お願い！ ゼひ法皇さまに会つてくださいー！」

「妙なことになつたなあ」

市川は嘆息した。

食事がすみ、四人は飛行船の中に部屋をあてがわれた。山田と市川、洋子とエレンはそれぞれ一部屋で、ベッドがふたつある部屋で、三村だけひとり部屋だつた。どういうわけか三村のことをこの世界の人々は高貴な身分の人間と思い込む傾向がある。したがつていろいろな場面で特別あつかいをされるのだが、ほかの三人はそれになれてきていた。

「まさかこの飛行船の船長が、エレンの妹だとはなあ！」

山田が市川の言葉に合いの手をいれる。

そのエレンはこの部屋にいない。

船長室にヨーリと向かっている。たぶん、姉妹で積もる話しへに夢中になつてゐるのだろう。

市川は肩をすくめ口を開いた。

「まつたくだ。しかしどう考へても都合のよすぎる話じゃないか？ 難破して、そこで助けられた相手の船長が妹だなんて」

山田はふつ、とふきだした。

「木戸さんの、ストーリーづくりの下手さが露呈したつて感じだな……。こんな」都合主義、最近じやライトイベルでも珍しいんじやないか？」

「ちょっと、木戸監督のことはどうでもいいでしょー。とにかく設

定よ！ あんたら、家へ帰りたくないの？」

無駄口をかわしていた市川と山田は洋子に叱られ首をすくめた。三村、市川、洋子、山田の四人はその三村にあてがわれた部屋にあつまり、これからのことと相談しようつとことになつたのである。

「ともかくゲゼンという町の設定を描かなきやなあ」

山田は窓際にちかいところに椅子をおいてすわりこんでつぶやいた。

「ああ、おれもゲゼンの法皇さま？ とかいうキャラの設定をしなきや……そうしないと、この飛行船はどうにもつかないことになつちまつ」

市川がそれに同意した。

洋子は首をかしげた。

「それにも聞いてことのない設定がつづきつづけてくるわねえ。ゲゼン、なんて町の名前今まで出たつけ？」

山田はうなずいた。

「企画書のなかじやなかつたな。もつとも企画書も魔王とたたかう最終場面についちゃかなりあいまいな書き方をしていたから、監督の頭のなかにあつたかどうか疑問だよ。でもこれでいよいよ魔王とのたたかいが現実のものとなってきたみたいじやないか！ これがすめば、おれたちもとの世界に帰ることができんだ」

山田がはれはれとした表情をしているのにたゞし、市川はややつかない顔色だつた。

「どうだかねえ……これが全員ハッピー・エンドになるつて思つていいのか？」

え？ と、ほかの三人が市川の顔を見つめた。市川は言葉をついで説明した。

「いや……、もしも監督の頭のなかに登場人物のだれかを犠牲にしよつ……なんてことがあつたらどうする？ ほら、たいていこういうファンタジーじゃ、最期の決戦で仲間をすくうためだれかが犠牲

になつて死ぬ……なんて場面が出てくるじゃないか」
市川の言葉にみな凝然となつて声をうしなつっていた。

洋子は首をふつた。

「木戸さんがあたしたちのだれかを殺そうと考へていろいろの
？ そんなこと信じられないわ。いくら作品のためだつて、あたし
たち仲間だつたじやない」

「うん、現実世界ではね。でも木戸さんがおれたちがこの世界に放
り込まれて冒険をしているつてこと、承知しているかどうかどうし
てわかる？」

「ああ……」

洋子はうなずいた。

「そうよね……、あれから木戸さんはあたしたちの前から姿を消し
ているし、たぶんなんらかのかたちでこの世界のストーリーつくり
に関わつていてるんでしょうけど、あたしたちがこんな苦労している
ことなんて想像しているかどうかね……」

「そーや。」の四人のなかじや、いちばん死ぬ可能性のたかいのは
おれだよ。

三村くんはどいつもこその物語の主役らしいから最期まで死ぬこと
はないだろう。山田さんも準主役っぽいから最期まで登場するんじ
やないかな。洋子ちゃんだつてこの物語のヒロインだ。

となると、いちばん死にそうな役割はおれだつてことになる。ほ
ら、たいていの冒険物語で最期に死ぬのはおれみたいなタイプだろ
？ それまでは地味な役割に甘んじてはいるが、最後の最後で派手な
死に方をして視聴者の記憶にきざみこまれる……そんな役割だ」

山田は笑顔になつた。

「おいおい……それをいうならおれたち四人、だれをとつても最期
に仲間の犠牲になつて死ぬ可能性はあるぜ。

三村くんが主役だつていうが、もしかしたら主役は市川くんのほ
うかもしれないじゃないか。おれだつて役割の地味さからいうとど
っこいどっこいだ。洋子くんだつて、木戸監督がここはヒロインの

死が必要だ……なんて考えるかもしねなこじやないか

「やめてよ縁起でもない！」

洋子はさけんだ。

市川はふいに乾いた笑い声をあげた。

「はははは……どうも考えすぎちゃったみたいだ……悪い……変なこと口走ったみたいだ……」

山田は立ち上がった。

「ともかくおれたち設定書を描いひづやないか。はやくこの冒険を終わらせたいよ」

市川もうなずいた。

「わかった……とにかく仕事をすませよつや」

夜中になつて市川は田をやました。

壁をつたわつて飛行船のエンジンの振動が「ううん、ううん」と響いてくる。なぜ田が覚めたのだろうと天井を見上げていると膀胱が尿意ではりさけそうになつてこた。

トイレにいかなきや……、とベッドからぬをおじすと部屋のすみがあかるい。

なんだとそちらを見るといの部屋に用意されている机に蠅燭がともされ、その前に同部屋の山田が背中をまるめ、なにかを描いている。

まだやつてゐる……、と思いつつ尿意にうながされ市川は部屋を出て廊下をあるこた。すぐさきがトイレになつてこる。トイレの便器は開放式で、底から夜の海面がはるかにのぞける。つまり垂れ流しなのだ。

よつやく膀胱をからこして市川は部屋にもどつた。

あいかわらす山田は机にむかい、せつせと手を動かして用紙にむかついていた。

「まだやつてんですか山田さん」

声をかけると山田はうそ、といなずいたが返事もせず鉛筆を動か

し続けた。市川は好奇心にかられ山田の背中越しに設定書をのぞきこんだ。

そこには険阻な山脈にそびえたつ奇妙なかたちの城があった。用紙の右上に「魔王の城」とタイトルがある。

「魔王の城の設定ですか？」

「ああ、と山田はつぶやいた。

市川は山田の机にほかにも設定書があるのに気づいた。みな魔王の城の設定で、城の詳細な構造や階段、門、廊下などがこまごまとした描写で描かれている。

「これ、魔王の城の内部……」

市川は一枚の設定画を手にとった。そこに描かれているのは城の内部である。石組みであるところは、苦悶の表情をつかべた無数の人体がはめこまれている。

「人間が壁になつてているんだ」

山田はうなずいた。

「うん、木戸さんと魔王の城について打ち合わせしてたからね。なんでものろいをうけた人間が彫刻になつて城をつくっているんだそうだ」

市川は不安になつた。

「あのう……これ、背景でやるんでしょう？」

いやあ、と山田は嘆息した。

「まさか……、これは作画の担当だよ。背景マンが、キャラを描けるわけないじゃないか！」

いやいや……、と市川は手をふつた。

「そんな！ セル描きなんて作画だつてやりませんよ。だつてこれ、どう見ても背景の担当ですよ！」

しばし山田と市川はにらみあつた。ふと手をそらし、山田は肩をすくめた。

くくく……。

山田はしおび笑いをした。市川も苦笑いをうかべ口を開いた。

「すいぶんがんばるなあ。魔王の城にいくのはまださぞだらり……」

市川にそう言われ、山田はつぶやいた。

「なんだかこうして仕事をすませておけば、はやく家に帰れるんじやないかと思つてね」

市川はひそかに恥じ入つた。

そそくさと山田のもとを辞して外へ出る。

目はすっかり覚めてしまつていた。

ちよつと散歩しようかとあるきだす市川は、三村の姿を見た。かれは廊下から、外の景色を窓から眺めていた。あいつが三村か……。

市川は制作進行の変貌振りに驚いていた。

スタジオの中で、所在無げにつらつらしていたあの制作進行マンの姿はいまはない。ひょろりとした瘦身は、いまでは堂々たるマンロップの王子様、といった姿だし、マントを羽織つたその横顔はまるで別人である。

かれは市川に気づき、顔を向けるとかすかに会釈した。思わず膝まづいてしまいそうになる衝動を市川は抑えた。それほどいまの三村は貴族的といつていい容貌を持っている。

「お前さんも眠れねえのかい？」

市川はしげてざつかけない口調で話しかけること三村の影響を脱しようとしていた。

三村はかすかにうなづいた。

「ねえ市川さん、ここに来る前の生活思い出しますか？」

「当たり前だろーーー夢に見るくらいだ。おれのアパートには限定物のフィギアが並べているんだ。おれが帰るまで、無事でいるかひやひやしてんだ」

「そうですか……。だけどぼく、なにも思い出せないんです」なにを言い出すのか、と市川は三村の顔を見つめた。三村はなにか思い悩んでいるようだった。

「「」へ来る前、ぼくアパートで暮らしていたはずなんですが、そのアパートの名前が思い出せないでいるんです。それに……」

「それに？」

三村は眉を寄せた。

「じつは両親の顔も思い浮かべる」とできないんです……！　思い浮かべることの出来るのは、「」たちに来てからのことばかりで……ねえ、市川さん。ほく、三村ですよね。制作進行の」

市川はうなずいた。

「当たり前だらう！　なんでそんなこと思つんだ？」

三村はふたたび窓の外に視線をもどした。

「その、たびたびじぶんの名前が三村なのかパックなのかわからなくなつてくるんです。急速にじぶんが変わつていくようで……。なんだか「」たちのじぶんが本当の「」とみたいで……」

市川は首をふった。

「そりやお前さん、思い過」しだよ。考えてみるよ。この世界は、木戸監督の頭のなかで出来上がった世界だぜ。少々、ファンタジーとしては円並みな道具立てだけだな」

市川の軽口に、三村はうつすらと笑顔をつかべた。

「そうですね……」

「寝るよ。あすは早」つてござ」

おやすみなさい、と三村は返事をしてじぶんの部屋へもどつていった。

その後ろ姿をながめ、市川はこれからあいつどうなつちまうんだわうと心配だつた。

三村が一番、この世界に来て影響をつけてくるよひだつた。

魔王（前書き）

いよいよ魔王がその姿を現す！

「まだ三村さまはこないの！ あたし、こつまで待てばいいのよつ！」

いらっしゃった女の声があたりに響いた。

豪華な装飾にかぎられた大広間である。壁にはすきまなく名画がかけられ、床には足首までうまりそうな絨毯がしきつめられている。まるで家ほどもありそうな巨大な暖炉にはあたたかなオレンジ色のほのおがゆらめき、そのまえには重厚な長いす、テーブルがおかれ、いすにはコーラ姫がだらりと横になっていた。彼女のまわりには数人のメイドがはべり、あるものは姫の髪をとかし、あるものは姫の爪の手入れをしていた。ひとりが銀の盆に山盛りのフルーツをもつてきてひざまづいた。コーラ姫はものうげにそのなかのひとつをとりあげ、口にもつていった。

かりり、と前歯でかむと果汁があふれ、唇からたれる。それをメイドのひとりがすばやく綿のハンカチでやわらかい手つきでふきとつた。

「ねえ、なんとか言つてよ。あんた、ずーっと黙つてばかりじゃない……」

コーラ姫は虚空にむかつてさけんだ。まわりのメイドは聞こえないふりをしている。

あの”声”はふつつりと姫に話しかけるのをやめていた。姫のさまざまな要求をかなえてから、もう彼女のことは関心がなくなつたかのようだつた。

豪華な家具、そして贅沢な料理、忠実な召し使いにかこまれ姫は孤独だつた。彼女の要求したこれらはつきつきとかなえられたが、姫の世話をしてくれる召し使いは彼女がなにを話しかけてもあいまいな返事しかせず、まるで生きている人形のようだつた。

コーラ姫は立ち上がるとのろのろと歩き出した。彼女のすまいは

故郷のドラン公国の城にへりべはるかに豪華だつた。おそらく高い天井にはいくつものシャンデリアがさがり、あたりをまばゆく照らしている。

ここに数ヶ月ぐらしているがいまだに彼女はこのすまいまの全体像をとらえきれていなかつた。ちょっとあるいただけで彼女はすぐ迷子になつた。しかし姫がひと声命令すればすぐにどこともなく召し使いの一団があらわれて帰り道を教えてくれるから心配はしていかつた。

また迷つた。

あたりは暗い。

手をのばしてみるとざわざわした石の面にふれる。彼女のいつも暮らしているエリアはつるつるした大理石ばかりなので、このような感触ははじめてだつた。

どこかしら……。

姫はいつものように躊躇して使いをよびつと思つたが気をかえてそのまま歩き出した。

いいではないか。迷子の気分もわるくはない。

ほの暗い廊下を姫は後ろ手にくみながうぶらぶらと歩き出していた。暗いとはいってもほのかなあかりが満ちていて。

天井近くの壁面にはなにやら見慣れぬ彫刻がきざまれていて。

人間の彫刻と思ったがよく見ると頭には角がはえ、背中からは蝙蝠のよみうな翼がはえた魔物の彫刻である。反対側には龍の浮き彫りがある。

気がつくと空気がひやりとしたものに変わつていて。壁面もまたじつとりとした空氣のせいわずかに濡れていたようだ。

あたりの彫刻もまた氣味の悪いものに変わつてきていた。

ぞわぞわと姫の背中にさむけが這いのぼりはじめた。

くるりときびすをかえすと、いま来た道を引き返そうと歩き出す。が、姫の歩みはとまつた。

真つ暗な闇があたりをつづんでいる。こつまにか、じぶんの指

先も見えないほどの暗闇に姫は立っていた。

「だれか……」

姫の声は真っ暗な闇にすこし現れた。反響もなく、いまじぶんがどんな空間にいるかもわからない。

!

なにかの気配に姫はぞつとなつた。

なにかいる！

圧倒的な存在感が闇のむこうから漂つてくる。それはなんと形容していいのかわからないが、たしかな感覚がつたわつてくる。

……

……

なにものかがうごめく気配。

かちかちという音に姫はぎくつとなつた。それはじぶんの歯が細かくふるえてかち合つている音だつた。

「だ、だれ……だれかいるの」

やつとの思いで姫は声をふりしぼつた。

くくく……。

闇の向こうにしおび笑いがもれた。

「ドラン公国のローラ姫よ……」

その声は闇の中からひくく響いてきた。その声がまるでじぶんの耳のすぐそばで聞こえてくるような気がして彼女は飛び上がつた。だしぬけにあたりに光がみちた。

それは蠟燭のわずかなあかりであつたが、闇にしづんでいた姫にとつては真昼のひかりのようで痛みにさえいた明るさに彼女は目をしばたかせた。

姫は総毛だつた。

そこにそれはいた！

「魔王……」

姫はつぶやいた。

たしかにそれは魔王だつた。それいがい、言にようはない。

巨大な、それじたい家ほどもありそうな石造りの椅子に魔王は腰をおろしていた。魔王の体もまたとほつもなく巨大だつた。

皮膚は甲虫の甲羅をおもわせる光沢のある緑色で、蠟燭のゆらめきにつれさまざまな色に反射する。

顔はひきのばされた骸骨のようで、くちもとには姫の腕のふとさほどもありそうな牙が上下にむきだしている。

魔王の瞳に射すくめられ姫は凍りついた。
まるで瞳そのものの内側にほのおが燃えているかのようルビー色に輝いている。魔王は目の前の姫をじつと見つめていた。姫はその視線をはずそうとしたが、まるで命令されているかのようにそらすことすらできないでいる。

魔王はにたりと笑みをうかべた。

その顔のつくりから笑いをうかべることなどできないと思われたが、まるで部品を組み合わせるかのように関節が変形して笑いの表情をつくつたのだ。

「なるほど……たしかに美しい……。わが魔王の花嫁としてもうしぶんない……」

「花嫁……？ わたしが？」

魔王のことばに姫はぽかんと口を開けた。あまりに意外なことだつたからだ。

「そうだ。わしはず一つと考えていた。わが子孫をつくることを……。わざわざ手段をつくつてさがしてきたが、わが花嫁にふさわしいのはおまえしかおらんとわかつた」

魔王は石造りの椅子から立ち上がりつた。ずしり、と片足をふみだす。そしてもう一つぽうの足もまた前へつきだされた。
ずしり、ずしり、と重々しい足音をたて、魔王はゆつたりと姫にむかつてきた。姫は凍りついたように動けなかつた。

無造作に魔王は腕をのばし、姫を手のひらにつつみこんだ。ふわり、と姫の体がうきあがる。姫の体は魔王の手のひらにすっぽりと

おそれまゐせびだつた。魔王は姫を自分の顔にちかづけぬとしげしげとのぞむことだ。

「わが花嫁になるのだ……コーラ姫！」

姫は氣をうしなつた。

聖都（前書き）

一行は聖都ゲゼンに到着する。そこでかれらは魔王を倒すための聖なる装備の情報をえる。その装備を手に入れるにはある试练をうけなければならないが……。

「これでキャラ設定ぜんぶおわりだな」
市川はつぶやくと鉛筆をおいた。田の前には恐ろしげな魔王のキャラ設定書がある。

「こ」は聖都ゲゼンの城のなかに用意された四人の部屋のひとつである。ヨーリ船長に飛行船ではこぼれた四人は、ゲゼン側の歓迎をうけ宿泊施設をあたえられたのだ。落ち着いたかれらはいまのうちに残った設定をおわらせてしまふことになり、仕事をすませたというわけだ。

三村にできあがったキャラ設定をわたすと、いつものよひに空中にまいあがり消えてしまふ。

「設定がおわった、といつことせ、この世界に魔王が実在する」とになつたといふことですね」

三村の「とばに山田さつなずいた。

「やつこつことじだ。つまりおれたちがいつか市川くんが描いた魔王と戦わなくてはならないってことだ……。なあ、このストーリー本当にハッピー・ハンドになるんだろうなあ？」

魔王との対決がまじかに迫つたのを感じ、山田は不安そうだった。山田はふと窓の外を見やつた。からりと晴れ上がり空に、遠くかすむように山脈がそびえている。山脈にはどすぐろい雲がかかり、陰鬱な雰囲気をはつしていた。

あれが魔王のすむ岩山か……。

山田はようやく魔王の住処を間近に見るところまでやつてきて、つめたい恐怖がこみあげてくるのを感じていた。あの岩山のどこかに、魔王の城があるのだ。

「やつ思つようにしよつぜ。とにかく、おれたちがもとの世界に帰るには、こ」のお話をおわらせなきやならない……お、もともとこれは山田さんの言に出したことじやないか。こまさらあんたがそ

んなこと言こ出すなんてどうことだい？」

市川に言われ、山田は首を振った。

「そりや そつだが……なにしろすべておれの推測だからなあ

洋子は肩をすくめた。

「まつたくあんたらいつまでくよくよ考えてこるのよ。とにかくこ
うなつたら、やるしかないのよー」

と、部屋の外、廊下から複数の足音が近づいてくると、ドアをノ
ックする音が響く。三村は答えた。

「どうだ

ドアを開けたのはヨーロ船長だった。背後に兵士をしたがえてい
る。

「みなさん、法皇さまが面会なさります。謁見室へおいでねがいま
すか？」

彼女のことばに四人は立ち上がった。聖都ゲゼンに到着していよ
いよこの国の支配者との面会なのだ。

船長は全員が立ち上がったのを確認すると廊下を歩き出した。ぞ
ろぞろと彼女のあとをついていく一行のうしろから兵士がついてい
く。

聖都ゲゼンは壮麗な城壁をもつ城砦都市である。幾重にもとりま
く城壁のなかには市街があり、市民の食料を確保するための農地や
牛や馬を飼うための家畜小屋がたちならんでいる。城砦の中心には
岩山がそびえ、その岩山をかかえるように富殿が建てられていた。
富殿の裏手からはもうもうと蒸氣がたちのぼっていた。
そこは工場地帯である。

ゲゼンはもともと炭鉱であった。その炭鉱から石炭をほりだし、
燃料として製鉄所を運営し、さまざまな工業製品をつくりだしてい
た。この都市ではあらゆるもののが自給自足されていた。食料から武
器まで、さまざまなものが生産されている。

廊下をゆく一行の前にエレンがあらわれた。彼女のそばにも数名
の兵士が従つていて、彼女は四人を目にするとやりと笑いかけた。

「あんたらも法皇さまに会いに行くの？」

「きみもか」

三村がこたえるとエレンはうなずいた。

「まあね、あたしは法皇さまなんかには用はないんだけど、どうしてもって言うからしかたないじゃない？」

エレンのことばにヨーリはむつとしたようだった。

「お姉ちゃん、法皇をまと面会するときは礼儀をわきまえていてね！」

わかつた、わかつた、とうとうエレンは肩をすくめた。

ヨーリはことさら肩をそびやかすように歩をすすめた。

市川はふと窓の外に目をやった。

ぬけるような青空にときおりぱりぱりと閃光がはしり、網田のような模様がうかびあがる。

「雷にしちゃ、妙だな」

そのつぶやきに、ヨーリは市川をふりかえった。

「魔王の攻撃です。魔力でこのゲゼンを攻撃しているのです。法皇さまの法力によって結界がはられないので、あのように見えてい るのです」

「へえ……」

市川は肩をすくめた。ヨーリのくちぶりから、こういったことは田常茶飯事らしい。常時、魔王の攻撃をうけているということは想像もつかないことだった。四人の目には、聖都ゲゼンは平和で、みちたりたように見えていたからである。

「こちらです……謁見の間です」

ようやくかれらは謁見の間にたどりついた。

そこには今まで見た中でもっともひろびろとした場所だった。

天井は丸屋根で見上げると首がいたくなるほど高く、巨大なシャンデリアが垂れ下がっている。壁も床も、すべて大理石でできてい てこまかに彫刻がほどこされていた。どことなくローマ帝国の議事 堂という雰囲気である。

床には青色の絨毯がしきつめられ、一段高くなっている場所に玉座があつた。一同が揃つてゐる場所から玉座まではおよそ百メートルはあつた。

山田は壁にほびこされた彫刻を見回し思つた。おれの描いた設定画がこんなふうに現実のものになるとはなあ……「アフで描いた設定画がきちんと形になつてゐるのを確認するとちよつとうれしくなつてくる。

床の絨毯の毛足はながく、四人の足音をすっかり吸いとつてしまふ。

謁見の間には静寂が支配してゐた。

玉座に近づいてようやくこの部屋のあるじのすがたがはつきりとしてきた。

法皇である。

それは十才足らずの少女であつた。

巨大な大理石でできてゐる玉座にくらべ、彼女のすがたはあまりに幼かつた。ちょこんとすわつた両足は床につかなくてぶらぶらとたれている。まっかな法衣をまとい、あたまにはおなじまっかな帽子をかぶつてゐる。法衣にも、帽子にも金の縫いとりで複雑な紋章が描かれていた。彼女の髪の毛はながく、腰のあたりまで伸びた金髪で、まるで本物の金の細糸をたばねたようだつた。肌はぬけるようにならぐ、瞳はうすいブルーである。彼女は四人がちかづくのをみとめ、かすかにうなずいたようだつた。

まわりには彼女をまもるかのように幾人もの衛兵が武器をかまえ立ち並んでいた。全員豪華な紋章を浮き彫りにした鎧兜を身にまとい、身長の倍ほどもありそうな長い槍を手にしている。

ヨーリは法皇のまえにすすみでると、せつとばかりに膝まづいた。あわてて四人とエレンもそれにならつ。ここにくるまでヨーリは口うるさく謁見の儀式を教えていた。

「法皇さま。ここに魔王と戦おうという勇者たちをお連れしました。ねがわくば、お言葉をたまわりたくぞんじます」

少女はかるくうなづく。とん、とかるく足を踏みだし、椅子からおりると歩き出した。

「みんなのもの、IJの世界を滅びにみちびくとする魔王と戦おうといつ決意、まことに大儀である。わらわはIJの聖都ゲゼンで魔王の魔力をくじとめているが、いつまで続けることができるかIJのものない。おぬしらが魔王を倒すことをねがつてやみませぬ」

彼女の声は年相応にほそく、おさなかつたが、凜としたひびきがあつた。口調ははつきりとしていて、まるでおとなそのものだつた。少女のくちもどがにつくりと笑みのかたちになり、あどけないといつていい表情になつた。

「しかしそなたたちがいくら勇者とはいえ、いまから魔王の城へのりこむのは無謀といつもの。わらわがそなたたちにちからをかすことにします。この聖都にはふるくから勇者があらわれたとき、その手にわたるようにないくつかの聖なる武器、防具が所蔵されています。まことの勇者なら手にすることができるでしょ？」

三村は顔をあげた。

「それはどういう意味なのでしょ？」

少女はこたえた。

「宝物を手にするには試練をくぐりぬけなければなりません。今まで何人もの勇者が試練にたちむかいましたが、残念なことにだれも成功したものはおりませぬ。あなたがたがまことに魔王と戦うだけの資格があるかはその試練にたえなければなりませぬ」

そんなこつたろうと思つた……。山田は胸のうつむでつぶやいていた。そういう簡単に魔王と戦えるわけないよ……。

が、三村はまっすぐ法皇の目を見つめ口を開いた。

「その試練とはどのようなものでしょ？」

「城の地下深く、かつて魔王が生を受けた魔窟が存在します。この聖都はその魔窟のちからを封するため建てられたもの。ゲゼンがここにあるつちは魔王の魔力は完全なものとはならず、魔王が世界を征服することを阻止しております。しかし邪悪なちからはいまだ

に魔窟にみちております。かつて魔窟の力を封ずるために幾人かの聖者がなかに踏み込み、魔窟にすくう魔物と壮絶なたかいを繰り広げました。しかし魔窟にはふたたび魔物が巣食い、危険な場所になつております。それらの魔物を倒し、まことの勇者であることをしめせば、聖なる宝をさしあげます」

三村は決然と宣言した。

「それならわれわれがその宝物を手に入れましょう。」

少女はうなずいた。

「よくおっしゃいました！ わらわはあなたがたが首尾よく魔窟より生還し、まことの勇者であることをしめすことを祈つておつます」

「まつたく信じられないよ、三村くんがあんないと言つとはなあ」

一同が部屋にもどると市川が感心したように口を開いた。三村は市川の言葉に恥じ入つたように首をすくめた。

「すいません、どういうわけかじぶんでも意識しないうちにあんなこと言つてしまつて……」

エレンもまた四人にくつついておなじ部屋にきていた。彼女は首を振つた。

四人が注目すると彼女は口を開いた。

「あんたら、ほんとうにわけがわからなによ。いつたい法皇さまの前でそこの三村とかいうひとが誓つたときと、いまのあんたはまるで別人だ。それなのに、あんたらはまるで気にしていないみたいだ。いつたいあんたらは何者なんだい？」

くすり、と洋子がわらつた。エレンはきつとなつて洋子をにらんだ。

「なんだい、なにがおかしいんだい！」

「『めんなさい……、あたしたちと会う人みんなあんたとおなじこと言つからおかしくなつてね。この三村くん、どう見てもどこかの王子様つて格好だけど、とんでもない。あたしたちだつて戦士なんてがらじやないし、そもそもこんな冒険にまきこまれたのもあたし

たちの本意じゃないのよ。まあ、あたしたちと一緒にくるなら氣にしないことね」

Hレンはわけがわからない、といった表情になった。彼女の理解のそとなのだらう。

「聖なる武器、防具かあ……」

山田がつぶやいた。

「どうしてもそいつを取りにいかなきやならないらしこな」

市川がこたえた。山田はうなずいた。

「うん、それがあれば魔王と戦えるらしいからな。まあ、なんとかなるだろ」

Hレンは立ち上がり、ドアに近寄ると、四人にむけて口をひらいた。

「あんたら、そんな軽い気持ちで魔窟にはいろいろなんて信じられないわ！ 言ひとくけど、あたしを頼らないでね。危なくなつたらあたしはわざと逃げることにするから覚えておいて！」

市川は顔をあげた。

「おこおこ……、あんたも魔窟へもぐらうつひののか？」

Hレンはふつと笑つた。

「あたりまえじゃない！ 宝物と聞いて黙つていられるわけないわよ

さつと身を翻し、彼女は部屋を出て行つた。

四人は顔を見合させた。

「どうすんだ？ あの女盗賊、ついてくる氣だぜ」

市川の言葉に洋子は肩をすくめた。

「いいじゃない、ついて来たいというなら勝手にさせましょつよ。それよりあんたら、やつとくことがあるんじゃない？」

「え？」 と山田がぽかんと口を開けた。

洋子は言葉をつづけた。

「魔窟の設定よ！ それに宝物の設定に、魔物のキャラクター設定！ わすれたの？」

「ちえ、と市川は舌打ちをした。

「そりかあ、それがあつたかあ！　あーあ、面倒くさいなあ。まつたく自分で設定した魔物と戦うんだから世話ないよなあ」

山田はにやにやと笑いながら答えた。

「しょうがないよ。まあ今夜中に仕上げておこうぜ」

ふたりは机に紙をひろげ、筆記具を手に取った。

試練（前書き）

聖なる装備を手に入れるため、かれらは試練に挑戦する。

魔窟の入り口はゲゼンの鉱山の坑道の奥深くにあった。

坑道は地上から数百メートル下がったところにあり、口のまでもくると空氣はじつとりと湿り、ごつごつとしたむきだしの石盤からはぼたぼたとしづくがたれていた。

坑道を照らすのは蠟燭の明かりで、ほのおがゆれると影もまた不気味に蠢くのだった。

入り口にはじつしりとした青銅製の扉が立ちふさがり、扉には見るからに身の毛もよだつような怪異な装飾がほどこされている。浮き彫りにされているのは蜥蜴や蛇をモチーフにした怪物であり、よほど古い時代のものなのか、表面にはびつしりと苔が生えてくる。

「これがそうなのか……」

山田はつぶやいた。かれの声はせまい坑道の壁に反響してはねかえり、かれは思わずぎょつとなつてあたりを見回した。扉からはひどく邪悪な気配がただよつて、それはまるで目に見えるようだつた。洋子はぶるつとかるく震え、両腕で胸をかかえるようなしげさをした。

「寒いわ……」

たしかに寒かつた。坑道の奥深く、地下のこの部分の気温は地上より数度気温がひくいよつだつた。だが洋子のとなりに立つエレンはまるで平氣な様子だつた。洋子よりさらに露出のおおきなコスチュームにかかわらず、彼女はまるで寒さを感じていなにようだつた。

エレンは洋子に話しかけてきた。

「寒いってじうじうこと?」

「え?」

洋子はエレンの顔をまじまじと見つめた。そして呟いた。そつか、彼女の語彙のなかに寒さに相当するものはないのだ。だからこんな肌をおもいきり露出した衣装にかかわらず寒そうな顔ひとつし

ないでいられるということである。つまりファンタジーの登場人物に寒さの感覚はあたえられていないというわけである。そうではなくては、こんな衣装を身にまとつていられないではないか。

「それでは封印をときます」

それまで一番うしろにいたヨーリが全員の前に進み出た。ポケットからちいさな鍵をとりだす。鍵は黄金色にかがやいて、表面にはこまかに装飾が浮き彫りになつていて、彼女はその鍵の先端を扉の中心のあたりに近づけた。

鍵穴に鍵がすいこまれる。

と、扉の浮き彫りがいつせいにぞわぞわと蠢きだした。

ぎいぎいぎい……。

ぎいぎいぎい……。

それまで彫刻とおもわれた扉の装飾はまるで生きているかのよくな動きで這い回つた。そして彫刻たちはいつせいに地面に落ちた。あとにはぼつかりと洞窟の入り口が残つていて、だけだつた。蜥蜴や蛇のかたちの彫刻たちがからみあい、扉のかたちをつくつていたのだった。

ヨーリは地面に残つた鍵を拾い、四人に振り返つた。

「これで魔窟への入り口がひらきました。どうぞ」武運を

四人とエレンはヨーリに見送られ、魔窟の入り口へ進んでいった。かれらが全員はいるとヨーリは口を開いた。

「それではこれをつかつて扉を封印してください。ここから魔物が出てきてはかないませんから」

そういうと三村に鍵をわたす。

三村は鍵を手にヨーリにもの聞いたげな表情になつた。

「鍵をかけるだけでいいのです」

言われた三村は鍵を宙にかざした。

するとそれまで地面で這い回つていたトカゲや蛇の彫刻がざわざわと集まりだし、鍵を中心にして扉のかたちになつていった。エレンの姿は扉のむこうに見えなくなつた。

「ど、いうわけか」

「ほつと山田はため息をついた。あたりは真つ暗である。このときのためにポケットから火打石をとりだした。マッチがあればいいのに……、と思った。どうやらこの世界にはマッチは発明されていないようだ。」

かちかちと火打石をつかって火花をとばし、たつぷりと油をすつた松明に火をうつす。ほつ、と明かりがともりあかるくなつた。そして全員の手に持つた松明にほのおを移していくつた。

「行こうか」

市川がつぶやき、全員その言葉にうなずいた。歩き出す。みな、

神経をぴりぴりとはりつめさせていた。

松明のあかりにうかびあがる洞窟は、鉱山とはちがつて自然にできあがつたもののようだつた。鉱山には強度をたかめるための木材の梁やつつかえ棒があつたのに、ここではむきだしの岩が「じつじつ」としているだけだつた。どこかで水滴がぴちゃぴちゃと音をたてている。地下水がしみだしているのか。

「おれ、よくダンジョンタイプのRPGをやつてたんだが、実際にぶんでダンジョンにもぐるとはおもつていなかつたな」

市川はしいて陽気な声をあげた。

それをうけて三村が問いかけた。

「ダンジョンRPG？ ウィザードライかい？」

「ああ、これでもシリーズ全部やつてるんだ」

「なるほどね」

「もう……！ これはゲームじゃないのよ、ふたりともまじめになりなさいよ！」

洋子がいらいらしながらつぶやいた。

エレンは三村に聞いた。

「ゲームつて、なんなの？」

三村は肩をすくめた。

「コンピューター・ゲームのことや」

コレンは首をふった。まったく二村の言葉が理解できないといつ表情である。

一行はどんどん魔窟を進んでいった。みんなの口は重くなり、黙りこくれていた。

ふいに道はひろびるとした場所にでた。

「すげえ……」

市川は声をあげ、松明をかざした。

ほう……、と全員がため息をついた。

「きれいねえ」

洋子が思わず感想をもらす。

鍾乳洞だった。

巨大な空洞の壁面にさまざまなおおきさの鍾乳石がたれさがり、それらは松明のあかりをつけぬれぬれとした光沢をはなっていた。なによりその鍾乳洞はしぜんのドームをかたちづくつ、ビック聖堂のようなかたちになつていてる。

「お密さまかね……」

「つづりな声が洞窟に反響し、全員驚きにとびあがつた。

「だれだ！」

市川がするどくさけぶ。

ひつひつひつひつ……、と笑い声が暗闇のむこうから聞こえてくる。

ずるり、べたつ、といつよくななにかをひきするよつな足音が近づいてくる。へっぴり腰で山田は松明をかざした。

「！」

松明のあかりにうかびあがつたのは、ぼろぼろのマントを身にまつた老人だった。片手にはつえをついていた。

「五人か……。また宝をさがしに馬鹿ものどもがやってきおつたな

「あ、あんた、だれだ！」

市川は声をふりしほって質問した。老人はかすかに頭をふると、顔をおおっているフードをはねあげた。

したからあらわれたのはまつしろな髪の毛をせなかまで伸ばし、胸元までたれさがつた鬚をはやした老人だった。肌のいろは黒人のよつにまつくるで、ふさふさとした眉のしたからざりざりとした両目があたりをねめまわしてくる。

「わしは案内人じやよ。ここに冒険者がやつてくると、魔窟のおへにひそむ怪物のもとへ案内する役目をおつておる……。あんたら、宝をさがしておるのじやろ?」

そういうと老人はにつゝと笑つた。口のなかに残つてゐる数本の歯が黄色くひかつた。

五人はうなずいた。

老人は片手をあげ、洞窟の奥を指差した。

「それならあつちじや！ ああ、わしについてくるんじや。わしの案内がなければ、あんたら迷うてしまつからな……。ああああ、急いだ、急いだ！ はやくせぬと口が暮れてしまうからな！」

五人はしかたなく老人のあとについて歩き出した。老人はつえをついているのに、ひどく足がはやかつた。見かけは百歳をこしていそうなのだが、急ぎ足に歩く老人の脚力は、五人よりありそうだ。遅れがちな五人を、老人はいまいましげに何度も振り返つた。

「急がんかい！ なにをぼやぼやしておるんじや！ ああ、もう！ そんなんのんべんだらりとしておつては、宝も手に入れることなどできんぞ！」

息をきらしつつ、山田は質問した。

「あ、あのう……なぜ急がなければならぬんです……。ええと、あなたの名前は？」

「わしの名前などくだらん質問じや！ わしもあんたらの名前など聞く気はないからな。そらそら、走らんかい！ 口が暮れてしまつぞ！ なぜ急ぐのかつて？ ひひひひ……、ビツセおつ死ぬんだつたら、はやいほうがええじやろ？」

市川はむつとしてさけんだ。

「なんでおれたちが死ぬことになつてゐるんだ？」

市川の言葉に老人はけけけけと甲高い笑い声をあげた。

「なんど、これまでこの魔窟に挑戦して生きて帰った勇者はひとりもおらんのを知らんのか？ 魔王を倒すための武器、防具をもとめて今まで何人もの冒険者がやつてきては、あわれ魔窟の怪物たちの獲物となつてしまつておつたわい！ みなひとかどの武芸者ばかりじやつたが、見たところあんたらとも怪物とわたりあえるよくな感じではないの？……、どうじやにこで引き返すところのは？ いまなら道はまつちすぐじや。わしの案内がなくとも帰れるよ」

そういうと老人は立ち止まつた。

山田と市川はほつと息をついて、あたりを見回した。

広々とした場所に、無数の穴があいている。老人はにやにやと笑つて、無数にあいている穴をゆびさした。

「さあ、ここからはあんたらひとりひとりあの穴に飛び込むんじや。穴の向こうの試練をくぐりぬければ、あんたらひとりひとりに必要なものが手に入ることになつておる！ さあ、どうするね？ 引き返すか、それともこのまま進むか？」

みな、おし黙つた。

岩壁にうがたれている穴は、どれもおなじく「のねおね」と、どれだけ深いのか黒々とした闇がつづいている。

おたがい目配せをする。

おい、だれが最初にいくんだ？

と、それまでだまつていた三村が一步、足を踏み出した。

「僕が行きます！」

ひやつ、ひやつ、ひやつ、と歯の抜けた口をあけ、老人は陽気な笑い声をあげた。

「よう言つた！ わあ、どれでもよい。好きな穴にはいるんじや！ 試練を乗り越えれば、またこの広間にもどれる。おつと、その松明はおいていくんじやぞ。それがきまりじやからな」

三村はうなずくと松明を地面に残し、大股に歩き出した。

まつすぐ目の前にある穴に進むと、ためらいもなく入つていく。

すぐその全身が暗闇につつまれて見えなくなってしまった。

「あつ！」

残りの四人はちいさく声をあげた。

「消えちまつた」

市川はぼうぜんとつぶやいた。

三村がはいりこんだ穴は、かれが暗闇に姿を消すと消えてしまったのである。あとにはのつぺりとした岩壁が残つてゐるだけだった。市川はするどく老人をふりかえった。

「じいさん！ いつたい、ありやどうじつにうことだ？ 三村はどうなつちまつたんだ？」

老人は首をふった。

「知らんよ。試練の穴は、試練をうけようとする人間を受け入れると消えてしまう。ただ、あのなかの試練を乗り越えたものだけがもとのところへ戻れるんじや」

「失敗すれば？」

「ふたたび穴がひらく。次の犠牲者が穴にはいる……。そのくりかえしさ。さあ、あんたらはどうするんだね？ はいるのが、はいらんのか？」

山田、市川、洋子、エレンの四人はおたがいの顔を見合せた。エレンは肩をくわめた。

「あたしはやめとくよ。お宝はほしいけど、命もおしいからね」

山田はぐつと唇を噛みしめ、ほつと息をはいてつぶやいた。

「しかたない……。これもストーリーの一部なんだろ？……」

斧をにぎりしめると一番ちかくにある穴へはいつていいく。すぐその姿が闇にのみこまれ、穴は消えた。

洋子はたまらなくなつて市川の肘をつかんできけんた。

「ねえ、どうするの。あんたまで入る気なの？」

市川は首をふりながらこたえた。

「そうだな……。木戸監督があれたちを殺す気ないと信じるしかなこよ。とにかくストーリーは進めないと」

そつと洋子の手をふりせびくと市川は剣を片手に進んでいった。そのうしろ姿が闇にのみこまれ、穴は消えた。

残った穴はひとつだけ。

洋子はうなずいた。

「もう！ 馬鹿みたい！」

さけぶと彼女はやけつぱちになつて駆け出した。その姿が消え、穴も消えてしまった。

あとに残されたのはエレンと老人だけだつた。

「なんじや、あやつら。妙なことばつかり話しておつたな」

エレンはうなずいた。

「やうなのよ。あいつら、ときどきわかんない」と言ひのよねえ……

…

ふん、と老人はひとつうなづく。

「まあよい。穴はふさがれた。あんたは入る気はないようじやから、あやつらが戻るまでここで待つんじやな。あるいはあやつらが死ぬまで……」

「こつそれがわかるの？」

「さあ……はやければ一時間もかかる。ながいときは数日、あるいは数ヶ月……。わしの知つてゐる冒険者では、五年間も穴がふさがつたままのがおつたな」

エレンは目を見開いた。

「ちよつ、ちよつと、冗談じやないわ。そんな長い間、こんな暗闇で待つておつていつの？ そのあいだどうやって暮らしていぐのよ！」

「なに、なんとかなるわさ。なにしろわしじやの魔窟の番をはじめて、三十年になるが、いちども外にでたことはないよ。食い物や水は手に入る方法を知つておるから、あんたに教えてやるつ」

「いやよー、あたし帰るー！」

老人はにたりと笑いかけた。

「扉の鍵がなくてもかね？」

あつ、とHレンは思い出した。そういうえば、あの扉を開く鍵は三村が持つたままだつた。

「もつ……、最悪！」

へなへなと彼女は座り込んでしまつた。

13

ひたひたひた……。

暗闇のなか、じぶんの足音だけがひびいている。

三村はまったくの暗闇を大股で歩いていく。

ふつう、じうじう暗闇のなかを人間が進むと、本能的になにかにぶつからないかと疑心暗鬼になってへっぴり腰になり、数歩進むのも時間がかかるものだが、かれはまったく恐れもなく歩いていった。ときおりかれに訪れるあの奇妙な状態におちいっていたのである。じうなるとまったく恐怖など感じなくなり、ただ目の前の試練をやりとげなくては、という義務感がかれの背を押している。

妙だな……。

三村はそんなじぶんのじうじうの状態を客観的に観察する余裕すらもつていた。いつもは仲間に話しかけるのさえおずおずとしかできないのに、じうなるとこつもの怖氣などまったくなくなってしまつ。どうしてそういうんだろう？

ここのじうじうの状態になると、三村はここの世界とじぶんのあいだにしつくりくる感じを覚えていた。

まるでじぶんにとつて本当の世界はこつちで、あの制作会社で制作進行をやつっていたのは夢の世界のよつな気になつてくる。暗闇のなか、三村はコーラ姫の面影を思い浮かべていた。

たつた一日しか顔をあわせていないにかかわらず、彼女の顔の形、おもざしさはつきりと思い浮かべることができる。

彼女の顔を思い浮かべるたび、かれのじうじうに勇気がわいてくるのだった。

これは恋つてやつかな……。

そう思つと三村は苦笑した。

まさか、アニメの登場人物だぜ……。

ふと三村は歩みをとめた。

前方があかるい……。

かれは緊張した。

そつと腰の剣に手をのばす。柄をにぎり、身構えた。
だんだんに目が慣れてきて、前方の景色といつもののがわかつてき
た。

水音が聞こえる。

三村は進んだ。

噴水だ。

石組みの噴水がいきおこよく水流をほとばしらせてくる。
これは……。

三村はここがあのドラン城の内庭であることに気がついた。
コーラ姫を最後に見た場所である。

噴水の石組みの縁にひとりの女性が腰かけている。
女性はこちらをふりかえった。

まさか！

三村はじぶんの目をうつたがつた。

コーラ姫だつた。

「三村さま……！」

彼女はゆっくりと立ち上がり、三村に近づいた。

山田は暗闇のなかつき進んでいた。

歯を食いしばり、背をまるめていた。
くるなら來い！

おれは家に帰らなければならぬんだ。家のローンは残つて
し、ふたりの子供はまだ中学と小学生だ。おれには家族があるんだ
！ こんなアニメの世界で遊んでいるわけにはいかないんだ！

前方があかるい。

山田は斧をにぎりしめた。

敵か？

いや、なんだかあの明かりはずいぶん見覚えがあるような……。見覚えがあるのも道理、それは山田の自宅のあかりだった。

郊外の一軒家。

かれが一大決心をして購入した建売住宅である。木造モルタルの一階建てで、中古住宅ではあるが、かれの持ち家だ。その玄関のあかりが見えているのだ。

山田は仰天した。

帰つてきた！

「おおおい！」

かれは思わず大声をあげ、駆け足になつた。玄関に駆け込むと、ふるえる指先でドアのノブをつかむ。

かちやり……、とかすかな音がしてノックチがはずれドアが開いた。暖かな空気が山田の全身をつつむ。

「パパ！ お帰り！」

ぱたぱたと足音がして小学生の次女が出迎えた。山田に似て、まるまつちい体つきの少女である。

彼女の顔を見て山田の両目に涙があふれてきた。かれは次女に近づくともも言わずに抱きしめた。

「パパ……、どうしたの？」

次女は山田の顔をのぞきこみ、首をかしげた。山田は首をふり口を開いた。

「いや……、なんでもないんだ。パパは帰つてきたんだ……！ おい、ママはどこだい

「台所」

彼女の返事を聞くと山田は家のなかに飛び込みキッチンへ突進した。

「あら？」

そこには妻がいた。食器を洗つてゐる最中だつた。

山田は立ちすくんだ。

「今日ははやいのね」

「う、うん」

胸がいつぱいになり、山田はもじもじしていた。妻はどうしたの？ といつような笑みをうかべる。その顔を見て山田は妻の体をだきしめた。

「ちょ、ちょ、と、やめによ！ 洗い物してゐるよ」

妻は笑いながら山田の体を押しのけた。

山田はうなずいた。

「すまん……」

「変な人ねえ。どうかしたの？」

「いや……」

山田は今までの冒険を説明しようとしたがあきらめた。いつたいあればなんだったのか、かれ自身説明できないからだ。

「お食事は？」

「ううだな……」

そこで山田はじぶんが腹がへつていることに気がついた。

「おビール、おつけします」

「ああ、たのむよ」

山田は食卓についた。妻がかれに食事の用意をする。次女がにこにこしながら、おぼつかない手つきでかれにビールをついでくれた。そこへ中学生の長女がやつてきた。

「パパ、お帰りなさい！ ねえ、ママ、あたしも『飯』！」
はいはいと妻はこたえ、食事の用意をつづけた。
家族団らんがもどつてきた。

「市川くん？」

「洋子さん？」

市川と洋子はおたがいの顔をみとめびくつくして立ち止まつた。

ふたりとも暗闇をめぐらめつめつ歩き続け、前方に足音を聞きつけたのだ。敵があらわれたのかと思つたのだが、目にしたのはおたがいの姿であった。

「どうこうこと？」あなた、あの穴にはこつていつたんですね」「うそ、ずっとまつすぐ歩いていつたと思つたんだけど……。たぶん、どこかでふたつの穴はつながつていたんだろ？」「ふたりはあたりを見回した。あいかわらずあたりは真つ暗である。

洋子はあることに気づいた。

「ねえ、どうしてこんなに真つ暗なのにあたしたちの姿は見えるの？ どうからあかりがきてこるのよー。」「そういや、そうだ」

指摘され、市川はうえをふりあおいだ。うえを見上げてもまつくりな空間がひろがつてているだけでふたりを照らしているあかりは見えない。

「敵はどうしているのよー。」

洋子は唇を噛んだ。

市川もあたりを油断なく見回す。

「ここにはおれたちふたりだけだ……」

そこまでつぶやき市川は目を見開いた。むくむくと黒い疑惑が胸にみちる。ふいに田の前の洋子の姿が彼の目にはよれよそしこものになつた。まるではじめに見るような気分である。

「おれたちふたり……まさか？」

洋子は市川をふりかえった。

「まさか……、つてどうこうこと？」

市川は洋子の全身をじろじろと見つめていた。

「な、なによ」

「あなた、ほんとうに洋子さんなのか」

「どうこうことよ」

「もしかしたら試練とはこうことなのかもしれないな……」

市川はつぶやくと剣をすりつと抜き放つた。

「市川くん！」

洋子はさけんだ。

そこで彼女はさとつた。彼女の口元にも疑惑がわいてきた。敵、とこう言葉が彼女の脳裏にうかぶ。

「そつ…… そつかもしないわね。もしかしたら、あんたほそといつの市川くんじやないのかも……」

洋子もまた剣をぬいた。

ふたりは暗闇のなかにらみあつた。

「きみはほんとうのローラ姫じやない」

三村は姫の体をひきはなした。唇にはまだ彼女の熱烈なキスの感触がのこつている。彼女は三村の姿をみとめると抱きついてキスをもとめてきたのである。三村は無我夢中でそれにこたえたのだが、頭のすみにちりちりとした危険をしらせん予感がして、彼女の体をおしのけたのだ。

「なにをおつしやるのです？ 姫はいつしてあなたさまの」とをずっとお慕いもうしておつました

「よせ！」

三村は彼女から飛びのき剣をかまえた。

「お前はまぼろしだ！ 姫はいきなりぼくにキスをもとめたりしない！」

といつたものだつた。

が、ふいに彼女の唇がにゅっと歪むと、両端がくいり、とつりあがり冷酷な笑みをうかべた。

「くくくく…… おしいねえ……。あのまままだまれていいたら、なにもわからず死ねたのに……」

ぐーつ、と姫の姿がひきのせられ彼女の肌に爬虫類のつるこがあらわれた。びりびりと衣装がやぶけ、そのしたから現れたのは上半身が女で下半身が蛇の怪物だった。

しゃーっ、と女の唇がぱくっと割れ、一股に分かれた舌がへろへろと空中で踊った。

三村は剣をかまえ怪物めがけ突進した。

「お前たち、おれの家族のふりをするのはもつやめろー。」

山田は絶望のなか、家族が見守るなか手にした斧をふりかぶった。

「パパ！」

ふたりの娘が悲鳴をあげた。妻は娘をかばうようにして恐怖の表情をうかべている。

「あなた、どうしたの？」

山田ははあはあと荒い息をつき妻とふたりの娘をにらみつけた。
「なにが家族団らんだ！ こんな家庭はおれにはなかつた。これはおれの夢なんだ！ 娘たちはおれとは家でくちもきかないし、妻とのながはとうに冷え切つている！ おれはずつと暖かい家庭にならないか悩んでいたんだ！ それを……それを、お前らおれの夢をしやあしゃあと演じやがつて……」

山田の両目に涙があふれた。

「くそおつー くそおつー」

わめきつつむちやくちやに斧をふりまわす。斧が家の壁につきさり、ぼろぼろと破片がとんだ。どかどかと山田はじぶんの家を破壊していく。

「やめて……やめて……」

妻はひつしに懇願する。

が、山田が家を破壊つづけるのを見て、その表情が変わった。

「そう、やめないのね……」

彼女のふたつの瞳があやしい光をはなちはじめた。ぎょっとなつて山田は手をとめた。

「お前ら……」

妻とふたりの娘の瞳につかんだ非人間的なひかりに山田の全身に震えがはしつた。

見る見る親子の姿が変化し、それはおぞましい怪物となつた。妻は人間からぬるぬるする粘液のかたまりとなり、ふたりの娘もその粘液のかたまりにのみこまれた。ぬちや、べぢや、と音をたて、粘液のかたまりはざるざると山田へにじりよつた。

「ぐ、くるな！」

悲鳴をあげ、山田はあとじさつた。

どん、と背中がなにか固いものにぶつかり、かれはふりむいた。岩壁がせまつてゐる。

あたりを見回すといつのまにか山田は洞穴のなかにいた。自宅は消えていた。

ぐるぐるぐる……

粘液の怪物は奇妙な叫び声をあげ、山田めがけて襲いかかる。本能的に山田は手をかざしていた。

ぱりぱりぱり……！

山田の手のひらから紫電が放出された。オゾンのきついにおいがあたりにみちる。

きえーっ！

怪物は悲鳴をあげた。

あの海の怪物をおした魔力がふたたび山田の身のうちにもどつてきていた。山田は歯をくいしばると身内にみちた魔力をふたたび怪物めがけてなげつけた。

「死ね！」

怒号とともに山田からはなたれた放電は怪物の全身をつつみこんだ。

怪物は苦痛に身もだえ、ぶるぶると震えている。山田せとうじからを放出した。

おおおーーんんん……

泣き叫ぶような声をあげ、怪物はどさりと身をなげだした。ひくひくと全身が奮え、煙につつまれてゐる。ふつふつと皮膚が焼け、髪の毛を焼いたよつないやなにおいがあたりに充满した。

ふつーつ、と山田はため息をついた。

ぎーーん……！

ちゃりーん！

金属が打ち合つ音とともに、火花が刀身を照らした。

洋子と市川のふたりが暗闇のなか凄絶な切りあいを演じている。必殺の気合があたりにみち、目にもとまらぬすばやい動きでふたりは戦っていた。

ひゅつ、と市川の剣が水平になぎ払われ、その剣を洋子はぎりぎりで避けた。髪の毛がふわつとひろがり、市川の剣が頭髪を数本、空中で切り裂いた。洋子は身をしずめた勢いで飛び上がり、剣を背中にふりかぶると市川めがけて切りかかった。

がつんっ！

洋子の剣先が床にあたり、市川は紙一重でそれをよけた。

市川は洋子の体勢の崩れに乘じて撃ちかかる。えたりや応と洋子は片手で剣をかざし、かれの剣を受け止めた。

ぎやりん！

いやな音をたて剣はふたつに折れた！

洋子の表情に絶望があらわれた。まんなかから一ついに割れた剣のこりを手に、それでも彼女はひつしに応戦する。市川は勝利を確信してさらにせまった。

ぱきーーんっ！

なんと市川の剣もふたつに折れてしまった。信じられない、とう表情がかれの顔にうかぶ。

「くそっ！」

市川は手にした剣を投げ棄て、どっかりとその場で胡坐をかいた。

「ちくしょう、もう、どうにでもしろ……！」

ぼたり、と洋子の手からも剣が落ちた。

「どうにでもしろって、どうすればいいのよ」

市川は顔をあげた。

「なんだ、それ？ お前はおれの命をいつもつだつたんだろ？」「それはあなたのほうじゃない！」

「なんだつて……」

「わけがわからず、市川は立ち上がつた。

「それじゃ、船……本当の洋子さんか？」

「ぽかん、と洋子も口を開けた。

「あなたはやつぱり本当の市川くん？」

「ふたりはまづむかことおたがいの顔を見つめ合つた。

「どうこいつじだよ。おれはてつきり……君が敵の化けたものだと思つて」

「それはあたしもねなじだわ……」

くしゃくしゃと市川は髪の毛をかきむしつた。

「あのとせ、おれは君の姿がなんだか化け物に見えたんだ……。まるでだれかに命令されていたよつたな感じだつたな」

「うん、それはあたしも感じた」

ふたりはまた見詰め合つた。

「ふーっ、と市川はふきだした。

「げらげら……、と笑い出す。くくくく……、と洋子もいじられきれなくなつて笑いにくわわつた。

じばらぐ暗闇のなか、ふたりの笑いが交錯した。

ははははは、と笑いつかれた市川はふと顔をあげ、ぎょっとなつた。

「彼女がいない！」

ふたたび市川は暗闇にひとつまづひきになつていた。

「と、前方が明るい。

市川はその明かりにむけ歩き出した。

「けつじつ食えるじやない、これ」

「やうじやうじ。わしさうううで、れだけを食つて生きとおる。だつ、いつわけか、飽きたとこつうともないな」

岩の広間のなか、Hレンと老人は床にすわつてもくもくと茸を食べていた。茸はさまざまな形、色合いで、どれひとつとっても味や風味がちがっていた。茸は洞窟の岩壁にじりじりでも生えていた。

「Hレンは顔をあげた。

「…」

なんと岩壁にふたたび穴が黒々とした口を開けていた。足音が近づき、そこから人影が見えてきた。

三村だった。

かれは洞窟から出ると、あたりをうかがつた。Hレンと老人のふたりに気づき、ほつとしたような顔になつた。

「やあ……」

Hレンは三村の様子に立ち上がつた。

「あんた、血だらけだよ」

そう言われ、はじめて三村はじぶんの体を見下ろした。Hレンの言つとおり、かれの頭から足元までべつべつと血液が付着していた。血はほとんど固まって、黒く凝結している。

「ああ、怪物を倒したときの返り血だ。ぼくには怪我はないよ」

「で、宝は？」

「宝？」

Hレンの間に三村はきょとんとした表情になつた。

「そんなもの、なかつたよ」

「なんだつて……」

ふたたび足音。

ふりかえると今度は山田が姿をあらわした。かれはやつれきつたような様子だった。ようやくと広間にたどりつくと、力が抜けたようすにすわつこんだ。ふうふうとあらはい息をついている。

「山田さん、無事だったんですね」

三村に話しかけられ、山田は顔をあげた。言葉もなくうん、とうなづく。

つぎに市川と洋子ももどつてきた。ふたりは広間で顔をあわせる
と、なぜかぎよつとしたような顔になつた。どうしたわけか、ふた
りとも剣をなくしている。

「ねえ、どうしたつていうのよ。お宝はびうしたのよつー。」

エレンはいらいらして叫んだ。

全員、そんなものは手にしていない。

老人はそんなエレンをなだめるように手をあげた。

「まあまあ、そんなことよりあんたがたはたしかに勇者の試練をく
ぐりぬけた。それが大事なことじや。さあ、地上にもどる時間じや
ないのか？」

「ああ、そうだな」

山田はぐつたりと腰をおろしていたのをよつこらしょとかけ声を
かけて立ち上がつた。

「さあ、行こうか」

老人の案内で全員洞窟を戻つていぐ。こんどは老人はみんなをせ
きたることなく、普通の歩度で案内した。

帰り道は全員、むつつりと黙り込んでエレンはしきりになにがあ
つたか聞き出そうとしたのだが無駄だった。

やがてあの青銅の扉のあたりまで来ると、老人は立ち止まつた。

「ここからは、あんたらだけで行けるじやろ？ わしはここで戻る
ことにする」

三村は振り返つた。

「どうしてですか？ なんであなたはこんな真つ暗な洞窟で……」

かれは口をつぐんだ。

いつのまにか老人の姿は消えていた。足音もなく、立ち去つてい
たのである。五人は顔を見合せた。

山田は肩をすくめた。

「まあ、あの老人のことはいいだらう。とにかく外へ出よつや」

三村はうなずいてあの鍵をとりだした。扉の鍵穴にさしこむと、
ざわざわと扉の無数の彫刻がうごめき、外の世界への扉が開く。

全員が鉱山へ出ると、がちやがちやと金属が触れ合つ音がして、
ゲゼンの衛兵が数人小走りに駆け寄つてきた。

「戻つてきたのですね！」

隊長が声をかけて敬礼をした。

三村はうなずく。

「ではこひらへ。法皇さまがお待ちかねでござります」

五人は顔を見合せた。

市川が口を開く。

「どういふことだい？」

隊長の顔がほこりんだ。

「さきほど法皇さまよりお告げがありました。あなたがたがみ」と
試練をぐぐりぬけ、まじとの勇者であることを証明なさつたといつ
ものでした」

山田はにやりと笑い、市川の背中をじしんとたたいた。

「じつやうお見通しのよつだな。おーー とつとうお宝をもひえる
んじやないのか？」

あつ、と市川は口を開いた。

「そうだよ！ あんなあぶない日にあつたんだからただじや帰れね
えな！」

謁見の間に案内された五人は、ふたたび法皇と面会した。
法皇はこんどは白い衣装でかれらを出迎えた。長い髪の毛は三つ
編みにして頭のまわりに結い上げている。

少女はこつこつと晴れやかな笑みをうかべ、かすかに頭をさげた。
「ようこそお戻りになりました。やはりあなたがたはまじとの勇者
であります！ わあ、聖者の宝をさしあげましょ！」

彼女が手をあげ合図すると扉が開き、数人の男女があらわれた。
剣と盾、兜などをさげもつてゐる。男女は五人の前に進み出ると、
おのおのに宝物を手渡す。

三村には白銀色にかがやく盾とおなじく剣が。

山田には宝石がかざられた杖が。

市川と洋子には鋭い剣とマントだった。

エレンは鼻をならした。

「あたしにはないの？」

「法皇はちょっとエレンを見つめた。エレンは顔をあかくすると皿をそらした。

「わかつてゐよ!……あたしは試練の穴にはいらなかつたよー。ちえつ！」

法皇はふたたび柔和な笑みをつかべた。

「それらの武器、防具はたしかに城の宝物でござりますが、それは真の宝とはいえません。あなたがたは試練をくぐりぬけたとき、真の宝を手に入れました」

三村は顔をあげた。

「どういふことでしょう？」

法皇は三村の顔を見つめこたえる。

「あなたはいとしいひとに化けた敵を見破りましたね。その体験があれば、敵のさまざまな策略を見破ることができるでしょう。魔王は必ずしも強い敵です。心眼をもつてすれば、策略を見破ることができます。それがあなたの宝です」

そして山田を見つめた。

「あなたもまたおなじように敵の策略をみやぶりました。そして魔力をもつて倒しました。あなたには強力な魔力があるのですが、いまままでそのどちらを使いこなせなかつたのでしょうか？ しかしいまはあなたは強力な魔法使いとしてここにいます。魔王との戦いにおいて、そのちからは必要です」

さいごに市川と洋子を見る。

「あなたがたも魔王との戦いに必要な経験がえられましたね。どんな名刀を手にしたとしても、それをふるう腕が凡手なら棒切れも当然です。あなたがたはその腕を戦いによつてまなびとつたのです」

「それが宝……」

三村がつぶやいた。

法皇はまたエレンを見た。

「あなたはやはり魔王の城へむかつつもりなのですか？」

エレンはうつとつまつた。

「あなたの宝は魔王の城で見出せるでしょうね？」

エレンの顔がぱつとかがやいた。

「本当？」

法皇はうなずく。

「ええ、あなたの旅に幸あらんことを祈つております」

三村は問いかけた。

「それで……あの魔窟で出会つた老人はいつたいなぜあんなどいろで生活しているんですか？」

「老人？」

少女はかすかに眉をよせた。三村は魔窟で出会つた老人の風体を説明した。少女の顔に笑みがうかんだ。

「それは伝説の聖者でます。きっとあなたがたを案内するため、現れたのでしよう。聖者はあの魔窟で怪物を倒しましたが、命をおとされたと伝承されています。しかしその魂はあそこじどじまつているのかもしだせません」

彼女は椅子から立ち上がつた。

「さあ、準備は整いました。魔王を倒し、この世界に平和と希望をとりもどしてくださるよう、お願ひいたします」

魔城（前書き）

ついに魔王の城へ到達した四人。ここでの戦いはさらに激しく……。

飛行船はゲゼンの都をとびたち、魔王の居城のある山脈をめざしている。船長のヨーリは操舵室するどい目で前方の雲をにらんでいた。そのうしろには三村、山田、市川、洋子、そしてエレンの五人が神妙にひかえていた。

飛行船の進路前方には、雲というにはあまりに異様な霧のようなものが漂っていた。どういう光の加減なのか、その霧は全体にオレンジ色に染まっている。もくもくとわいている積乱雲にもその色がそまり、雲というよりは空中にうかんだ岩山のように見える。

「これからは魔王の支配下にある領域です。あの山脈が見えますか？」

ヨーリは一同に窓の外を指差した。そこにはねつとりとねばりつくような雲につきだした山脈が見えていた。

「Uの飛行船がいけるのは、あの山頂までです。これ以上進むことはできません。なにしろ船の浮力そのものがきがなくなるのですから。理由はわかりませんが、とにかくあの山脈をこえると、飛行船の飛行能力がいちじるしく落ちるのです」

市川は窓ガラスに鼻をおしつけるようにして下界をのぞきこんだ。「なんだろう……、小屋のようなものが見えるけど……」

「魔王の軍勢を見張っている、見張り小屋です。あそこには常時、何人かの兵士が常駐してなにかあつた場合、烽火でゲゼンにしらせるようになります」

飛行船は鼻面をさげ、降下し始めた。山脈の山頂の地面に飛行船の影がくつきりと落ちている。見張り小屋から数人の兵士がわらわらと飛び出し、口々に叫び交わして飛行船を見上げ、指さしている。飛行船の先端からロープがなげられ、地上の兵士たちはそのロープに飛びついた。ロープのさきが繫留塔に結び付けられ、飛行船はゆつたりと地面に着陸した。

飛行船からヨーリ船長が降り立つと、兵士たちはたちまちその前に整列し、さつと敬礼をした。ヨーリは答礼して五人を手招きした。

「ヨリからは地上車でヨリの兵士たちがヨリ案内します」

見張り小屋の兵士のうち、隊長とおぼしき男が進み出てにやりと笑いかけた。日焼けした顔に、髭が一面に密生している。

「ようこそ見張り小屋へ！ 聞いてありますぞ。あなたがたが魔王と戦う勇者とのありますな！」

隊長はひゅつ、と口笛をふいた。すると部下たちは見張り小屋に隣接している倉庫のような建物の扉を押し開いた。なかからあらわされたものを見て市川は驚きの声をあげた。

「あれは……戦車じやないか！」

その通りだった。

がらがらと騒々しい音をたて、キャタピラが地面を噛み轍のあとを残して現れたのは鋼鉄の外板をもつ戦車であった。

「わがゲゼン軍のほこる地上車です」

ヨーリは誇らしげに宣言した。

市川は肩をすくめた。

「やれやれ、思いつきで描いた設定なんだけど、木戸さんは使い切るつもりなんだ」

ヨーリが不審な表情になつたのを見て、市川はあわてて手を振つた。

「いや、なんでもない！ 忘れてくれ」

ヨーリはなんとか立ち直つたようだった。

「はあ……、とにかくヨリからの道筋はヨリの『デイン隊長』がヨリ案内します」

名前が出て『デイン隊長は髭面をほこらばせた。

「よろこんで！ さあ、みなさん。乗つてください」

戦車のうしろがわのおおきなハッチが開き、なかは数人がかけられる座席になつていて、全員が乗り込むと、『デイン』は部下とともに操縦席に乗り込んだ。

ミーリはレンを見つめ声をかけた。

「お姉ちゃん、やつぱり行くのね」

レンはうなずいた。

「うん。 どうしても見つけたいものがあるからね」

「気をつけてね」

レンはふと目をそらした。ハッチが閉じ、ミーリの姿が見えなくなつた。

ぐおおおん……。

戦車のエンジンが咆哮し、がくんと蹴飛ばされるようなショックがあつて走り出す。

乗り心地は最低だつた。がくがくと車内はゆれるし、騒音もひどい。山田は車体にちいさくあけられたのぞき窓に手を押し当てた。前方に雲が見える。戦車はその雲のなかに突っ込んでいった。

「いよいよ魔王と戦おうといつ勇者どのがあらわれましたなあ！ 魔王がこの山脈に居城を築いてからといつもの、わがゲゼン軍はなんとか倒そつと奮戦してきたのですが、魔王のちからは強く、そのちからをゲゼンの結界で封印するのがやつとでした」

騒音のなかでもテイン隊長の声はよく通つた。指揮官の才能のなかでも、よく通る声というのは重要である。山田は身をのりだし、戦車の騒音にまけまいと声をはりあげた。

「今まで魔王の城をめざした人間はいないのですか？」

隊長は首をふつた。

「わざや、こましたよ。しかし城に近づくことはやえできないのです。ある程度まで近づくと……、いや、これは実際に体験しなければわかりません」

そういうと隊長はなぞめいた表情になつた。

戦車は凹凸のおおい地面をそのキャラピラで踏破していく。すでにすっかり戦車のまわりにはオレンジ色の霧がおおついていた。

「なんだろう、この霧の色は……。夕方でもないのに」

市川はくくんと鼻をきかした。色がついているほかはにおいも

なく、ふつうの霧に見えた。

しばらく行くつち、隊長の様子が変わつていつた。あきらかに緊張をしている。

「みなさん、もうここからは魔王の領地といつていい地域です。用心してくださいよ」

洋子は唇をかんだ。

「なんだかいやな予感……」

いいかけ、彼女はのぞき窓を見て田をまるくした。まるでスープのようにこじりこじり霧のむこう、なにかがうごめいている。ずし……

ずしん……

なにか重々しいものが近づく気配がする。

みな戦車ののぞき窓に額をあつめ、外をうかがつた。霧のむこうになにかのシルエットが見えた。

ふいにそれがたちこめる霧をわって姿をあらわにした。

「サイクロプス！」

市川がさけんだ。

それはギリシア神話に登場するサイクロプスであった。一つ目の巨人である。すっぽだかで、片手に巨大な棍棒をにぎつている。身長はかるく五、六メートルはあるだろう。

ぎろり、とひとつしかない巨眼を動かし、サイクロプスは戦車を見下ろした。ぐあつ、と巨人はあかい口を開き咆哮した。ナイフのような鋭い犬歯がむきだされる。片手に握った棍棒をふりかぶり、全身のちからをこめてふりおろす。

ぎやりりりりん！

戦車のキャタピラが逆転し、あやうにところでサイクロプスの棍棒をさけた。棍棒のふとさは一メートルはありそうで、その重さだけでも相当なダメージがありそうだ。いくら戦車の外板が鋼鉄でも、まともにくらえればただではすまないだろ？

「主砲砲撃用意！」

デイン隊長がさけび、部下がはしごをのぼって砲塔へ移動する。気違いじみたいきおいでハンドルをまわし、戦車の砲塔を回転させ、主砲のねらいをつけた。

「撃て！」

隊長の命令で部下は砲撃した。

反動で車内はずしん、とゆれる。

わあ、と五人は悲鳴をあげた。

ずばああん！

砲弾がサイクロプスの胸に命中し爆発した。
ぐおおおおおつ……

サイクロプスは苦痛に悲鳴をあげた。煙がおさまると胸からはまつかな血がだらだらとながれてい。怪物はじぶんの胸を見下ろし、あいている片手で傷をなせた。まっかにそまつた手のひらを口にもつてきて、それをぺろりとなめる。

「！」

サイクロプスの顔に怒りの表情がうかんだ。せつせつとほくらべものにならない咆哮が怪物の口からはなたれる。

びりびりと戦車の車内が振動した。

洋子は耳をおさえ、悲鳴をあげた。

どすん、どすんとサイクロプスは大股に戦車に近づくと棍棒を振り下ろした。

ぐわああん！

ものすごい轟音が戦車のなかに響いた。ベコリと戦車の鋼鉄の外板がそとからへこむ。怪物は二度、三度と棍棒をふりおろし、戦車を打ち据えた。そのうち衝撃で戦車のフレームそのものが歪んだのか、エンジンから異音が発しあじめた。

ぐけけけけけ……

きゅるるるるん……

エンジンは咳き込みはじめた。そのうちキャタピラが止まつてしまつ。

「いかん！ 逃げ出さなければ！」

隊長はまつさおになつて叫んだ。後部ハッチにひとつくと、あわてて開いた。

「さあ、逃げて！」

五人と隊長の部下は戦車からとびおりた。巨人は風車のようて腕をまわして戦車に攻撃を繰り返している。見る見る戦車の外形はへこみ、とうとうペしやんこになつてしまつた。

「なんじやつだ……」

市川はあきれてつぶやいた。

ぐるるる……

怪物はさきよろつと一つ皿を一行にむけた。ぐわつ、と大口をあけだらだらと唾液をたらし憎悪の表情になる。

「やばい、くるぞ！」

ひやあつ、と部下たちは算を乱して逃げ出した。じすじすと足を踏み鳴らし、サイクロプスは突進した。

「ど、どつする？」

市川は真つ青になつた。

三村はすらりと聖都ゲゼンで受け取つた剣をぬきはなつた。それをみて市川も決心がついたようだつた。鞘から剣をぬき、構える。

「畜生、どうにでもなれ……」

「おおおお！」

三村は剣をかまえ絶叫した。だだだつ、と怪物に駆け寄るとともに飛び上がつた。

「すげえ……！」

市川は歓声を上げた。三村はかるく十メートルは跳躍したのである。ぐるぐると空中で回転すると、怪物の頭上を舞い、その背中に飛び降り、ぐさりと剣をつきさした。

「ぐわああああ！」

苦痛にサイクロプスは絶叫した。

「いぐぞ！」

市川は洋子と山田に声をかけ、走り出した。ふたりは市川とともに怪物に突進する。

「どうなつてんの？」「

Hレンはぼうぜんとつぶやいた。あんな怪物に立ち向かおうなんて、なんて連中だらう！

市川と洋子はサイクロプスの両側にまわりこむと、三村と同じようく跳躍した。どちらも人間業とは思えないほどの跳躍力である。樂々と怪物の頭上高く飛び上ると、両肩に飛び降り、サイクロプスの顔めがけて切りかかった。サイクロプスはこの攻撃をなんとかふりはらおうと棍棒を投げ出すと三人をつかもうと両腕をあげた。

「ふすり！」と、三村は怪物の頭のうえからその一つ目を突き刺した。

ぎやあああああつ！

怪物は苦痛に身もだえた。その勢いで三人はふりおとされる。

山田は怪物を見上げ、宝石が装飾されている杖をふりあげた。じつと怪物をにらむ。

びしいつ！

杖の先端から青白い閃光が飛び、怪物にぶち当たった。

うぎやあああつ！

全身に電光をあび、怪物は痙攣しながらあおむけに倒れていく。ずつししいいん！

地面を振動させ、サイクロプスは倒れこんだ。ぶすぶすと皮膚は焼けこげ、あちこちまだらになつっていた。

ずるり……と怪物の皮膚は抜け落ち、その骨格があらわになつた。じゅうじゅうといやな匂いをまきちらし、サイクロプスの遺体は消滅していった。

「お見事！」

デイン隊長が嘆声をあげた。部下たちも賛嘆の表情になつていた。

「あなたがたの技は、とても人間わざとはおもえませんなあ……、

「お見事！」

あの怪物の頭の上へ飛び上がったときは、羽根がはえているのかと思いましたぞ」

それを聞いて三村は複雑な表情になつた。

「いや、無我夢中でした」

市川は口を開いた。

「それより魔王の城へはやくいりつけ。これから歩きだから、急がないと日が暮れら」

みな市川の意見に賛成した。隊長は一行の前に進み出ると歩き出した。

「こちらです。このやきに魔王の城があるので」

全員、オレンジ色の霧の中をぞろぞろと歩き出した。

山田が市川のそばにならび、話しかけた。

「なあ、いまの跳躍、すげえもんだったなあ。かるく十メートルは飛んだみたいだ」

市川はうなずいた。

「ああ、おれも信じられない。三村のやつが最初に飛んだのを見て、おれもできるんじやないかと思つたんだが、とにかく体が勝手に動いちまつたんだ……」

「それだ！」

山田の声に市川は「え？」となつた。

「なにが、それなんだい」

「いや、言つと氣を悪くするから……」

「なんだよ、言つてくれよ」

「そのう、ますますここがアニメの世界だなあ、と思つてね

「？」

妙な顔になる市川に山田は説明した。

「あの跳躍、とても普通の人間では無理だ。十メートルを飛び上がるなんて、オリンピックの選手だって不可能だ。しかしアニメの表現ではしばしばああいうことはやるだろ。ようするにキャラクターの能力の表現として信じられないほどの高さに跳躍する、なんて

」とはあたりまえだ」

「ていうことは、おれたち木戸さんの絵コンテそのままに動いているってわけかい？」

市川の表情がけわしくなった。だれだって自分の行動が他人の思いのままに動いているということになればいい気はしないだろ。山田はあわてて否定した。

「いや、そういうことじやないよ。木戸さんが怪物を倒す絵コンテを描いておれたちがそのままに動いたのか、もしかしたらおれたちの行動がどこかで木戸さんのインスピレーションに影響して、そういう絵コンテを描くことになったのかもしれない」

市川は舌打ちをした。

「ちえ、まったく馬鹿馬鹿しい話だ。はやく、この気違いじみた世界から抜け出したいよ」

山田はうなずいた。

「おれもそう思う」

ディーンは一行を振り返った。

「みなさん、あれが魔王の城です！」

なんだかかれの口調は観光ガイドのようである。全員、かれの指差す方向を見上げた。

オレンジ色の濃霧のなか、無数の尖塔をもつた城がシルエットになつて見えている。

「あれが、そうか……」

三村は背をのばし、するどい目つきで城を見つめている。

「行こうか……」

一步、踏み出す。

じやりじやりと靴底に荒地の小石が音をたてた。異様な気配があたりにみちていた。

全員の神経がぴりぴりと緊張している。

濃霧はさらに濃くなつていぐ。

あまりの濃霧に一瞬、城の全景が視界から消えた。

「やー、城はビビだ！」

山田は驚きでびみたえ、あたりをきょろきょろと覗回した。いまのこままで前方にそびえたつていた魔王の城が消えてくる。うしろを振り返つた一同はぽかんと口を開けた。なんと城はかれらの背後にあった。

三村は眉をよせた。

「おかしいな、進む方向を間違つたかな」ふたたび城を田指して歩き出す。

が、こんども見失つた。

かなりの距離を歩いたと思つてたが、いつのまにか金圓もとの場所にもどつていた。

「わかつたでしょ。なんどもわれわれは魔王の城に近づいりうどつたのですが、結局はもとのところへ戻つてしまつのです、すまなそうな表情でデインは説明した。

ふうん、と山田は髪をなげた。

「どうやら空間がゆがんでいるみたいだな」市川は山田に話しかけた。

「わかるのかい？」

山田はうと、とうなづく。

「ああ、SFなんかじゅ古典的な手法だよ。近づいりうどつとももとの場所に戻る、つてこの場面はいつこつファンタジーSFなんかじやおなじみや」

「じゃ、解決の方法はあるのか？」

「そりや、おれの読んだSF小説じゅいろいろあるよ。そのなかで、どの方法がこの場面にふさわしいか……だが」

髪をしごきながら山田は一心に考えてくる。やがて決意の表情がうかんだ。

「ようし、これはファンタジーの世界だ。それならファンタジーの方法論でいくしかないか……」かれは一同をふりかえた。

「みんな、田をつぶれ！ 城を見ていると幻惑される。いいか、かならず城にたどりつくと信じて歩くんだ！」

みな山田の命令に眼をつぶつた。

「進め！」

そのまま眼を閉じたまま歩き出す。

ざぐ、ざぐ、ざぐ、と荒地を歩く足音だけが聞こえている。

そのまましばらく進んだ。

「もういいかな……」

山田はさうつぶやくと田を開けた。

にんまりとした笑みがうかぶ。

城はすぐ田の前にあつた。

「やつたぜ……」

ほこらしげに振り返ると、驚きの声をあげた。

「あれつ、どうこうつた？」

城の前にそろつているのは五人だけだった。山田以下、三村、市川、洋子、Hレンの五人である。デイン隊長と部下たちは遠くに霧のなかでうるうるとしていた。

「おおーい！」

山田は声をあげた。デインたちは山田たちに気づいていちへ走りよつた。

「あれ？」

市川は頓狂な声をあげた。

デインと部下は懸命にこつちへこつちとして夢中になつてかけているのだが、一向に近づけない。足を交互に踏み出しているのだが、その場で一步も前に進んでいないのだ。そのつち疲れたのか、全員そなばでへたりこんでしまつた。

「こつや、おいていくしかないなあ。おい、山田さん。どうこうとなんだろ？ あんたならわかるだろ？」

山田はうなずいた。

「うん……。おそらく、この城にはいれるのはおれたちだけなんだ。

たぶん、ストーリーのクライマックスが近づいているから、余計なキヤラは邪魔になるのさ」

洋子は田をまるくした。

「クライマックス？ じゃ、ついにあたしたち、魔王と戦うのね」「そうにちがいない」

エレンは地団太を踏んでさけんだ。

「なにあんたたち、わけがわからないこと言つていいのよー。ねえ、城にはいるの？ はいらないの？」

彼女に言われて全員われにかえり、目の前にそびえる魔王の城をみあげた。

城はのしかかるような圧倒的な迫力でそびえたつていい。正面には十メートルはあるうかという巨大な扉が見えていた。

三村は一步前へすすんだ。

「行きましょう。魔王を倒すんです」

みな、扉に近づいた。

「どうやってこいつを開けるんだ？」

市川が不安そうにつぶやいた。

が、その疑問は扉に近づくと解消された。なんと一同が近づくと、扉は勝手に開きはじめたのだった。

「行くぞ」

重々しげ顔をたて、扉は左右におおきく開け放たれた。

「ぐり……、と山田はつばをのんだ。恐怖が下半身から胸へとこみあげる。かれはぎゅっと杖をにぎりしめた。

「行くぞ」

かけ声をかけて内部へ足を踏み入れる。

ひやり、と冷たい空気が顔をなぶる。

全員、ぴりぴりと緊張して城の内部へ進む。

見上げると何本もの石の柱が天井をささえ、溶け出したような石のつららが垂れ下がっている。

「……」

洋子はぎくりと呟をとめた。

「ね、見て……」

壁を見つめたまま後ろ手で市川の袖をひっぱった。

「なんだよ……？」

洋子の指差す方向を見て市川もぎくりと身をこわばらせた。

「これは……」

ふたりの様子にのこりの三人も洋子が見ている場所を注目した。全員、その正体を知つて眼を丸くした。

「人間だ……」

山田がつぶやいた。

洋子の見つめる壁には無数の人体が埋め込まれていたのである。みな苦悶の表情をうかべ、空中にさしのべられた両手はたすけを求めるかのように差し出されている。

洋子はおそるおそる近づくと、その人体の指先にふれてみた。触れると同時にびくつ、とひっこめる。

「つめたい……。それに石のように硬くなつてる……。」

「その通りよ」

だしうけにエレンが発言し、洋子は飛び上がった。

「な、なによ。いきなり！」

「みな石になつているのよ」

「あんた、なにか知つているの？」

「ええ、あたしがまだ子供のころ、魔王が城を築くため世界中の人民を狩り立てことがあつたわ。あたしの両親もそのなかにいたの。あたしはこの眼でみたのよ。魔物が村をおそって、人々を石にしてさらつていいくのを」

「それじゃ、あんた……」

エレンはうなずいた。その両目に涙があふれてくる。

「ええ、そうよ。あたしのさがしているのは両親の体……。魔王は城を築くため、人々を永遠の恐怖にとじこめ、その力でこの城を築いたの」

そこまで言つと、彼女はだしぬけに刀をふりあげ、石像にされた人間にきりかかった。おもわず洋子は剣をとつてそのエレンの攻撃をうけとめた。

『やめろー！』

「なにをするのよー！ あなたの言つとおりだとすれば、この石像はまだ生きているといつことになるのよー！」

「そうよー。だから壊してやるのー。永遠の苦痛と恐怖ことりえられた生から、この人たちを救つてやるのよー！」

「やめろー！」

市川はふたりに割つて入つた。エレンと洋子は飛び下がり、もの

すごい剣幕でにらみあつた。

「エレン、あんたの言つとおりだとしても、まだかれらを救う道はないわけじやない。魔王がかれらを石像にしたなら、魔王を倒せばその呪いがとけるんじやないのか？」

市川の言葉にエレンははつとなつた。

「本当？ 本当にあんた、そう思つ？」

ああ、と市川はうなずき、山田を見た。

「山田さん、あんたどう思つ？.」

山田はうなずいた。

「考えられることだな。たいていファンタジーの定石なら、呪いをかけた大元が倒れれば、その呪いもとけるのが普通だ」

剣をかまえていたエレンは、ふつと力をぬいておさめた。

「そうならいいんだけど……」

三村は声をかけた。

「行きましょう。とにかく魔王を倒すのがなにより先決です」

そう言つと背をのばし、大股に歩き出す。みな、そんな三村をぽかんとして見つめる。市川は肩をすくめた。

「そうだな……。行こうや」

三村のあとにつづいて歩き出した。市川は山田のそばに近づいた。

「おー、山田さん。あんたの設定画とおりの城じやないか。どう感

じてる」

「どうつて……」

山田は困惑していた。

「そんなことより市川くん。きみの描いた魔王のキャラ設定のほう
が気になるよ。おれたち、あんな怪物と戦うことになるんだぜ」

「なんだよなあ」

市川は嘆息した。

魔王のキャラ設定していたときは、いかに魔王らしく恐ろしげな
外見を一心に考えていたのだが、実際こうして対決をひかえて恐ろ
しさが身にしみる。

あたりをきょろきょろと見回していた山田は、城の内部のある場
所を見て足をとめた。

「待つた！」

山田の声にみなとまる。山田は奥のほうをゆびさした。

「あつちだ！ おれの設定では、あの階段を降りれば魔王の潜む場
所へたどりつけるはずだ」

全員、山田の案内で階段をおりはじめた。階段は石造りで、まわり階段になっていた。階段の両側の壁も、また無数の石像にされた
人体がうめこまれている。みな無念の表情をつかべ、全身で苦痛を
表現していた。そんな石像を見ていると恐怖がきりきりと頭をしめ
あげてきそうであった。

階段を降りるにつれ、あたりにはじつとじとした湿気がみちてき
た。あしもとの石造りの階段はぬるぬるする前におおわれ、うつか
りすると足を滑らせそうになる。

「臭え……」

市川が顔をしかめた。

かれの言つとおり、あたりに瘴氣としかいよいのない腐敗臭が
みちていた。その臭気にみな口だけで呼吸しようとあはあと荒い
息をついていた。

ついに階段はつき、通路に行き着いた。通路はすべて石造りで、

」の場所にはうめこまれた石像はなかつたが、じんじはあらゆるとこに色とりどりの苔や、黴。そして菌糸類がはびこついていた。鼻が曲がりそうな臭氣は、その菌糸類から発生しているらしかつた。壁にべつとりと付着している苔が青白く発光していて、あたりはほの明るい。

「発光苔ね……」

エレンは手近の壁に手をのばした。ちょっとつこてみると、苔の表面からぶしゅーっと茶色い孢子がふきだし、エレンはあわてて顔をぬぐつた。

「わっ！」

山田は首を振り、声をかけた。

「氣をつけてくれよ、エレンさん。」
「」
にがおきるかわからないんだから

「わかつてゐわよー！」

彼女はほほをふつ、とふくらませた。
みな通路の奥へすすむ。

地下にここんとこいつことからか、あたりには奇妙な圧迫感があつた。通路はどじこまで続くのかわつぱりさきが見えない。一本道だから道にまよつことはないが、どじこまで歩いても同じよつた景色が続いているだけだつた。

と、先頭を歩く三村が足をとめた。

声をかけようとする市川にしつ、と唇に指をあてて制止する。
そのまま立ち止まつていると、通路のおくからずるつ、べぢやつ
……といつよつな、なにか引きずるよつた足音が聞こえてくる。

「出た」

市川はつぶやいた。

通路のおくからあらわれたのは数人の人間だつた。それらは兵士の格好をしていた。が、その兵士の防具につつまれてゐる体からはぽたぽたと腐汁につつまれた肉片が滴り落ちてゐる。

「ゾンビだ……」

市川はつぶやいた。

その通りだつた。あらわれたのはゾンビ兵の集団だつた。全員腐り落ちた骨がむきだしになつた体で、剣や槍、盾などをかまえている。

奇妙にゆつたりとした動きでゾンビ兵たちは五人に襲いかかつた。わあ！ と、恐怖のさけびをあげ、洋子はその攻撃を受け止めた。ぎりぎりぎり……

ゾンビ兵はちからまかせに洋子に剣を押し付けてくる。洋子は必死にその攻撃を押しのけようとふんばつていた。
ぐあああ……、とゾンビ兵は口を開けた。その口からじぼじぼと腐つた肉汁がほとばしる。

「いやああああっ！」

洋子は首をふり、ちからをこめてゾンビ兵をはねとばした。
どしゃ、とゾンビ兵は地面に倒れこんだ。じぶじぶと全身から腐つた汁をたらしつつ、ふたたびのつたりと立ち上がる。

「なによつ……」

洋子は泣きそうな顔になつてじぶんの体を見下ろした。首から下がべつとりとゾンビ兵の放出した汁にまみれている。

「洋子さん！ 油断するな！」

山田に言われ、彼女は顔をあげた。見るとゾンビ兵がふたたび剣をふりあげ襲いかかつてくる。

ぎいいいん！ ちやりいん！ と、あちこちでゾンビ兵と五人の切りあいの音が通路にひびいた。ゾンビ兵の動きはのろく、その攻撃は樂々と受け止めることができるのだが、なにしろ切りうが突こうが、まるつきり相手にダメージをあたえることができない。みなゾンビ兵の腐つた体を一寸刻みに切りつけるほかなかつた。洋子もまた必死になつてゾンビの体に何度も剣を突き刺し、剣をもつ腕の肉や骨を削り取るようにして戦つた。

ようやく戦いがおわつたとき、みな疲労困憊のきわみにあつた。あたりには切り刻まれたゾンビ兵の体のばらばら肢体がちらばり、

床にはいやな匂いをはなつ肉汁が水溜りをつくつている。しかしそれでもぱりぱりにされたゾンビ兵の肉片はひくひくと蠢いて、完全には死んではいないようだ。

「みな、無事ですか」

はあはあと息をつき、三村は全員に声をかけた。あひひひから「ああ」とか、「へへ」とかいう返事がある。

ぐひや……

ぬちや……

足音にみな新手がきたのかと緊張した。

「Hレン……」

じりしたのか、と山田は立ち上がった。

見るとHレンがふりふりと迷ひよつた動きで歩いている。

「近づかないで……」

Hレンは山田に声をかけた。彼女の声は「ほほほ」と沼からふきあがるメタンの泡がこもつたような声になっていた。山田はぎくりと足を止めた。

見るとHレンのふたつの瞳にはつすべ膜のよつたものがかかるついた。

ぐえええ……！ と、Hレンは身をおひまげりゅくまつた。その口から臭い匂いの腐汁がじぼじぼとほとばしる。

「Hレンさん！」

驚愕に山田は身をこわばらせた。

「あたし……あの茹の粉をかぶったあと……気分が悪くて……でも、いまわかつた。あれは人間をゾンビにしてしまう粉なんだわ……」

Hレンは顔をあげた。すっかりふたつの瞳には白い膜がかかり、完全に白目になっている。顔には汗というより肉汁のような黄色い粘液がまとわりつき、顔色はすっかり死人のそれになっていた。

「あたし、もうすぐゾンビになってしまひ……、そうなつたらもう、あなたがたを殺すことしか考えられなくなる……。お願ひ、いまの

「うち逃げて！」

ぐえええ……。

ふたたびエレンは腐汁を吐き出した。

市川がつぶやいた。

「すげえ……ほんとの腐女子だ……！」

「馬鹿なこと言つてないで！」

洋子がかつとなつて叫んだ。

山田は決意の表情になつた。

「わかつた！ おれたちはなんとしてでも魔王を倒す。 そつすれば、あんたも元の人間に戻れるに違ひない！」

ぶるぶると震えつつ、エレンはひつしになつて笑顔らしきものをうかべた。

四人はエレンを一瞥すると、くるりときびすを返して走り出した。うおおおお……、と、エレンの叫びが通路にこだました。それは四人をとりにがしたことによる無念のさけびか、それともゾンビになつてしまふじぶんを必死に押しとどめようとする叫びなのかわからなかつた。

幕間木戸

「圓形」的「圓」字，就是「圓形」的「圓」。

動画机を前にして木戸は頭をかかえていた。コンテはすでに二十六話ぶんにのぼり、ついに四人が最後の決戦にのぞむクライマックの場面にさしかかっていた。あと半パート、描けばついにおわるはずだった。

が、どうにも終わらせることができなくなっていた。
肝心のことをわすれていたのである。

木戸はメガネをはずし、じじじと鼻のつけねをこすった。
「弱ったなあ。」ここまで描いていて、こんなことに気づくなんて……

「どうなにしちゃつてん？」

あの
”
声
”
だつ
た。

「もうちゅうことで終わりはめんやろへ。ちゅうちゅうとやつなはれー。」
ひれしぶりに”頃”は木戸に詰しかけてきたのだった。

十九

「肝心の」とを忘れていたんだ」「なんですね。肝心のことって？」

名前(2)

そうだ。魔王の名前だ」
沈黙がその場を支配した。

けた。

魔王は魔王で
「それがどうしてそんな問題になりはるんですか？」
ええのと違いますのんか？」

沈黙がその場を支配した。

ええのと違いますのんか?」

「そつはいかないよ。かんじんの戦いの場面で主人公が叫ぶ。「お前を倒す！」ってね……そんなどき魔王の名前を叫ばないわけはないだろ？ ただ魔王じや格好つかないからな」「魔王の名前はあるんでつか？」

「ああ、あるよ。」ここにね

そう言って木戸はじぶんのこめかみを搔さした。

「ちゃんと考えてあつたんだ。しかしつつかりしたこと」、こままで登場したキャラに魔王の名前を主人公たちに教える場面を作つてなかつたんだ。だから主人公はいまだに魔王の名前を知らないままだ

だ

「なんちゅうつ……」

”声”はため息をついた。

木戸も腕組みをして考え込んだ。

「どうすりやいいんだ……」

ふとい今までのキャラ表を手にする。

「今までのキャラクターのひとりひとりにじりと視線を落とした。まるでそれらのキャラがかれに知恵をつけてくれる、といつよう。やがてかれはひとりうなずいた。

「よし、この方法で行こう！」

つぶやくと木戸はふたたび鉛筆を手にとり、あらたなコンテ用紙をひろげた。

背をまるめるとかりかりと音をたてて鉛筆を走らせはじめた。

決戦（前書き）

ついに魔王との最後の戦い！

四人はもとの世界へ帰れるのだろうか？

決戦

よつやく最深部についたな……。山田はあたりを見回した。このあたりにくると、もはや地下室といふ雰囲気はなく、なにか生物の体内にもぐつていいるような感じである。あらゆるところが溶け合つたような状態になり、ぶよぶよとした質感になつていて。足元も一歩踏み出すことに、ぐねり……、とやわらかく沈み込む。壁面を見ると無数の血管が浮きあがりどきん、どきんとかすかに脈動している。空気は重く、湿っぽい。

「やばいな」

市川はつぶやいた。

ぱたり！ と、天井からなにかがしたたりおち、首筋を直撃した。うひゃ！ と、市川はとびあがつた。が、すぐに驚愕の表情になつた。

「いててててて！」

ばたばたと首筋をたたく。

「どうしたつ！」

山田がちかより、市川の首筋をのぞきこんだ。かれの首筋は真つ赤に腫れあがつていた。

くくくく……、と市川は苦痛にうずくまつていた。

「どうやらここつは胃液みたいだな。消化液がしたたつているんだ……」

みな山田の言葉に顔を見合せた。

「はやく抜けましよつ！」

顔をあおぐせ洋子がさけんだ。全皿つなずくと足をはやめた。ぶにゅん、ぶにゅん、と足元の床はやわらかく沈み込むとわりつぐ。

「へーーー！」

三村は歯を食いしばると剣を抜き放つた。手近の壁に剣をつきた

す。ぐやー。と剣は壁にすこしまた。

「ふじゅ「ひひひひ……！」

切り裂かれた壁からどり、とばかりに血液と粘液がほとばしった。

ぎええええ……

通路内に怪物の悲鳴のような音が充満した。

「わー。どうなってるんだー。」

山田はさけんだ。

ぐにゃぐにゃと通路の壁が蠕動し、ひくひくと動いている。全員足をはやめる。

どこまで走ったのか、全員立ち止まつた。

「行き止まりだ！」

市川が悲鳴をあげた。

かれの言つとおり、通路は行き止まりになつていた。あともどりしようかと振り返つた一同はうつ、とたたらをふんだ。なんといままで進んでいた通路もふさがつていたのである。

ぼたぼた……
ぼたぼた……

天井からは大量の消化液が滴つてくる。消化液は見る見る床にたまり、あしもとをひたした。

三村はふたたび剣をつきをした。

山田は三村にふりかえつた。

「おー、三村くん！ なにをしようつていうんだ？」

三村はこたえず、一心不乱に壁に切りつけていた。剣をつきをすくとに大量の血液と粘液がふきだしてくる。

「どうかー！」

市川はさけぶと三村のそばにかけよると一緒にになつて剣をつわせしはじめた。

「ぐやー！」

「ぐやー！」

「ぐやー！」

ついにふたりが隠れるほど穴はおおきくひらがつた。

「みんな、通れるぞ！」

三村がさけぶ。洋子と山田はふたりが切り開いた穴にとびこんだ。ぬちゃぬちゃする体液がふたりの手足にからまり、動きづらかつたが、それでも必死になつて足を動かす。夢中になつて前へすすむと、ようやく広々としたところへ出たのを感じた。

「ふいーっ！」

山田はおおきく口を開け、空氣をすいこんだ。あの壁を通り抜けたときは、大量にしたたりおちる粘液やら、血液やら、体液で口や鼻をふさがれ、息ができなかつたのである。目をふさいでいるべつとりとした粘液をふりはらいあたりを見回すと、ほかの三人が地面にへたりこみ、肩で息をしていた。

市川は山田に気づいてにやりと笑いかけてきた。

「ひ……ひどい田に……あつたな！」

「まつたくだ！」

山田はうなずいた。ふりかえると巨大な大腸のようなものが見える。そこにさけめがあり、「ほほ」ほと血液がふきだしていた。大腸のようなものはしばらく蠕動をくりかえしていたが、やがて切り裂かれた傷がじはじめぴつたりとあわさると傷口が消えてしまった。ずるり、べたり、と巨大な腸管は尺取虫のような動きで遠ざかり、闇に消えた。

「なんなの、あれ……」

洋子は頭をふった。市川はよつよつと立ち上がり、それにこたえた。

「木戸さんは、けつこうスプラッタものが好きなんだ。たぶん、木戸さんのアイディアだらうね」

「いやだ……。あのゾンビのときだって、さつきのあれだって、あたしひどいになつちゃつてさー。ああ、気持ちがわるいー。ねえ、どうせならシャワーくらこどこかにないのかな？」

「すぐに乾くや」

市川のこたえに洋子は憤然となつた。

「もう！ いつたいここはどこ？」

洋子がさけんだそのときであった。

ぐおつぐおつぐおつ……

闇の中に響き渡る笑い声。

四人はぎょっとなつて天井を振り仰いだ。

！

だしぬけに上方からオレンジ色の光がともり、まぶしさに四人は目をしばいた。

「よく来た……勇者たちよ……」

「じりじり」と響く石臼のような声に四人はぞつとなつた。その声はあきらかに人間のものではなかつた。

そこにそれはいた。

「魔王……」

三村はつぶやいた。

そう、たしかに魔王であつた。

身長十メートルはあるつかという巨体。まるで黒曜石を刻んだかのようなどつしりとした体つき。魔王は玉座にどっかりと座つていた。その顔は無数の岩盤を組み合わせたようなじつごつとした外見をもち、ふたつの瞳は内部からほのぼのめらめらと燃えているかのように輝いている。魔王はにやりと笑つた。

魔王を見つめていた三村は、その膝に手をとめ叫んだ。

「姫！」

「コーラ姫が魔王の膝もとにすわつていたのである。魔王の巨体にくらべコーラ姫のほつそりとした肢体はあまりにたよりなく、ほんのすこし魔王が身動きしただけでつぶされそうであった。彼女はぐつたりと魔王の膝もとに横になり、あおじろい顔でぴくりとも動かない。死んでいるのだろうか？ いや、その胸はかすかに上下しているようだ。意識をうしなつてゐるだけらしい。」

「おまえら、この姫を救出したのであるう……？ しかし姫を

取り戻したくば、わしを倒さなくてはならぬ。おまえたちにわしを倒せるのかな？」

三村は声をはりあげた。

「あたりまえだ！ 今日こそ魔王、おまえの最後の日となるのだ！」

「よく言つた……では、わが手にかかるて死ぬがよい！」

ゆらり、と魔王は立ち上がつた。姫の体は魔王の膝からころげおち、地面でころころところがつてとまつた。

わあわああーつ！ と、三村は剣をふりかざし絶叫して駆け出した。

たたたたた……と全力で駆けると、魔王の手前でとーん、と跳ね上がる。ひととびで魔王の胸まで跳躍すると、ぐわり、と剣先をその体の筋のよくな皮膚のすきまにつきさす。つきさした剣につかまり、三村は魔王の体をよじのぼつた。肩のあたりまでよじのぼると、三村は剣をふりあげ、魔王の顔めがけて切りかかつた。

ぐわっ！ と、魔王はその口をおおきく開き、鋼鉄のよくな牙で

三村の剣を噛んだ。

ぎりぎり……

魔王は三村の剣をがつちりとくわえ離さない。三村は脂汗をながし、くわえられた剣をひきぬこうとちからをこめる。

ゆうゆうと魔王は右手をあげると肩にとまつた三村を、まるで蚊がとまつたかのように指先でびしり、とばじいた。

「うわああ！」

たつた一本の指先ではじかれただけなのに、三村の体は宙についてそのまま地面へまっさかさまに落ちていく。

どさり、とかれは地面に落なし、激痛に身をそらせた。

うむむむむ……、と三村は苦痛に顔をゆがめた。

魔王は口にくわえた三村の剣をぷい、と吐き出した。剣はがちやーん、とはでな音をたて地面にはねかえつた。

「三村くん！」

三田はさけんだ。

「へやおー。」

市川はさけぶと剣をもつて走り出す。

「まちなさいっ、あんたひとりじゃ……」

洋子も市川につづいた。

市川は剣をめちゃくちゃに魔王の足めがけてふりおろした。

魔王はそんな市川をつるをそつに片足をあげ蹴り飛ばした。

ひゅう、と市川は弧をえがいて宙をとび、どすんどばかりに地面に背中をうちつけた。

「ぐー！」

市川は白目をむき、苦痛のあまり身動きもできないでいる。洋子がかれに駆け寄った。

「どうしよう、どうすればいいんだ……」

山田はおろおろとあたりを見回した。

魔王の圧倒的な強さに、四人はまるでなすすべもなかつた。

と、一郎姫がさつきのさわぎで意識をとりもどしたのか、地面に横たわっている三村めざして這いつよいじっている。

「姫！」

山田は姫だけでも救おうと駆け寄った。

「姫、立てますか？」

彼女の腕をとると、姫は山田の顔をのぞきこんだ。

「ああ、あなたは？」

「三村の友人です。救出しにまいりました！」

姫はいやいやをするように首をふった。

「無駄です。魔王はあまりに強大……、人間にはかなうわけありません。あなたがたはここから逃げて！ せめて三村さまだけでも助けて……」

姫の絶望的な口調に、山田はふいに怒りがこみあげてくるのを感じた。

「なんですよ！ そんな馬鹿なことよく言えますね。われわれはあなたを助けるためどんな苦労をしてきたのか知つていいのですか！」

ねえ、魔王の弱点を知りませんか？　ここを攻撃すれば魔王を倒せるといつ

「そんなものあるわけありません」

姫は駄々つ子のように首を振る。

「どうすりやいいんだ。

山田は顔をあげた。

魔王は三村を踏み殺そうとその足をあげ、ゆっくりと踏み込んでいるところだった。

すしり、と魔王の片足が三村の体にのしかかる。三村はぐ、と息をはきだし、必死になつてのがれようとしたばたと片足を暴れさせている。

と、山田はポケットになにか動くものを感じた。なんだろうと手をやると、あるいはがふれる。

あの「賢者の石」だ！

いそいで石をつかむと田の前にかざした。

石は山田の手の中で青緑色に発光していた。

なんだろう？　賢者の石はおれになにかを伝えようとしているのだろうか？

石のなかになにか動くものが……。

じつと田を凝らすと、それはひとりの人間の姿になつた。

「やあ、また会つたな」

それはあの魔窟で出会つた老人だった。ぼろぼろだったマントはいまは真っ白に光り輝くローブにかわりその顔は神々しいといっていいほどのものに変わつてゐる。賢者そのものの姿だった。

「あなたは……」

賢者はうなずいた。

「そうじや。わしはかつて魔王の魔力を封じようと魔窟で戦つた。なんとか魔窟の魔力は封じることができたが、魔王のちからそのものは封じることはできなかつた。わしはみずからを靈体としてあそこにとどまり、チャンスをまったく……。そしていま、そのチャンス

がめぐつてきたのだ！」

「魔王を倒してくれるのですか？」

「いや、魔王を倒すのはあんたらの仕事だ。まず、魔王の強大な魔力を封じなければならぬ。その方法を教えてやる」

山田は狂喜した。

「教えてください、その方法を！」

「魔王の名を知ることじや……。名を支配すれば、その力も封ずることができる」

「魔王の名前……、そんなもの知りませんよ」

「そこの娘が知つておる」

「え？」

山田は「一ラ姫に振り返つた。姫は大きな瞳でまじまじと山田を見つめている。

「姫、魔王の名前を知つておるのですか？ それなら教えてください！」

とたんに姫はうろたえた。

「し、知りません！ そのようなこと」

あわてて山田から逃げようとする。

山田は姫の手をつかんだ。

「なぜです！ なぜ逃げようとするのです！ 教えてください、さあ、いますぐ！」

石の中の賢者は首を振つた。

「あわれ……、その娘は魔王の花嫁となつた。婚儀のとき、娘は魔王の真の名を知つたのじや」

「なんですって！」

「うううう……、と「一ラ姫はつづふし肩をふるわせた。

「死なせて！ あたしは魔王の呪いで花嫁となつてしまつた！」

山田は唇を噛んだ。

「それがどうしたってんだ！ おれたちは魔王を倒すため、ここまできたんだ！ それを無駄にさせるわけにはいかんぞ！ さあ、言

え！ 名前を言え！」

かつとなつて姫のむなぐらをとりがくがくとゆがぶる。手荒にあつかわれた「一ラ姫は怒りに山田の手をふりはらつた。

「なにをするのです！ 下郎が……わらわは姫ですよー。」

「だったら姫らしくしゆつてんだ！ あれを見ろ！ 仲間がやられ

そうになつてんだ！ さあ、魔王の本名を教えり！」

山田はさつと三村と市川を指差した。三村は胸に魔王の足がのしかかりじたばたしている。市川には魔王が片手をのばし、その体を握りつぶそうとしていた。洋子はひつしになつて剣をふりかざし、その腕に切りかかつていてだが、ひとすじたりとも傷をつけることができないでいる。「わくかんじたのか、魔王は市川をつかんだままの腕をぶるん、と横になぎはらつた。洋子は魔王の手の甲にはねとばされ、床にしりもちをつこしてしまつ。

「一ラ姫は山田を見上げ立ち上がつた。

「教えましょ。魔王の名前は……」

山田は姫からそれを聞くとうなずいた。

「よし！」

魔王のまづに振り向くと大股で歩み寄つた。ぐつと全身にちからをこめると、両手でメガホンをつくつて怒鳴る。

「魔王ダーゼン！」

山田の声は魔王の間全体に響き渡つた。

その声を聞いた魔王はぎくつと動きを止めた。

首をねじまげ、山田を見下ろす。

「なんと言つた？」

山田はふたたび声をはりあげた。

「おまえの名前はダーゼンだな！ それがおまえの本名だろー。」

「ぐぐぐぐぐ……

魔王は全身をふるわせた。

「おのれ……その名を口にするな！ わが名を口にするものは許さぬー。」

山田はさつと杖をふりかぶった。

「ダーゼン！」

かれのやりとりを聞いていた三村も、市川も息をふきかえした。山田が魔王の名を連呼するたび、からだに力が蘇るようだつた。

さつと立ち上るとふたりとも力をふりしほり、大声でさけんだ。

「ダーゼン！」

「ダーゼン！」

洋子もまたさけぶ。

「ダーゼン！」

全員、声をあわせて魔王の名を呼んだ。

魔王は耳をふさぎ全身を震わせた。

山田は杖をかざした。

と、山田の右手にあつた賢者の石がふわりと宙に浮かび上ると、杖の先端にすいこまれていぐ。すると杖にかざられた色とつづりの宝石が発光していくではないか。

なにがおきるのだ？

山田は田をまるくして見守つた。

ぶうづん……

杖は振動し始めた。

ううううんんん……

杖の振動ははげしくなり、山田は必死になつて両手でつかんだ。ちょっとでもちからをぬくと、あつという間にもつていかれそうだつたからだ。そうしている間にも、杖の先端のひかりはますます強まつた。

先端の光のかたまりがまつすぐ魔王の額へとすいこまれた。

「ぐおおおおつ！」

魔王は両手で額をおさえた。

ぱりぱりぱり……！ と、魔王の全身を青白い放電がつつんだ。

ぐああああああつ！

魔王は苦痛のためのたうちまわつた。どすん、ばたんとあちこち
体をぶつけ、壁には無数のひびがはいつしていく。
やがて顔をおさえた両手がだらりとしたにさがつた。

「…」

魔王の顔を見た四人はあぜんとなつた。

魔王の顔がすっかり面変わりしていたからだ。さきほどまでの岩
をけずりだしたような表情は一変し、こんどは血も肉もありそうな
魔物の顔に変わっていたのである。ぼろぼろと全身をおおつていた
甲殻のような皮膚がはがれおち、なかからしまつしろな皮膚の肉体
があらわれた。

「おまえら……」

魔王の表情は怒りに満ちていた。ぶるぶると全身のちからをこめ
る。ふつふつとその顔に、そして筋肉に血管が浮き出した。
ぐああああああつ！

魔王は咆哮し、くわつとばかりに大口を開いた。
「おおおおつ！

魔王の口からはまつかなほのおが一直線にふきだし、あたりをな
めた。四人はあやうくその攻撃をさけた。

三村はさけんだ。

「いまだ！ 魔王の魔力は封じられている！」

市川と洋子は三村のさけびに勇氣付けられ、剣をふるつてたちむ
かつた。

すばり！

ちからをこめてふりおろすと、魔王の腹に横一直線に傷がはしつ
た。なんと魔王の体も半分くらいに縮んでいたのである。
魔王はじぶんの腹についた傷を認めてぎよつとなつた。

三人は剣をかざし、魔王に切りかかつた。

ぐさ！ ばさー！ どすん！

めつたやたらに切りつける。魔王は必死になつて両手両足をふり
まわし、その爪で応戦しているが多勢に無勢、しだいに全身から無

数の傷跡をつけられ、そこからは滝のよじて血液がほとばしつた。

三村は両手で剣をわざわざもつた。

「ぱ……、とかれの剣の刀身にあおじろじかすみのような光がまといついた。魔王の表情にはじめて恐怖がうつかぶ。

「むん！ と、三村は魔王の田の前で剣をふりかぶった。

と、その両手から剣が宙にとび、魔王の胸にすここまれた。

「ああああ……」

魔王の悲痛な悲鳴がこだました。

じゅうじゅうと魔王の胸につきあわせた剣からじろじ蒸氣がほとばしり、魔王は苦痛にのたうちあわった。両手を天にやしのぐるような格好になると、ぱくぱくと口を開く。

「どお、と魔王は仰向けにたおれこんだ。

「じゅうじゅう……」

魔王の体からは蒸氣がどじめなくふきあがり、その体はじょじょに縮まつていった。ぼろり、ぼらり、と魔王の体はぼらぼらになり、ついには骨だけとなつた。その骨もかさかさにひびわれ、そこにはかすかな風で四散しあとたもなくなつた。

「やつたな……」

市川はふう、と息をはいた。

三村はコーラ姫に目を留めた。姫はつむじて床にすわりこんでいる。つかつかと歩み寄ると、その手をつかんで立たせる。

「姫、ご無事でなによりです」

「三村わお……」

彼女はこやいやをするようにかぶりをふつた。

「どうしたのです。お国へ帰れるのですよ」

「わたしは帰れません……。さつき聞いたでしよう。魔王の呪力でわたしは婚儀を受け入れてしまつたのです。わたしはこの魔王の城で死にます。どうか、お父さまには娘は魔王の手にかかるて死んだとお伝えください」

「そんなこと、忘れることがあります。しょせん、邪悪なたぐらみにかか

つたのですから」

「できません。だいいち、魔王の花嫁になつたわたしを、どこのだれが結婚相手として受け入れるでしょうか」

「ぼくがあなたに結婚を申し込んでいいでしょうか?」

こんでいる。

お、三村くん？」

三村は市川をむいた。

「どうあるんだよ…… どうよつに市川が唇を動かす。三村はこう

「おやが、おみ？」

そのおれにだけ……

びしき、びしひしき！

壁に無数の亀裂かはしる
ほろほろと破片が剥落した
もがーーー逃げろーー

市川がさけんだ。

全員、無我夢中で走り出した。

どかん、どん！ どすん！

すさまじい振動で城はゆれた。あちこちで崩壊がはじまっている。全員は揺れる床のうえをこけつまろびつ、必死になつて脱出して

いる。

急げ！
出口だ！

一同を市川は先導して走った。かれの言つとおり、目の前に城の出口が見えてきた。五人が通りすぎると城はもうもうたる土煙のか崩壊していった。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

ついに魔王の城はあとかたもなく崩れ去ってしまった。五人はぼ

うぜんとしてそれを見詰めていた。

「終わったな……」

山田がつぶやいた。市川がうなずく。

「うん」

がらり……と、つもつた瓦礫が動いた。はつとなつた市川は剣をかまえた。

ずぼり、とほこりのなかから手がつきだされた。その手はしばらくなたりをさぐっていたが、やがてそのしたから肩が、そして上半身があらわれた。

「ふうーっ、いつたい、なにがあつたの？」

ほこりにまみれてあらわれたのはエレンだった。その顔はすっかりもどにもどつていて。

「やあ、無事だつたか」

市川は声をかけた。エレンはかれの顔を認め田をまるくした。

「あたし、もどつてゐる！」

そろそろどじぶんの顔をさわる。と、いきなり全身に手をはわせ、さわつていつた。

「もどつてるわ！」

山田はうなずいた。

「魔王ののろいがとけたんだ」

「それじゃ、あんたたち、ほんとうに魔王を倒したのね！」

がらがらがら……、とエレンの背後で瓦礫が崩れる音がした。彼女がふりかえると何人かの人影がほこりのむこうからも迷いでくるところだった。みな、ふつうの村人ばかりである。

それらの村人をじつと見つめていたエレンの顔がぱつとかがやいた。

「父さん！ 母さん！」

無我夢中に立ち上がり駆け出した。数人の村人の中などびこむと、ふたりの男女のもとへ走つていつた。ふたりはだしぬけにあらわれた若い女性に戸惑つた様子だったが、エレンの説明にじょじょ

に理解していったようだった。やがて三人は城の廃墟のなかでかた
くだきあつた。

「よかつたよかつた。これでめでたし、めでたしつてわけか」

山田がそう言うと、洋子は首をふった。

「たしかにね……、でも、あたしたちにとつてはそうでもないわ。
いつたいあたしたち、いつもとの世界へ帰れるのかしら」

洋子の言葉にこたえるようにあの“声”がどどいた。

「じ苦労はん。あんたらのおかげで魔王はほろび、大団円ちゅうわ
けや」

四人ははつと顔をあげた。

「おれたち、帰れるのか？」

山田はさけんだ。

「せうや、これからあんたらをもとの場所へ返してやるさかい、前
へ出なはれ」

“声”がすると、かれらの田の前にふつ、とまるい窓が空中に開
いた。窓をのぞいた一同はぽかん、と口を開けた。

「木戸さん……」

窓のむこうに見えるのはあの演出部屋だった。動画机があり、木
戸監督が背をまるめて机にむかっている。かれは四人の声にぎくり
となつて顔をあげた。

「やあ、みんな……」

にやり、と照れ笑いをうかべる。かれの顔はすっかり無精ひげに
おおわれ、目は疲労のためおちくぼんでいた。

と、かれの目がおおきく見開かれ、驚きの表情が顔にのぼった。

「みんな、その格好はなんかい？ コスプレでもやつているのか？」

「ちえ！ あんたもおなじこと言うのか。それもこれも、みんなあ
んたのせいだぞ！」

市川は憤然として肩をすくめる。

なんのことかわからず、ぼう然とする木戸に、山田はこれまでの
出来事を説明した。

かれらが「パックの冒険」の世界で、木戸のキャラクターとなつて魔王を滅ぼすための旅を続けていたこと、キャラや美術の設定書を描いていたことを。

「そんな、まさか……」

木戸は戸惑いの表情になつて唇を噛みしめた。

そのとき木戸の手に握られているものを見て、市川が声をかけた。

「木戸さん、それ、もしかして？」

木戸はおずおずとそれを差し出した。

コンテだつた。

木戸の背後の動画机には、コンテが何冊も山となつてつまれている。

「木戸さん、コンテ描き終わつたのか！」

市川は木戸からコンテを受け取り、なかをぱりぱりとめくつて読み始めた。

顔をあげる。

その顔はなんとも奇妙な表情になつていた。

山田にコンテを渡す。

山田もまたコンテを読み始め、おなじような表情をうかべた。

洋子、三村もおなじだつた。

「まるでおなじだ、おれたちがやつてきたことがそのままこのコンテに……」

山田はぼう然としてつぶやいた。

木戸のコンテに描かれていたことは、いままでの四人の冒険そのままだつた。

四人全員、木戸を注目した。

「ああ……なんとか描き終わつたよ……。しかし……」

木戸はそう言つと悩ましげな顔になつた。

「今まで一枚も描けなかつたんだが、このおかげですらすら描けた。どういうことだ……もしかして、あんたらが冒険していることと関係しているのか？ おれのコンテはおれのアイディアなんかじ

やなくて、あんたらが冒険したじとをそのおもひを歸したじと
も……」

洋子は首をふった。

「それはあたしたちも同じこと考えてた。あたしたち冒険して、いろいろなことをしたけど、結局木戸さんの「onte」のままに動いていた人形じゃなかつたかつて思つてた」

「あんたのなまつめのじるべ、ベジタベジタ逃げ出せぬでやへ。」
「ちでもええやなこか。

あんたらの冒険も、木戸はんの「ンテモ」とこちも精一杯頭をふりしほつて、じぶんの考え方で行動した結果やないか！

どっちやの考えがどっちやのほうに影響したなんてこと関係あらへん！

みんな自分の責任を果たした、それでええやないか？」
　“声”に山田はゆっくりとうなずいた。
「そうか、それでいいのかもしれないな」
市川、洋子、山田の順で窓をぐぐってなかへはいつていいく。三村
は外にとどまつたままだった。

穴の向こうで三村は「一ラ姫の肩を

穴の向い側で三村はローラ姫の肩をだき、つねづいた。「ええ、よくは一切のことを知ります」

ひし、と姫は三村にしがみついた。目にはいっぱいに涙がたまつていた。

「そうか」と吉田がうなづいた。

”声”が聞こえてくる。

これですべて終わったんや。三村まんは残るつちゅうじ」とやが、あんたは家に帰ることになる。

つにでもが、あんたらがやつた冒険の記憶は消えなかつたので

全員、抗議した。

「なんで？」

「そんなひどい……」

「あんたにそんな権利があるのか？」

“声”はかれらの抗議を無視した。

「権利も何も、あんたらにっこることを覚えていられるといつたことになるさかい、しゃあないわな……。さあ、これであんたらは元通りや……ほなご苦労はん……」

穴の向こうから強烈な光がさした。光のなかに穴の向こうの景色は溶けていく。だきあってこちらを見つめている三村とコーラ姫の姿も白く消えていった。

その光に市川、洋子、山田、木戸の四人は意識をうしなった。

ハピローグ（前書き）

ついにこの連載も終了です。
最初から読み通していただいたかた、ありがとうございました。

ハピローグ

だんだんだん……！
だんだんだん……！

市川は夢中になつてドアをたたいていた。

アニメ制作会社「タップ」の演出部屋である。今日中に「パックの冒険」の第一話の打ち合わせを済ませなければならぬのだが、監督の木戸がこの部屋にこもつたきり出てこないのである。

「木戸さん！ なにやつてんすかあ？ 打ち合わせはどうなつてんの？」

がちや……、ドアがかすかに開いた。市川ははつとばかりに飛び下がつた。

ドアが細めに開いて、そこから木戸監督の憔悴した顔がのぞく。「市川くんか……」

がりり、と市川はドアを引き開いた。なかなかむつとばかりに数日分のこもつたにおいがはなたれた。市川はうつ、とひるんだ。

「木戸さん、ゴンテはどうしたんです？」

山田は木戸につめよつた。

山田はあいまいにうなずいた。

「ああ、できてこるよ……」

洋子は反応した。

「できてる……？ 本当に？」

「ああ、そこに積んである」

「え？」

市川は一步、部屋に歩み寄ると木戸の動画机のそばに積まれている紙の束に気がついた。そのひとつを手にとるとぱりぱりとめくつていいく。

「本當だ……、しかも一十六話ぶん、できてら……！」

意外な成り行きに全員顔を見合わせた。

そして半年後……

都内某所の居酒屋で「タップ」のスタッフ全員が集合していた。

「乾杯！」

木戸監督の音頭で全員コップをささげもち乾杯をかわす。アニメシリーズ「パックの冒険」の終了打ち上げ会であった。なんとかかんとか無事シリーズが終了したので慰労会をしようということになつたのである。こうこうう慰労会はあまりやらないうのが普通だが、今回は特別だつた。

やあやあやあ、とおたがいコップにビールを注ぎおのののペースで飲み始めた。

「やあ、それにしても市川くんと洋子ちゃんが結婚するなんてなあ……」
山田は顔をまっかにしてにこにこと笑み崩れていた。この慰労会はふたりの結婚披露宴のかわりでもあつた。

山田の正面にはその市川と洋子のふたりが仲良く肩をならべてすわつてこる。そのふたりにスタッフがいれかわり、たちかわりやつてきてつぎつぎと献杯していつた。ふたりはそれをつましつましと受け、はやくもゆだつたような顔色になつていた。

「三田さんも一杯……」

言われて山田は顔をあげた。このシリーズの担当制作進行がビールをささげていた。山田はうなずいてコップをあげた。

「ああ、ありがとう。三村くんも飲んだりどうだい」
言われて制作進行は妙な顔になつた。

「また三村ですか？ ぼく、木村ですよ」

あれつ、と山田は首をすくめた。

「ああ、そつか……。すまん、すまん。つい間違えた……」

「山田さん……」

となりの木戸監督が山田の肩をたたいた。

「あんた、よく木村くんを三村くんと言い間違えるなあ。いつたい、

その二村といひ曲子になににあるのかい？」

「あ、と山田は首をひねつた。

まあいいや。山田はひとりうなずいた。とにかく「パックの冒険」はシリーズを終了したのだ。

山田は木戸にむきなおつた。

「しかし木戸さん。あんときはびっくりしたなあ」

「ん？ と、木戸は鎌首をあげた。

「なにしろ数日、演出部屋にこもつていたと思つたら、全二十六話ぶんのコント、ぜんぶ描きあげていたんだから。あのせいで、このシリーズは順調に終わつたようなものだ」

その山田の言葉にそろそろやう、と市川は同調した。

「おれもそう思つた。おれたち、てつくり木戸さんが部屋から出でこないんで、コント一枚もできないんじやないか、なんて思つてたんだぜ」

木戸はうわはははは……、と高笑いをあげた。その木戸に、番組プロデューサーが近づいてきた。

「木戸さん、半年間おつかれさまでした」

うん、と木戸はうなずいた。プロデューサーは木戸の隣にむりやり尻を落ち着けると、話しかけてきた。

「木戸さん。いい話があるんですよ」

「なに？」

「番組のスポンサーがシリーズのできに大変満足してましてね、それでぜひ続編をやりたい、と言つているんです」

「へえ……、と木戸は田をきらめかせた。

「そりやいいですねえ。ぼくも、あのシリーズの続編は考へていたんですよ」

ぞくり、となぜか山田はふたりの会話を聞いて寒気を感じていた。ふと前の市川と洋子のふたりを見ると、ふたりともいつぺんに酔いがさめたような表情になつてゐる。

なんか、とてもヤバイことになつてゐるんじやないか……？ こ

の状況にはなんだか覚えがありそつな……。

プロデューサーは続けた。

「こんども監督が全話数のコンテ、描いてくれるってことだ……」

「ああ、もちろん!」

木戸はおおきくうなずく。

山田は顔をあげた。

なんだかどこかで”声”が聞こえたよつな気がしたからだ。

「堪忍や……」

そんな”声”がどこからか聞こえたようだつた。

ハルローゲ（後書き）

感想、評価などぜひお願いします。これから励みになりますので
.....。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7465c/>

アニメのお仕事

2010年10月8日14時07分発行